

神戸学院大学心理学研究

第 7 卷 第 2 号

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2025 年 3 月 発行

神 戸 学 院 大 学 心 理 学 部

神戸学院大学心理学研究 第7巻 第2号 目次

研究報告

日本における Highly Sensitive Person (HSP) の心理学的研究の動向
——「美的感受性」因子に着目した文献的検討——

児童家庭支援センターかりん 川上 綾音 81
神戸学院大学心理学部 石崎 淳一

日常的解離にあたる空想と攻撃性の関連

神戸学院大学心理学研究科 岡田 太陽 91
神戸学院大学心理学部 竹田 剛

「道化師になること」のオートエスノグラフィ

——欠点・弱点が個性になるプロセスに関する一人称的研究——

神戸学院大学心理学部 岡村 心平 101

2024 年度卒業論文 題目一覧..... 117

2024 年度卒業論文 優秀論文要旨..... 121

2024 年度修士論文 要旨..... 123

2024 年度 活動報告..... 139

日本における Highly Sensitive Person (HSP) の 心理学的研究の動向 ——「美的感受性」因子に着目した文献的検討——

川上 綾音 児童家庭支援センターかりん 石崎 淳一 神戸学院大学心理学部

**A review of the psychological studies on Highly Sensitive Person (HSP) in Japan:
Examination of the importance of the "Aesthetic Sensitivity (AES)" factor**

Ayane Kawakami (Child and Family Support Center Karin)
Junichi Ishizaki (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

本研究は、日本におけるこれまでの Highly Sensitive Person (HSP) に関する心理学的研究について概観し、特に HSP の持つ「美的な感受性」に注目して検討することを目的とした。自己記入式の心理尺度として開発された Highly Sensitive Person Scale の日本版である HSPS-J19 を用い、HSP 特性と自尊感情や特性不安、精神的健康などの心理変数との関連を検討した文献 7 件を対象とした。結果、低感覚閾と易興奮性の因子と美的感受性因子とは結果が異なり、美的感受性因子は自尊感情などのポジティブな変数と正の関連を示した。すなわち HSP は高い感覚感受性の生きづらさのみを抱えて生きているわけではなく、むしろより多くのポジティブな感情が生起されることもあると考えられた。ただし、美的感受性因子の信頼性係数は $\alpha = .57$ であり、やや不安的な因子である。この因子の安定性について今後検討していくことが必要であろう。

Key words: Highly Sensitive Person, aesthetic sensitivity, psychological factor, Japanese study
キーワード：HSP, 美的感受性, 心理的要因, 日本の研究

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2025, Vol.7, No.2, pp.81-90

問題と目的

近年、「繊細な人」「HSP」という言葉がよく知られるようになってきている。それに伴って、「HSP」に関する出版物も目にするが増えている。HSP とは Highly Sensitive Person の略語であり、1990 年代に米国の臨床心理学者の Elaine Aron によって提起された。人口の 15% から 20% が HSP に当てはまるとされており (Aron & Aron, 1997)、発達障害などと比べて社会全体に対して占める割合がもともと高い。さらに、現代において SNS が広く普及していることなどにより認知度が上がっていると考えられる。そのため、本来の意味から離れて「HSP」という言葉が独り歩きしており、その概念や特性が正しく理解さ

れないまま、「自分は HSP なのではないか」と思っている人も多くいるように感じられる。

一般的に広く認知されてきていることやこれまでの海外の研究を考慮すると日本の学術的研究はまだ少数である。HSP についてのこれまでの日本の研究では、主観的幸福感との関連 (上野他, 2020)、資質的および獲得的レジリエンスとの関係 (平野, 2012) などの HSP に対する心理質問紙を用いた研究結果が報告されており、これらの研究では自尊感情の低さなどとの関連が示され、敏感であるが故の HSP のネガティブな部分に主に焦点が置かれている。しかし、HSP にはポジティブな側面も示唆されており、その典型的な性質は HSP を測定する心理尺度の中の下位因子である「美的感受性」因子である。この下位因

子は、日本において最もよく使用されている Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J: 高橋, 2016) でも採用されている。「美的感受性」因子について高橋 (2016) は、原版である Highly Sensitive Person Scale (HSPS: Aron & Aron, 1997) の開発過程で、感覚感受性¹の高い人の肯定的側面を表す性質を測定するものとして選択された項目から構成されているとしている。

Aron によればこの因子に示されるような HSP の性質は Jung のタイプ論の内向性に関わるものであり、その人の「感受性」と結びついたものである (Aron, 1996 富田訳 2008; Aron, 2004)。この因子について注目して検討していくことは、HSP の持つ肯定的な性質をより理解していくことにつながると考えられる。そして、こうした性質の評価には文化的な影響があると考えられ、米国で HSP と関連する内向性の人の強みについて述べた Helgoe の著書では北欧や日本の社会的性格が取り上げられている (Helgoe, 2013 向井訳 2014)。

以上のことから、本研究は、日本におけるこれまでの HSP に関する心理学的研究について概観するが、主に心理質問紙研究の結果を対象とし、特に HSP の持つ「美的な感受性」に注目して検討することを目的とする。そして、HSPS-J (高橋, 2016) の第 3 因子である「美的感受性」について、これまでの日本の心理学的な研究結果を整理して示し、HSP のポジティブな性質について考察することとする。

方 法

学術情報データベースである CiNii Articles と Psyc INFO, Psyc ARTICLES, google scholar で、2022 年 4 月から 2022 年 11 月に検索を行った。また、2024 年 10 月に再度検索結果を確認した。それぞれに「Highly Sensitive Person」, 「感覚処理感受性」, 「心理」というキーワードを入れて検索を行った。その中から日本の文献であることを条件に抽出した結果、26 件の文献が得られた。その結果、HSP およびその類似の概念を心理学的に測定するための複数の尺度が開発されていることを確認した。また、原版をもとに開発された日本語版の心理尺度 (HSPS-J) において原版の 4 項目からなる第 3 因子として美的感受性という下位因子が使用されていることも確認した。そのため、本研究では、26 件の文献のうちの HSP に対する心理尺度を用いた研究に関する文献を中心に報告する。

本研究は、上記で得られた文献から、まず HSP およびその類似概念を測定するために開発された心理尺度の研究に関する報告を行う。次に、その中から特に Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J: 高橋, 2016) を取り上げ、その尺度の構成について述べるとともに、HSPS-J と他の心理変数との関連を調

べた研究結果を整理して述べることとする。最後に、それらの結果をもとに HSP のポジティブな性質について考察を試みる。

結果と考察

Highly Sensitive Person (HSP) の概念

HSP の概念を提唱したのは Elaine Aron である (Aron, 1996 富田訳 2008)。Aron によれば、まず感覚処理感受性という概念を提起し、この感覚処理感受性が高い人を HSP とした。感覚処理感受性 (Sensory Processing Sensitivity: SPS) は、生得的な特徴で、感覚器自体ではなく感覚情報の脳内処理過程における基本的な個人特性のことを指すと定義づけられている (Aron & Aron, 1997)。これは正常な性質で、人類を含む高等動物の集団には一定の割合で刺激に対してより敏感に反応する個体が含まれており、その割合は全体の 15% から 20% であるという。そして、SPS の程度を測定するために Highly Sensitive Person Scale (Aron & Aron, 1997) が、自己記入式の心理尺度として開発された。

Highly Sensitive Person (HSP) を測定する心理尺度

日本で開発された Highly Sensitive Person (HSP) を測定する心理尺度

日本では、Highly Sensitive Person Scale (HSPS: Aron & Aron, 1997) を日本語に翻訳して信頼性と妥当性を検証した尺度である Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J) を高橋 が発表している (高橋, 2016)。この尺度は、原著者の Aron の許可の下に Aron & Aron (1997) の全 27 項目からなる HSPS を原版として原文にできるだけ忠実な日本語版を作成するためにバックトランスレーションの手続きを行ったものである。因子分析による信頼性の検討の結果から 8 項目が削除されて日本版は 19 項目からなる 3 因子構造の尺度であるとされた。これは HSP の提唱者である Aron の心理尺度を元に日本版を作成した尺度であり、最も代表的な HSP を測定する心理尺度であると考えられる。ただし日本ではその他にもいくつか HSP またはそれに類似する概念を測定する心理尺度が開発・作成されている。その中には自閉スペクトラム症との比較を視野に入れて開発・作成されているものもある。

それらの尺度が開発された論文について概要をまとめたものを Table 1 に示した。Table 1 には発表年の古い順に並べている。参考のために最初に Aron & Aron (1997) を示した。また、これらには相互に関連のある尺度があるので、そのことを注釈で表した。90 年代後半に米国の Aron らによって HSPS が開発

され、それから10年以上経過して日本では2010年代以降にこのような概念に対する心理尺度開発が行われたことが確認された。

まず、HSPの提唱者であるAron & Aron (1997)により一次元構造を想定した27項目のHighly Sensitive Person Scale (HSPS)が開発された。HSPまたはその類似の概念を測定するために、これまでに日本では5つの尺度が開発されている。

船橋(2013)は成人用感覚感受性尺度(Adult Sensory Sensitivity Index: ASSI)を開発した。この尺度は、SPSの概念に基づき、感覚感受性の高い成人を判別するための新たな尺度を作成することを目的として作られた(船橋, 2013)。これは日本における初めてのSPSを測定する心理尺度の開発の試みであったと考えられる。船橋(2013)は、HSPS(Aron & Aron, 1997)について、創造性や誠実性、美的な感受性までも含まれ、感覚感受性に限られた尺度ではないと指摘している。しかし、結果的に開発されたASSIにはそうした項目は取り入れられていない。28項目からなるASSIは1因子構造として提示され、感覚刺激域の低さとそれにともなう情動や認知の特徴を捉えられたとしている。信頼性係数は、全体が $\alpha = .88$ 、男性が $\alpha = .86$ 、女性が $\alpha = .90$ であり、神経症傾向(Big Fiveの情緒不安定性)などの強い関連が確認された。

高橋(2016)は、ASSIの開発を発表した後、さらにHighly Sensitive Person Scale 日本版(HSPS-J19)を作成した。これはAron & Aron (1997)のHSPSを原版として忠実に日本語でも使用可能なように翻訳したものであり、HSPS-J19はHSPの心理尺度として日本で最も広く使用されている。初めに原版に合わせて27項目のHSPS-Jが作られ、その信頼性と妥当性が検討された。HSPSは1因子が仮定されていたが、その後の研究によって3因子構造であることが指摘された(例えば、Smolewska et al., 2006)。探索的および確認的因子分析の結果、HSPS-Jは3因子構造が妥当であるとされ、因子負荷量の不十分な項目を削除し、残った19項目からなる心理尺度として開発された。そしてSmolewskaらの3因子モデルとほぼ同様の結果が確認され、第1因子からそれぞれ「低感覚閾」、「易興奮性」、「美的感受性」と命名された。各因子の信頼性係数は第1因子から順に $\alpha = .78$, $\alpha = .71$, $\alpha = .57$ で、全体では $\alpha = .78$ であった。またSpearman-Brownの公式を用いた折半法では、低感覚閾では.79、易興奮性では.67、美的感受性では.68であった。美的感受性因子の.57はやや低い信頼性係数であり、留意すべき点であると考えられる。なおこの尺度のさらに詳細は後の節で述べる。

飯村(2016)は中学生用感覚感受性尺度(SSSI)を開発した。この尺度は船橋(2013)が開発した成

Table 1

HSPに関連する心理尺度の開発論文

著者(発表年)	論文タイトル	調査対象者・参加者	項目数	回答形式	因子構造および因子名	信頼性係数
Aron & Aron (1997)*	Sensory-Processing Sensitivity and Its Relation to Introversion and Emotionality		27項目	7件法	一次元構造	研究6: $\alpha = .87$ 研究7: $\alpha = .85$
木村・余語・大坊 (2007)*3	日本語版情動伝染尺度(the Emotional Contagion Scale)の作成	関西圏の大学生250名 男性83名(平均年齢19.49歳)、女性167名 (平均年齢18.98歳)	11項目	4件法	第1因子: 愛情伝染 第2因子: 怒り伝染 第3因子: 喜び伝染 第4因子: 悲しみ伝染	1: $\alpha = .82$ 2: $\alpha = .65$ 3: $\alpha = .73$ 4: $\alpha = .66$
船橋 (2013) *2	成人用感覚感受性尺度作成の試み	I部: A大学の大学生351名(平均年齢20.00歳, 男性236名, 女性115名) II部: A大学の別の大学生271名(平均年齢19.35歳, 男性118名, 女性153名)	28項目	7件法	一次元構造	全体: $\alpha = .88$ 男性: $\alpha = .86$ 女性: $\alpha = .90$
高橋 (2016) *1	Highly Sensitive Person Scale 日本版(HSPS-J19)の作成	研究1: 4年制大学生319人(平均年齢19.96歳, 男性170名, 女性149名) 研究2: 4年制大学および専門学校の学生(平均年齢19.76歳, 男性150名, 女性219名)	19項目	7件法 (原版と同じ)	第1因子: 低感覚閾 第2因子: 易興奮性 第3因子: 美的感受性	全体: $\alpha = .78$ 1: $\alpha = .78$ 2: $\alpha = .71$ 3: $\alpha = .57$ Spearman-Brownの公式を用いた折半法(低感覚閾 .79, 易興奮性 .67, 美的感受性 .68)
飯村 (2016) *2	中学生用感覚感受性尺度(SSSI)作成の試み	東京都の中学生250名(男性119名, 女性112名, 性別無回答・不明19名, 1年生82名, 2年生168名)	14項目	5件法	第1因子: 易興奮性 第2因子: 環境変化に関する感受性	1: $\omega = .76$ 2: $\omega = .72$
串崎 (2019)	エンパス尺度(Empath Scale)の作成—高い感受性をもつ人(Highly Sensitive Person)の理解—	調査1: 大学生191名(平均年齢19.1歳, 男性81名, 女性108名, その他2名) 調査2: 大学生124名(平均年齢18.9歳, 男性38名, 女性85名)と別の大学生47名(平均年齢20.6歳, 男性3名, 女性44名)	9項目	7件法	第1因子: 気疲れ 第2因子: 情動吸収 第3因子: 情動直観	—
岐部・平野 (2019)	日本版青年前期用感受性尺度(HSCS-A)の作成	合計942名(中学生243名, 普通科高校1年生296名, 特別科高校403名)	11項目	7件法	第1因子: 易興奮性 第2因子: 美的感受性 第3因子: 低感覚閾	全体: $\alpha = .73$

注)

*1 高橋(2016)は、Aron & Aron (1997)の心理尺度の日本版を開発した。

*2 飯村(2016)は、船橋(2013)をもとに中学生に使用できる心理尺度を作成した。

*3 HSPとは異なる対象だが、同時期に発表された日本版心理尺度として対象の類似性があると考え、表に含めた。

人用感覚感受性尺度 (ASSI) に基づいて、その中学生用として作成された。原案 20 項目の仮尺度に対して因子分析をおこない、最終的に 12 項目からなる 2 因子構造が採用された。第 1 因子からそれぞれ「易興奮性」、「環境変化に関する感受性」と命名された。各因子の信頼性係数は第 1 因子から順に $\omega = .76$, $\omega = .72$ であった。ASSI 得点が上位 15% の HSP 群は非 HSP 群よりも不安度が高く、対人ストレス度が高いことが確認されると同時に共感性が高いことも示された。

串崎 (2019) はエンパス尺度 (Empath Scale) を開発した。エンパスは HSP と類似の概念であるが、一種の共感性の高さを示している。これは HSP において見られる特徴の一つであるが、その結果として対人関係での困難さが増す。この尺度は、HSPS の項目には少ない対人関係における困難性を捉えることを目的として作成された。複数の対象者による検討の結果、エンパス尺度の因子構造は 3 因子構造とされ、第 1 因子からそれぞれ「気疲れ」、「情動吸収」、「情動直観」と命名された。HSPS 短縮版と気疲れ、情動吸収にはそれぞれ低い有意な正の相関が見られた。情動直観とは無相関であった。

岐部・平野 (2019) は日本版青年前期用敏感性尺度 (HSCS-A) を作成した。この尺度は児童期青年期の感覚感受性を測定するために英国で開発された Highly Sensitive Child Scale (HSCS: Pluess et al, 2018) を原版とし、原著者の許可の下に特に中高生を対象とした日本語版尺度を作成したものである。因子分析等の結果、原版から 1 項目が削除された 11 項目 3 因子構造とされた。第 1 因子からそれぞれ「易興奮性」(5 項目)、「美的感受性」(4 項目)、「低感覚閾」(2 項目) と命名された。中学生と高校生を合わせた全サンプルの信頼性係数は $\alpha = .73$ であった。低いまたは中程度の下位因子間の有意な正の内部相関を認め、第 1 および第 3 因子は Big Five の神経症傾向と有意な正の相関を、第 2 因子は外向性、開放性との正の相関を認めた。

Highly Sensitive Person Scale (HSPS) のカットオフ

HSP に当てはまる可能性のある人口比について、Aron & Aron (1997) は 15% から 20% としているが、何らかの基準が定められているわけではない。したがって、心理尺度として HSPS で測定された結果、ある点数で HSP と非 HSP を区別するような基準点、すなわちカットオフ値のようなものは存在しないと考えられる。日本で開発・作成された尺度についても、本研究で扱った文献の中にカットオフ値について言及しているものはなかった。そのため研究で用いる場合は、Aron & Aron (1997) の「人口の 15% から 20% が HSP である」という認識などに基づき、一般集団の得点の高い順に上から 15% および 20% のサ

ンプルを「HSP 群」、それ以外を「非 HSP 群」などと分けて対象集団の分析および考察が行われている研究が多かった。

性 差

HSPS を開発した原版の調査結果では、女性は男性より有意に高い平均得点であることが報告されている (Aron & Aron, 1997)。ただし、これは生得的な性差というよりは、欧米の文化的な通念による結果だろうと論じられた。

高橋 (2016) の HSPS-J19 では、3 因子のいずれの因子も女性の得点は男性よりも高かった。平均値の差の検定 (t 検定) を行った結果、すべての因子で有意差が認められた。第 1 因子、第 2 因子、第 3 因子の全ての有意水準は 1% 以下であり、効果量はそれぞれ $d = 0.34, 0.47, 0.34$ であった。この性差について高橋は、Aron らと同様に男性は「敏感であるべきではない」という乳幼児期からの経験や学習によってたらされる社会的な影響を受けて、敏感さを尋ねる質問に対して低めに評価した可能性も考えられるとしている。

また、飯村 (2016)、串崎 (2019)、岐部・平野 (2019) は、それぞれ中学生用感覚感受性尺度 (SSSI)、エンパス尺度、日本版青年前期用敏感性尺度 (HSCS-A) を開発した。このうち、性差について言及しているのは HSCS-A のみであり、女子の方が男子よりも有意に点数が高かった。

尺度の点数の差ではなく、下位因子間の相関や他の類似の心理的な概念との相関において男女差が報告されているので、その点についても触れておく。成人用感覚感受性尺度 (ASSI) を開発した船橋 (2013) においては、HSPS に準じて 28 項目の一次元構造を想定しており、因子構造については言及されていない。妥当性の検討の中で、男性と女性を ASSI でそれぞれ高群と低群の 4 群に分け、ASSI と Big Five 尺度の短縮版 (20 項目) の情緒不安定性、日本版 State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の状態不安および特性不安との相関を算出した。女性の ASSI 高群ではそれらすべての尺度と有意な中程度の正の相関が見られたが、男性では ASSI 低群において ASSI と状態不安、特性不安との間に弱い有意な正の相関が見られた。

高橋 (2016) は、HSPS-J19 の下位尺度間の相関係数を男女別に検討した結果、第 1 因子と第 2 因子の間に男性は $r = .46$ 、女性は $r = .53$ と男女ともに有意な中程度の正の相関を示した。それに対して、第 1 因子と第 3 因子、第 2 因子と第 3 因子との間の相関は男女ともに有意な相関は見られないという結果であった。また、HSPS-J19 の 3 因子と複数の尺度の神経症傾向および向性を示す下位尺度との相関を男女別に検討した結果では、全体としては性別による相関係数に大きな違いはなかったとしている。

HSP-J の因子構造と「美的感受性」因子

因子構造については、Aron & Aron (1997) は一次元構造を想定して HSPS を開発した。しかし Table 1 に示す通り、日本では一次元構造を示す HSP を測定する尺度はなかった。

HSPS-J19 (高橋, 2016) では、27 項目の原案尺度に対して探索的因子分析を実施し、因子負荷量が .30 以下の 8 項目を削除した。残された 19 項目の尺度について、先行研究のモデルをもとに 2 因子構造モデルと 3 因子構造モデルを比較しながら、確認的因子分析を行った。その結果、HSPS-J19 は 2 因子構造モデルよりも 3 因子構造モデルの方がより適合したモデルであると考えられた。ただし、この尺度の第 3 因子である「美的感受性」因子については、信頼性係数が $\alpha = .57$ とあまり高い値にはならなかった。それまでの欧米の先行研究でも同様の傾向があり、やや不安定な因子であると言える。なお、この尺度は国際比較をするために原版と同じ項目数で調査を実施することができるよう全 27 項目の日本語訳がされている。19 項目で構成されている HSPS-J19 の項目については、Table 2 に示す。HSPS-J19 では、HSPS-J の 27 項目から 2, 6, 11, 15, 17, 18, 20, 24 の各項目が削除されている。

また、高橋は、この第 3 因子の因子名は「美的感受性」よりも「精神生活の豊かさ」のほうがより項目内容を反映していると考えられるが、これも国際比較を

する際のわかりやすさを考慮して因子名は欧米の先行研究に合わせたと述べている。

そして、高橋 (2016) は、「美的感受性」の因子について、HSPS 原版の開発過程で、感覚感受性の高い人の肯定的側面を表す項目として選択されたもので構成されているとしている。このことを第 1 因子や第 2 因子と比べ尺度の信頼性における安定性がないことの一因として挙げている。またこの因子は、第 1 因子および第 2 因子とは無相関であり、そのため HSPS-J19 を使用する際には因子別に他尺度との相関などを検討する必要があると指摘している。

また、HSPS-J19 (高橋, 2016) を用いた文献で「美的感受性」について、人生に対する満足度と自尊感情に対し美的感受性は正の関連を示していることから、精神生活の豊かさを反映している美的感受性を理解することは人生に対する満足度や自尊感情といった主観的幸福感を総合的に高めることが可能となる (上野他, 2020) という指摘も見られた。

Highly Sensitive Person (HSP) と他の心理変数との関連

日本における HSPS-J19 (HSPS-J) を用いて他の心理変数との関連を検討した 7 件の心理質問紙研究について取り上げた。そこでは、ソーシャルスキルおよび精神的回復力との関連 (赤城・中村, 2017)、運動習慣との関連 (矢野他, 2017)、不安や抑うつ、精

Table 2
HSPS-J19 の検査項目

No.	項目
第1因子 低感覚関	
25	大きな音や雑然とした光景のような強い刺激がわずらわしいですか？
9	大きな音で不快になりますか？
23	一度にたくさんのことが起こっていると不快になりますか？
19	いろいろなことが自分の周りで起きっていると、不快な気分が高まりますか？
7	明るい光や強いにおい、ごわごわした布地、近くのサイレンの音などにゾッとしやすいですか？
5	忙しい日々が続くと、ベッドや暗くした部屋などプライバシーが得られ、刺激の少ない場所に逃げ込みたくなりますか？
16	一度にたくさんのことを頼まれるとイライラしますか？
第2因子 易興奮性	
14	短時間にしなければならないことが多いとオロオロしますか？
3	他人の気分に左右されますか？
13	ビクッとしやすいですか？
26	競争場面や見られていると、緊張や動揺のあまり、いつもの力を発揮できなくなりますか？
1	強い刺激に圧倒されやすいですか？
4	痛みに敏感になることがありますか？
27	子供の頃、親や教師はあなたのことを「敏感だ」とか「内気だ」と見ていましたか？
21	生活に変化があると混乱しますか？
第3因子 美的感受性	
22	微細で繊細な香り・味・音・芸術作品などを好みますか？
12	自分に対して誠実ですか？
10	芸術や音楽に深く感動しますか？
8	豊かな内面生活を送っていますか？

出典 高橋 (2016) をもとに作成

神的健康、心身症状などの心身の不適応との関連（高橋・熊野, 2019）、自尊感情や過剰適応との関連（峯岸, 2019）、自尊感情や主観的幸福感との関連（上野他, 2020）、親からの不承認環境、推論の誤り、自傷行為との関連（土居・齋藤, 2021）、新型コロナウイルス感染症の影響に対する認知との関連（藤井, 2021）について報告されていた。全般的に、HSP であることは不安や心身症状、神的健康などのネガティブな感情や適応、行動と関連することが示唆されていた。

ただし、HSP の心理尺度の下位因子ごとに検討した結果では、ポジティブな性質を持つ因子があり、その他のネガティブな性質を持つ因子とは異なる結果が出ているものがあつた。その因子がネガティブな感情などを補うことができることも示唆されていた。例えば、HSP であっても順応的敏感さが高ければソーシャルスキルが高いことが示され、そして精神的回復力も高い可能性が示唆された（赤城・中村, 2017）。なお、この研究では HSPS の 27 項目は 2 因子とされ、「美的感受性」に相当する因子は「順応的敏感さ」と命名された。また特性不安や神的健康度などとの関連を検討した研究（高橋・熊野, 2019）では、美的感受性因子のみ、特性不安と負の関連、神的健康とは正の関連が示された（高橋・熊野, 2019）。そして、人生に対する満足度と自尊感情に対し、低感覚閾と易興奮性は負の関連、美的感受性は正の関連を示した（上野他, 2020）。一方、HSP 特性全体では不安や心身症状と正の関連、また神的健康と負の関連があることが確認された（高橋・熊野, 2019）。これらのことから美的感受性因子が心身に良い影響を及ぼすことが示唆されてはいるが、HSP 特性全体としては美的感受性因子の性質が打ち消されてしまうということが言えるだろう。

心理変数ではないが、日常での身体運動の実施頻度が高い程、また身体運動の継続年数が長いほど、SPS およびその下位概念が低い傾向にあることが示された。実施種目の特性との関係において、美的感受性のみにては団体種目・身体接触高頻度群の得点が団体種目・身体接触低頻度群よりも低いことが示されており、団体種目・身体接触低頻度群には、ダンスなどの芸術性が問われる種目が含まれることが要因の 1 つとして考えられた（矢野他, 2017）。また、過剰適応行動と HSP の関連について、過剰適応行動につながる過剰適応傾向を低くするためには、自尊感情を高めることが一定の効果があることが示唆されており、自尊感情は HSP 特性と負の相関が示されたことから、HSP 特性が自尊感情の低下を招き、それに伴って過剰適応傾向が高まる要因となっている可能性があると考えられた（峯岸, 2019）。

さらに、新型コロナウイルスの影響の認知との関連については、HSP 群の中でも HSP のポジティブな性質（HSPS-J の第 3 因子）が高い「全特性群」は内

面世界の充実に結びつけるのに対し、HSP のネガティブな特性のみが高い「ネガティブ特性群」は生活リズムが乱れて焦りや無気力感を抱えるという特徴があること、また「非 HSP 群」は行動面での制限に対する負担感を感じつつもネガティブな心理的影響はあまり認知していないという結果が示された（藤井, 2021）。そして、本人の気質的なものである高い HSP における母親からの不承認的態度は、認知バイアスである推論の誤りを誘起させ、その結果として自傷傾向を高めるリスクファクターとなることが示唆された（土居・齋藤, 2021）。

美的感受性と心理変数との関連

上記では HSPS-J19 と他の心理変数との関連を検討した心理学的研究について概要を述べた。さらにその中から「美的感受性」因子について特に取り上げ、考察したい。美的感受性因子に関する結果についてまとめたものを Table 3 に示す。

「美的感受性」の因子としての安定性

まず、ソーシャルスキル及び精神回復力との関連を検討した赤城・中村（2017）の研究では、研究内で行われた因子分析の結果、2 因子構造となった。そして、その項目から「美的感受性」に相当すると考えられる 4 項目からなる因子は先行研究（Evans & Rothbart, 2008）に合わせて「順応的敏感さ」と命名された。各下位尺度の信頼性係数は、第 1 因子は $\alpha = .85$ と高い信頼性が示されたが、第 2 因子は $\alpha = .54$ であつた。身体運動習慣との関連を検討した矢野他（2017）の研究では、美的感受性について検討はされているものの、因子分析を行っておらず、HSPS-J19 の下位因子をそのまま扱っている。この研究で収集されたデータについて、必ずしも 3 因子構造が示され得る結果であつたとは確定できない。同様に、心身の不適応との関連を検討した高橋・熊野（2019）の研究でも因子分析は行われておらず、下位因子の信頼性係数は検討されていない。全体の信頼性係数は $\alpha = .81$ であつたとしており、高橋（2016）による HSPS-J19 の全体の信頼性係数は $\alpha = .78$ であつたため、それより少し大きい値をとっていることが確認できる。HSP 特性と自尊感情が過剰適応に与える影響について検討した峯岸（2019）の研究も、HSPS-J19 の結果全体を「HSP 特性」として扱っており、因子分析はしていない。主観的幸福感との関連について検討した上野他（2020）の研究でも因子分析は行っておらず高橋（2016）の下位因子をそのまま用いている。

新型コロナウイルス感染症に対する認知について検討した藤井（2021）の研究では、3 因子モデルをもとに確認的因子分析を行った結果、尺度として使用可能であるが、適合の度合いとして低めであつたことを報告している。ここでは 3 因子構造が採用さ

Table 3

日本の研究論文の「美的感受性」因子に関する結果

著者（発表年）	各研究内での因子分析の有無	美的感受性因子の有無	美的感受性因子に関する研究結果および備考	心理変数等
赤城・中村（2017）	あり	（あり）	因子分析の結果、2因子構造となり、美的感受性と項目の類似する第2因子は「順応的敏感さ」と命名された。第2因子は $\alpha = .54$ であった。この因子が高いHSP群はHSPの否定的側面をカバーする可能性が示唆された。	ソーシャルスキル 精神的回復力
矢野他（2017）	なし	あり （高橋（2016）の下位因子をそのまま用いている）	団体実施かつ身体的接触の多い種目を実施する群では、美的感受性因子のみ他の群より低い結果になった。美的感受性は団体種目・身体接触低頻度群に分類された種目（特に新体操やダンス）は、美的な感覚や繊細さなどがパフォーマンス向上に有利に働くことが推測される。	身体運動の実施状況
高橋・熊野（2019）	なし	あり （高橋（2016）の下位因子をそのまま用いている）	精神的健康、開放性—正の相関関係 特性不安—負の相関関係 心身症状—相関なし 美的感受性に関しては、心身の適応とポジティブな関連を示す傾向があった。	特定不安・状態不安 心理的な原因による症状 性格特性5因子
峯岸（2019）	なし	—	HSPS-J19の結果全体を「HSP特性」として扱っており、下位因子別に検討を行っていない。	過剰適応傾向 過剰適応行動 自尊感情
上野他（2020）	なし	あり （高橋（2016）の下位因子をそのまま用いている）	人生に対する満足度: $r = .46, p < .001$ 自尊感情: $r = .42, p < .001$ 精神生活の豊かさを反映している美的感受性を理解することは人生に対する満足度や自尊感情といった主観的幸福感を総合的に高めることが可能となることが示唆された。	人生に対する満足度 自尊感情
藤井（2021）	あり （3因子モデルをもとにした 確認的因子分析）	あり	美的感受性を持ち合わせているHSP群は内面世界の充実に結びつけるが、そうでないHSP群は生活リズムが崩れることが原因で焦りや無気力感を抱える。	予備調査で作成された COVID-19に対する認知 現在の住居環境
土居・齋藤（2021）	なし	—	HSP特性を下位因子別ではなく、全体として検討しているため、美的感受性について検討されておらず言及していない。	母親・父親からの不承認 推論の誤り 自傷行為

れたとはいえ、「美的感受性」因子が安定していることは確認されていない。HSPと親からの不承認環境要因が自傷傾向に及ぼす影響について検討した土居・齋藤（2021）の研究は、HSP特性を下位因子別ではなく全体として検討しているため、美的感受性について検討されておらず言及もされていない。

このように、本研究で対象とした研究7件では、3因子構造として開発されたHSP-J19を使用し、それぞれの対象者における因子分析の結果でもなお3因子構造を示したと言えるものは存在しなかった。ただし、もとの理論的な3因子構造を尊重し、そもそも因子分析を実施していないものが多かった。7件のうち、因子分析の結果第3因子が消滅したのは1件、因子構造について記載がないものは2件、高橋（2016）の下位因子をそのまま用いているのは3件、確認的因子分析を用いて3因子構造を採用したものが1件であった。なお、因子分析の結果として3因子が消滅して2因子になった1件については、内容的には元の第1因子と第2因子が一つの因子となり、元の第3因子は第2因子となって残されたと考えられるが、これを元の第3因子と完全に同様のものと見なせるかどうかは明らかではないだろう。

また、3つの下位因子レベルでの解析をしている研究においても、独自の因子分析がなされておらず高橋（2016）の下位因子がそのまま採用されているか、

確認的因子分析の結果、数値の低さは目立ったが高橋（2016）とほぼ同じ値であったため採用したかの2通りであった。それぞれの研究データにおいて探索的に因子分析を行って見出したものではなく、これまでの日本の研究においてはHSP-J19の3因子構造が妥当であると考えerには報告が不足していると考えられる。

美的感受性と関連のある心理変数

上記に述べたように、HSP-J19の第3因子である「美的感受性」については、下位因子としての安定性に疑問が提起されるものの、HSPをめぐる理論的な観点からこのような因子が含まれることの意義は尊重されるべきであろう。そこで、以下に7つの研究が報告している美的感受性と関連のある変数について整理しておきたい。

ソーシャルスキル及び精神回復力との関連を検討した赤城・中村（2017）の研究では、「美的感受性」に相当すると考えられる因子は「順応的敏感さ」と命名された。そして、HSPの2群と非HSP群による3群での比較をおこない、ソーシャルスキル、精神的回復力ともに、「感覚処理感受性」が高くても「順応的敏感さ」が高ければその困難さをカバーできる側面があることが示された。これは美的感受性のポジティブな効果を指摘していると言えるだろう。身

体運動習慣との関連では、身体接触の多い団体種目で美的感受性因子は他の群より低い結果であった。しかし、身体接触の少ない団体種目では美的感受性の特性が有利に働くことが推測されるという考察がなされた。この研究では、身体接触の少ない団体種目の中に、新体操やダンスが含まれており、特にこれらの競技においては美的な感覚や繊細さなどがパフォーマンス向上につながる可能性が示唆された。

心身の不適応との関連では、精神的健康、性格特性の開放性と美的感受性因子に正の相関関係が、また特性不安とは負の相関が見られたが、心身症状とは無相関という結果であった。そして、重回帰分析において特性不安や精神的健康を説明する有意な変数であった。そのため、著者らは美的感受性に関して、心身の適応とポジティブな関連を示す傾向があったとしている。主観的幸福感との関連では、美的感受性因子は人生に対する満足度および自尊感情とはそれぞれ中程度の正の相関という結果が示され ($r = .46, p < .001$), 重回帰分析でも有意な説明変数であった。そのため、「精神生活の豊かさを反映している美的感受性を理解することは、人生に対する満足度や自尊感情といった主観的幸福感を総合的に高めることが可能となることを示唆している」と指摘された。新型コロナウイルス感染症に対する認知との関連では、美的感受性を持ち合わせている HSP 群は内面世界の充実に結びつけるが、そうでない HSP 群は生活リズムが崩れることが原因で焦りや無気力感を抱えると考えられた。

上記のような結果から、美的感受性は、主にポジティブな心理変数などに関連があることがいくつかの研究で報告されていることがわかった。精神的健康および開放性と正の相関、特性不安と負の相関、人生に対する満足度および自尊感情と正の相関が見られたなどという報告から、美的感受性には、精神的生活を豊かに送ることができる可能性が潜んでいると言えるだろう。このような特性を持つ HSP は必ずしも生きづらさのみを抱えて生きているわけではなく、そうでない人より多くのポジティブな感情が生起されることもあり、それらの特性を理解したうえで生活することで、より豊かな生活を送ることも可能となると考えられる。

終わりに

本研究は、日本における HSP の研究について概観すること、そして特に HSP を「美的な感受性」の視点に注目して検討することを目的とした。学術情報データベースで検索を行い見つかった文献のうち、心理尺度に関する文献を中心に扱った。HSP およびその類似した概念を測定するために開発された心理尺度について確認し、また HSPS-J19 を取り上げて他の心理変数との関連を調べた研究について整理して

述べた。

HSP は、Aron & Aron (1997) によって提唱された概念であり、生得的な特徴であり感覚器自体ではなく感覚情報の脳内処理過程における基本的な個人特性のことを指す SPS が高い人のことを HSP としている。その HSP 特性を測定するために開発された心理尺度について、Aron & Aron (1997) の HSPS と日本で作成された 5 つの尺度論文について検討した。その中では因子構造は 1 因子、2 因子、3 因子の尺度があった。Aron & Aron (1997) と高橋 (2016)、船橋 (2013) と飯村 (2016) のように、先に作成された尺度をもとに日本版や違う年齢を対象としたものを作成している尺度があった。よって、日本における感覚処理感受性を測定する心理尺度の種類は、それほど多くないと考えられる。そして、因子構造について、本研究で扱った尺度論文のうち、日本の心理尺度では下位因子を想定していないものが 1 件、3 因子構造を採用しているものが 3 件、2 因子構造を採用しているものが 1 件という結果であった。

これらの心理尺度から HSPS-J19 を取り上げ、その下位因子である美的感受性因子について検討した。HSPS-J19 を用いた 7 件の日本の研究について述べた。その結果、心身の不適応や過剰適応など、ネガティブな心理特性との関連が多く研究されていることがわかった。一方、美的感受性因子に関する結果は、精神的回復力や人生に関する満足度、自尊感情と正の相関を示すなどポジティブなものも多く見られた。これらの結果から、美的感受性には精神的生活を豊かに送ることができる可能性が潜んでいると言え、HSP 特性の強みと考えられる結果となった。ただし、美的感受性因子の安定性は、今後より一層の検討が必要である。本研究で対象とした 7 件の研究のうち、HSP-J19 (高橋, 2016) の下位因子をそのまま用いているものが 3 件、確認的因子分析を用いて 3 因子構造を採用しているものが 1 件であり、探索的に因子構造を検討したものではない。また因子分析にかけた結果、第 3 因子が消滅した研究が 1 件見られた。そして、1 因子を想定したものが 1 件、2 因子となったものが 1 件であった。

最後に、HSP について国外の文献についても広く考慮し、多文化間で検討していくことが今後の課題であると考えられる。本研究ではわが国の研究に焦点を当て検討を行ったが、海外の HSP 研究に対して日本の研究報告は少ないという現状がある。今後、日本と諸外国の研究報告をもとに、HSP を測定する心理尺度とその文化差などについて更に比較検討することが必要であると考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反の関連事項はない。

引用文献

- 相川 充・藤田 正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 I 部門, 56, 87-93.
- 赤城 知里・中村 真理 (2017). 感覚処理感受性とソーシャルスキル, 精神的回復力の関連性の検討 東京成徳大学臨床心理学研究, 17, 59-67.
- Aron, E. N (1996). *The Highly Sensitive Person: How To Thrive When The World Overwhelms You* New York : Carol Pub. Group 富田香里 (訳) (2008). ささいなことにすぐに「動揺」してしまうあなたへ 講談社
- Aron, E. N., & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73(2), 345-368. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.73.2.345>
- Aron, E. N (2004). Revisiting Jung's concept of innate sensitiveness. *Journal of Analytical Psychology*, 49, 337-367. <https://doi.org/10.1111/j.1465-5922.2004.00465.x>
- 土居 正人・三宅 俊治・園田 順一 (2013). 自傷行為尺度作成の試みとその検討 心身医学, 53(12), 1112-1119. https://doi.org/10.15064/jjpm.53.12_1112
- 土居 正人・齋藤 菜摘 (2021). HSP (Highly Sensitive Person) と親からの不承認環境要因が自傷傾向に及ぼす影響——推論の誤りによる媒介分析—— 自殺予防と危機介入, 41(1), 18-24. https://doi.org/10.51098/spcijasp.41.1_18
- Endo, S., Kanou, H., Oishi, K. (2012). Sports Activities and Sense of Coherence (SOC) among College Students. *International Journal of Sport and Health Science*, 10, 1-11. <https://doi.org/10.5432/ijshs.201114>
- Evans, D. E., & Rothbart, M. K. (2008). Temperamental sensitivity: Two constructs or one? *Personality and Individual Differences*, 44(1), 108-118. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2007.07.016>
- Helgoe, L. (2013). *Introvert Power: Why Your Inner Life Is Your Hidden Strength* (2nd ed.) US. Sourcebooks. (ヘルゴー, L. 向井 和美 (訳) (2014). 内向的な人こそ強い人 新潮社)
- 福井 至 (1997). Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS) 開発の試み 行動療法研究, 23(2), 83-93. https://doi.org/10.24468/jjbt.23.2_83
- 藤井 恭子 (2021). Highly Sensitive Person (HSP) 特性を持つ大学生の新型コロナウイルス感染症の影響に対する認知の特徴 教育学論究, 13, 105-115.
- 船橋 亜希 (2013). 成人用感覚感受性尺度作成の試み 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12(2), 29-36.
- 平野 真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討—もともとの「弱さ」を後天的に補えるか— 教育心理学研究, 60(4), 343-354. <https://doi.org/10.5926/jjep.60.343>
- 飯村 周平 (2016). 中学生用感覚感受性尺度 (SSSI) 作成の試み パーソナリティ研究, 25(2), 154-157. <https://doi.org/10.2132/personality.25.154>
- 岐部 智恵子・平野 真理 (2019). 日本版青年前期用感性尺度 (HSCS-A) の作成 パーソナリティ研究, 28(2), 108-118. <https://doi.org/10.2132/personality.28.2.1>
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成—— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 串崎 真志 (2019). エンパス尺度 (Empath Scale) の作成——高い感性をもつ人 (Highly Sensitive Person) の理解—— 関西大学人権問題研究室紀要, 77, 37-54.
- 峯岸 佳 (2019). HSP 特性と自尊感情が過剰適応に与える影響について——生きづらさの考察—— 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 16, 153-169.
- Nakano, K., & Kitamura, T. (2001). The relation of the anger subcomponent of Type A behavior to psychological symptoms in Japanese and foreign students. *Japanese Psychological Research*, 43, 50-54. <https://dx.doi.org/10.1111/1468-5884.00159>
- 中里 克治・下仲 順子・権藤 恭之・高山 緑 (1996). 改訂版 NEO 人格インベントリー (NEO-PI-R) 標準化の試み (V) ——短縮版としての NEO-FFI の作成—— 日本性格心理学会大会発表論文集, 5, 70-71. https://doi.org/10.24534/jjpjsppp.5.0_70
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44(1), 11-22. https://doi.org/10.5926/jjep1953.44.1_11
- Pluess, M., Assary, E., Lionetti, F., Lester, K. J., Krapohl, E., Aron, E. N., & Aron, A. (2018). Environmental sensitivity in children: Development of the Highly Sensitive Child Scale and identification of sensitivity groups. *Developmental Psychology*, 54(1), 51-70. <https://doi.org/10.1037/dev0000406>
- 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 清水 秀美・今榮 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29(4), 348-353. https://doi.org/10.5926/jjep1953.29.4_348
- Smolewska, K. A., McCabe, S. B., & Woody, E. Z. (2006). A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory-processing sensitivity and their relation to the BIS/BAS and "Big

- Five". *Personality and Individual Differences*, 40(6), 1269–1279. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2005.09.022>
- 角野 善司 (1994). 人生に対する満足度 (the Satisfaction with Life Scale: SWLS) 日本版作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 192.
- 鈴木 伸哉・五十嵐 祐・吉田 俊和 (2015). 愛着スタイルとしての関係不安と過剰適応行動が恋愛関係における親和不満感情に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 15, 63-69. <https://doi.org/10.18910/54438>
- 高橋 亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSP-J19) の作成 感情心理学研究, 23(2), 68-77. https://doi.org/10.4092/jsre.23.2_68
- 高橋 徹・熊野 宏昭 (2019). 日本在住の青年における感覚処理感受性と心身の不適応の関連——重回帰分析による感覚処理感受性の下位因子ごとの検討—— 人間科学研究, 32(2), 235-243.
- 上野 雄己・高橋 亜希・小塩 真司 (2020). Highly Sensitive Person は主観的幸福感が低いのか? ——感覚処理感受性と人生に対する満足度, 自尊感情

- との関連から—— 感情心理学研究, 27(3), 104-109. https://doi.org/10.4092/jsre.27.3_104
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-64. https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.1_64
- 矢野 康介・木村 駿介・大石 和男 (2017). 大学生における身体運動習慣と感覚処理感受性の関連 体育学研究, 62(2), 587-598. <https://doi.org/10.5432/jjpehss.17017>

脚 注

¹ 感覚感受性または感覚処理感受性という表現は、その文中で言及している先行研究の表現などを尊重して使用したが、本論文において両者の概念的区別はしていない。

—2025.1.6 受稿 2025.1.17 受理—

日常的解離にあたる空想と攻撃性の関連

岡田 太陽 神戸学院大学心理学研究科 竹田 剛 神戸学院大学心理学部

The relationship between fantasy as a form of everyday dissociation and aggression

Taiyo Okada (*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Tsuyoshi Takeda (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究では空想と攻撃性との関連の検討を行った。大学生 178 名(男性 74 名, 女性 103 名, その他 1 名)を対象に BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた質問紙を用いた質問紙調査を行った。各空想内容と性別を独立変数, 各攻撃性と全攻撃性を従属変数として二要因分散分析を行った結果, 空想の有無・空想内の自死の有無・他死の有無において主効果が見られた。空想の有無では短気性・敵意性・身体的攻撃性・全攻撃性の 4 つ, 空想内の自死の有無では短気性・敵意性・全攻撃性の 3 つ, 空想内の他死の有無では敵意性の 1 つで主効果が見られた。そのすべての結果から, 空想は攻撃性と関連のある日常的解離であり, 行動化する前の攻撃性が高いほど, 自身が被害を受ける空想を行うことが示された。これは現実世界における欲求不満, すなわちうまくいかないという被害が, 空想内においても自身が被害を受けるという内容として表れているのだと考えられる。

Key words: everyday dissociation, fantasy, aggression

キーワード: 日常的解離, 空想, 攻撃性

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2025, Vol.7, No.2, pp.91-99

問題と目的

解離とは, DSM-5 では解離症群とされ「意識, 記憶, 同一性, 情動, 知覚, 身体表象, 運動制御, 行動の正常な統合における破綻 (disruption) および/または不連続 (discontinuity)」という特徴を持つと定義されており, この解離体験のしやすさは解離傾向と呼ばれている (吉住, 2010)。しかし, この解離は健常者においても空想などの比較的軽度で一時的な解離体験は生じるとされている (田辺, 2002)。こういった健常者が日常的に経験し得る解離は日常的解離や非病的解離, 正常解離とされ, 「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「出来事の詳細健忘」「近距離への遁走」「自己の客体化」「感覚の鈍化」の 8 つに分類できるとされる (舩田, 2008)。

このような, いわば日常的解離は葛藤の解消や感情のカタルシスなどの感情制御に関する適応的機能があるとされ (Putnam, 1993), 同時に, 大学生に対する質問紙を使用した研究によると未成熟な防衛機

制から構成される「極端思考・他者攻撃」と中程度の正の相関も持つことが示されている (吉住・村瀬, 2008)。また, 男性受刑者に対する質問紙を使用した研究によると解離経験は自傷行為といった攻撃性や衝動性の要素を持った不適応と関連するとされており (Matsumoto et al., 2005), これは女性の入院患者に対する研究においても同様の結果が見られている (Zlotnick et al., 1996)。

ここでいう攻撃性とは, 他の個体に対して危害を加えようと意図された行動を引き起こす内的過程の事である。攻撃性を測定する BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (安藤他, 1999) では攻撃性は, 怒り・敵意・攻撃行動によって構成される複合的な症候群という形で表出されると考えられており, 情動的側面である「短気」, 認知的側面である「敵意」, 攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の 4 つの下位尺度が 5 件法で捉えられている。「短気」は怒りっぽさや怒りの抑制の弱さといった怒りの喚起されやすさ, 「敵意」は他者からの悪意や軽

視など猜疑心や不信感といった他者に対する否定的な信念・態度、「身体的攻撃」は暴力反応傾向や暴力への衝動、暴力への正当化といった身体的な攻撃反応、「言語的攻撃」は自己主張や議論好きといった言語的な攻撃反応である。

以上のことから解離傾向が高いと攻撃性が高いと言え、間接的に攻撃性を測るような活用が可能ではないだろうか。しかし、意識や記憶の統合が失われる病的な解離状態を観測することは、解離している本人及び第三者においても容易でないと考えられる。他、病的な解離はストレス障害や、愛着障害などその他の要因も考えられる。また、病的解離は実際に体験した者や体験する機会も少なく、結果的に活用する機会も少なくなるだろう。そこで、日常的解離であれば実際に体験した者や体験する機会も多く活用機会も多いと推測できる。また、Ludwig (1983) によると、解離は効率的な生活に必要なとされる行動の自動化のための本来、人に携わった適応的機制であり、その適応性が破綻した場合に病理化に発展するという。しかし、上記の日常的解離の 8 分類を例に上げると、自動行動や同時行動は適応的な解離と考えられるが、破綻しても攻撃性などに関連があるとは考えにくい。つまり解離の中には攻撃性に関連のある下位尺度と関連のない下位尺度があると考えられ、分類が可能ではないだろうか。しかし、日常的解離の 8 分類をはじめとした解離の下位尺度の詳細や攻撃性の下位尺度との関連の検討は少ない。そこで、日常的解離の下位尺度と攻撃性の検討を行うことでより正確な活用が期待できると考えられる。

日常的解離の 8 分類の内、舩田 (2008) の研究によると「出来事の詳細健忘」「自己の客体化」「感覚の鈍化」は外傷的状况によって生じるとされている。また、「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「近距離への遁走」の下位尺度についても何等かの行動を目的またはきっかけとしていると考えられることから、上記の 7 つの下位尺度は何らかの外的要因が起因していると考えられる。他、体験の有無や状況以外の内容については得られる情報が少ない。対して、残る「うわの空・空想」については、退屈などの環境によって起因することは考えられるものの何かの刺激によって起因することは少ないと考えられ、中でも空想においては体験の有無や状況の他に、空想内容というより内面的な内容を調査することができるだろう。また、空想は意識明瞭でありながら、夢のように無意識的且つ自由な内容であり、より個人の内面が現れやすいと考えられる。

上記であげた先行研究のように、空想を扱う多くの研究で空想は「うわの空」といった物と並んで扱われているため「何かを他の事を考えている」といった意味合いで扱われていると考えられる。しかし、そうすると予定などの何らかの状況や行動、目的がある考えも含まれるため、自由な内容という要素が

薄くなってしまう。そのため本研究では考える内容によって分類し、その日の買い物の予定などの現実的に起こる又は起こり得る内容の思考を「想像」、魔法を使用するなどの現実には起こらない又は起こりにくい内容の思考のうち、現実には起こらないと自覚できていない思考を「妄想」、現実には起こらないと自覚した思考を「空想」と定義し、空想のみを取り扱う。

以上を踏まえ、本研究では上記の 8 分類における「うわの空・空想」、特に空想と攻撃性との関連を BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた質問紙を用いて検討をおこなう。

その結果、日常的解離の内の空想において他者を傷つけるなどの攻撃的な傾向がある場合に攻撃性が高いといった正の相関結果が出れば、空想は攻撃性に関連のある下位尺度であると言えるだろう。一方で Lynn & Rhue (1988) によると空想は孤独や苦痛、怒りに対して適応的あるいは補償的に機能する可能性があるとされており、空想が攻撃性に関連があるものの適応的に働いている場合は、空想内において他者を傷つけるなどの攻撃的な傾向があると同時に、怒りの情緒的側面の「短気」尺度と怒りの認知的側面の「敵意」も高いものの、実際の攻撃反応である「身体的攻撃」「言語的攻撃」の 2 つの尺度は低くなると考えられる。

方 法

調査時期

本研究における調査は 2023 年 7 月 20 日～7 月 23 日と同年 7 月 25 日に実施した。

調査対象者

本研究における調査対象者は、私立大学に通う大学生 178 名（男性 74 名、女性 103 名、その他 1 名）であり、平均年齢は 18.9 歳 ($SD=1.02$) であった。

質問紙の構成

本調査における質問紙はフェイスシート、攻撃性に関する質問項目、最近の空想に関する質問項目から構成されている。

フェイスシートでは、調査対象者の調査参加の同意の有無、性別、年齢について回答を求めた。調査参加の同意の有無の項目では、調査の参加が自由な意思に基づいていることを明記した。

攻撃性に関する質問項目は BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤他, 1999）を用いた。BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙は Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) を日本版に作成された 24 項目の質問紙で

あり、攻撃性を情動的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」、攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の4つの下位尺度を5件法で捉えたものである。各尺度の構成は、短気尺度は「かっとなることを抑えるのが難しいときがある」等の5項目、敵意尺度は「陰で人から笑われているように思うことがある」等の7項目、身体的攻撃尺度は「どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない」等の7項目、言語的攻撃尺度は「意見が対立したときは、議論しないと気がすまない」等の5項目、全24項目である。この質問紙の信頼性はクロンバックの α 係数をはじめとした複数の方法で認められており、妥当性についても因子の妥当性をはじめとした複数の方法で認められている。

最近の空想に関する質問項目は今回の調査で新たに作成した。日常解離についての尺度や空想についての質問紙はあるものの、解離や空想のグループ化、空想の目的や理由、影響について聞くものが散見され、空想内容について聞くものは無いため今回新たに作成した。質問内容は、空想の有無、空想を行う状況や程度、空想の詳細、夢の詳細、空想に対する意識、について聞くものに分かれている。また、空想について聞く際、上記の「現実には起こらないこと・起こりにくいことの想像」という空想の定義を示した。

(1) 空想の有無では過去や最近の空想の有無と攻撃性の関連を調べるために「空想経験の有無」「最近の空想の有無とその程度」について回答を求めた。

(2) 空想の状況や程度では空想の頻度や日常生活への影響度と攻撃性の関連を調べるために「最近の空想を行った状況」「空想による日常生活への影響の有無と詳細」「空想による日常生活への影響の程度」「最近の空想の反芻の有無と一貫性」「最近の空想の反芻期間」について回答について回答を求めた。

(3) 空想の詳細では、空想の非現実性や空想内における自傷・他傷度と攻撃性の関連を調べるために「最近の空想の具体的な詳細」「最近の空想の題材の有無と題材内容」「最近の空想の非現実部分」「最近の空想の非現実度」「最近の空想における自傷度」「最近の空想における他傷度」「最近の空想における他生物傷度」「最近の空想における他物傷度」「最近の空想における自身の死の有無」「最近の空想における自分以外の人の死ぬ数」「最近の空想における人以外の生物の死ぬ数」「最近の空想における生物以外の物の壊れる数」「最近の空想における自身の救いの有無」「最近の空想における自分以外の人を救う数」「最近の空想における人以外の生物を救う数」「最近の空想における生物以外の物を救う数」について回答を求めた。

(4) 空想の詳細についての回答を求める途中、空想内における自傷度・他傷度についての回答を促すための練習として、その直前に回答を求めた夢の詳細

細では「過去の夢における自傷度」「過去の夢における他傷度」「過去の夢における他生物傷度」「過去の夢における他物傷度」について回答を求めた。

(5) 空想に対する意識では、攻撃性との関連を調べるために「空想を行う理由」「空想を行わない理由」について回答を求めた。

「空想を行わない理由」は、上記の「空想経験の有無」において、ないと回答した場合に、その後の質問項目を全て省略し、自由記述で回答を求めた。

手続き

本研究における調査では、調査の概要、上記のフェイスシート、攻撃性に関する質問項目、最近の空想に関する質問項目から構成された質問紙を Qualtrics で作成した。質問紙の配布は大学教員2名に依頼し、それぞれの教員が担当している講義において配布を行った。配布時、調査参加は自由な意思に強制されるものではないこと、名前などの個人を特定できるものも一切収集せず、回答内容のみを取り扱うこと、回答は調査用のサーバー上で暗号化・保存され、研究終了後にすべてのデータを削除すること、質問紙の主な構成、調査実施者について説明し、同意する者のみ回答を続けるよう促した。

結果

空想経験の有無と攻撃性の関連

まず、空想経験の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均値と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表1～3に示す。

表1

男性の空想経験の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	空想経験あり(n=57)		空想経験なし(n=17)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	14.3	4.12	10.5	3.97
敵意	18.6	4.78	16.5	4.60
身体的攻撃性	17.9	5.08	14.5	5.17
言語的攻撃性	16.1	3.90	15.7	4.66
全攻撃性	67.0	10.99	57.1	13.44

表2

女性の空想経験の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	空想経験あり(n=81)		空想経験なし(n=22)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.3	4.59	11.6	3.02
敵意	18.4	5.28	14.5	4.09
身体的攻撃性	13.5	4.83	11.3	4.31
言語的攻撃性	14.3	3.63	14.3	3.86
全攻撃性	59.4	12.39	51.6	7.48

表 3

全体の空想経験の有無における各攻撃性および
全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	空想経験あり($n=138$)		空想経験なし($n=39$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.7	4.42	11.1	3.46
敵意	18.5	5.06	15.3	4.38
身体的攻撃性	15.3	5.39	12.7	4.91
言語的攻撃性	15.0	3.84	14.9	4.23
全攻撃性	62.5	12.38	54.0	10.71

次に空想経験の有無と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表 4 に示す。

その結果、空想経験の有無による主効果が見られたのは、短気性 ($F(1, 173)=12.58, p<.001$)、敵意性 ($F(1, 173)=11.37, p<.001$)、身体的攻撃性 ($F(1, 173)=9.88, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 173)=17.33, p<.001$) であった。性別による主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 173)=18.28, p<.001$)、言語的攻撃性 ($F(1, 173)=5.49, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 173)=9.61, p<.01$) であった。また、空想経験の有無と性別による各攻

撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、空想を行ったことがない人よりも行ったことがある人の方が短気性、敵意性、身体的攻撃性、全攻撃性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 4

各攻撃性および全攻撃性についての空想経験の有無と
男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	空想の有無		性別		交互作用	
	F 値	有意差	F 値	有意差	F 値	有意差
短気	12.58***	有>無	0.00	n.s.	1.97	n.s.
敵意	11.37***	有>無	1.54	n.s.	0.99	n.s.
身体的攻撃性	9.88**	有>無	18.28***	男>女	0.49	n.s.
言語的攻撃性	0.09	n.s.	5.49*	男>女	0.10	n.s.
全攻撃性	17.33***	有>無	9.61**	男>女	0.24	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

空想内の自傷度と攻撃性の関連

まず、空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表 5～7 に示す。

表 5

男性の空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない($n=23$)		身体が傷付く($n=11$)		心が傷付く($n=10$)		心身共に傷つく($n=10$)		自分は登場しない($n=3$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.8	4.90	13.9	3.08	14.8	4.13	15.2	3.46	14.7	5.03
敵意	17.8	4.69	16.7	4.45	21.7	2.91	19.5	5.42	18.3	7.02
身体的攻撃性	17.0	4.55	19.5	4.55	18.2	5.49	19.1	6.74	14.7	2.08
言語的攻撃性	16.3	3.74	16.8	3.34	15.3	3.34	17.0	4.97	12.7	5.13
全攻撃性	64.9	9.19	66.9	11.00	70.0	12.85	70.8	12.24	60.3	14.01

表 6

女性の空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない($n=51$)		身体が傷付く($n=4$)		心が傷付く($n=17$)		心身共に傷つく($n=7$)		自分は登場しない($n=2$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	12.7	4.75	14.8	2.75	14.3	3.85	15.3	5.12	9.5	6.36
敵意	17.3	5.59	18.8	3.40	19.7	3.43	23.1	5.40	18.5	4.95
身体的攻撃性	17.0	4.55	19.5	4.55	18.2	5.49	19.1	6.74	14.7	2.08
言語的攻撃性	16.3	3.74	16.8	3.34	15.3	3.34	17.0	4.97	12.7	5.13
全攻撃性	57.3	12.52	61.3	6.75	61.7	7.88	69.3	18.39	53.5	14.85

表 7

全体の空想内の自傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない($n=74$)		身体が傷付く($n=15$)		心が傷付く($n=27$)		心身共に傷つく($n=17$)		自分は登場しない($n=5$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.0	4.79	14.1	2.92	14.5	3.89	15.2	4.07	12.6	5.55
敵意	17.5	5.30	17.3	4.18	20.4	3.34	21.0	5.56	18.4	5.55
身体的攻撃性	14.2	5.09	17.9	4.65	15.7	4.80	17.5	7.38	13.4	2.30
言語的攻撃性	15.0	3.77	16.1	3.33	14.2	3.35	16.5	4.89	13.2	3.96
全攻撃性	59.7	12.05	65.4	10.15	64.7	10.60	70.2	14.55	57.6	12.93

次に空想内の自傷度と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表8に示す。

その結果、空想内の自傷度による攻撃性への主効果が見られたのは、敵意性 ($F(4, 128)=3.14, p<.05$)、全攻撃性 ($F(4, 128)=2.59, p<.05$) であった。しかし、Tukey HDS 法を用いた多重比較によるとどちらの攻撃性においても、どの自傷度の間にも有意差は見られなかった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 128)=10.58, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 128)=3.99, p<.05$) であった。また、空想内の自傷度と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、自身が傷付かない空想をする人よりも、傷付く空想をするの方が敵意性、全攻撃性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 8

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の自傷度と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	自傷度		性別		交互作用	
	F値	有意差	F値	有意差	F値	有意差
短気	1.09	n.s.	1.09	n.s.	0.47	n.s.
敵意	3.14*	高>低	0.27	n.s.	1.01	n.s.
身体的攻撃性	1.15	n.s.	10.58**	男>女	0.09	n.s.
言語的攻撃性	1.00	n.s.	1.81	n.s.	0.28	n.s.
全攻撃性	2.59*	高>低	3.99*	男>女	0.26	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

注)____は分散分析では有意差は見られたものの、多重比較では有意差が見られなかったもの。

空想内の他傷度と攻撃性の関連

まず、空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表9～11に示す。

次に空想内の他傷度と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行っ

表 9

男性の空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない (n=28)		身体が傷付く (n=12)		心が傷付く (n=5)		心身共に傷つく (n=12)		自分は登場しない (n=0)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.6	4.41	14.3	3.26	15.2	4.27	15.6	4.25		
敵意	18.9	4.75	16.2	4.06	17.2	2.39	21.0	5.33		
身体的攻撃性	17.3	4.80	18.9	4.83	19.4	7.27	17.7	5.40		
言語的攻撃性	16.2	3.82	16.9	3.20	16.0	4.06	15.3	4.89		
全攻撃性	66.0	10.19	66.3	10.97	67.8	15.50	69.6	11.91		

表 10

女性の空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない (n=58)		身体が傷付く (n=4)		心が傷付く (n=11)		心身共に傷つく (n=6)		自分は登場しない (n=2)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.1	4.93	12.8	5.74	14.0	3.52	14.0	3.29	11.0	1.41
敵意	17.5	5.50	21.5	5.80	20.3	4.43	21.2	2.64	19.5	0.71
身体的攻撃性	13.5	5.14	14.3	2.87	13.8	3.71	12.7	5.20	10.0	5.66
言語的攻撃性	14.4	3.86	12.8	1.71	14.2	2.93	14.2	3.76	13.5	4.95
全攻撃性	58.6	13.64	61.3	14.89	62.3	5.90	62.0	8.15	54.0	9.90

表 11

全体の空想内の他傷度における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	傷付かない (n=86)		身体が傷付く (n=16)		心が傷付く (n=16)		心身共に傷つく (n=18)		自分は登場しない (n=2)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.3	4.75	13.9	3.86	14.4	3.67	15.1	3.93	11.0	1.41
敵意	18.0	5.28	17.5	4.95	19.3	4.09	21.1	4.52	19.5	0.71
身体的攻撃性	14.8	5.31	17.8	4.81	15.6	5.51	16.0	5.72	10.0	5.66
言語的攻撃性	15.0	3.91	15.9	3.40	14.8	3.30	14.9	4.47	13.5	4.95
全攻撃性	61.0	13.03	65.1	11.73	64.0	9.71	67.1	11.18	54.0	9.90

た二要因分散分析の結果をまとめたものを表 12 に示す。

その結果、空想内の他傷度による攻撃性への主効果はいずれの攻撃性においても見られなかった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 128)=10.58, p<.01$)、言語的攻撃性 ($F(1, 129)=5.51, p<.05$)、全攻撃性 ($F(1, 128)=3.99, p<.05$) であった。また、空想内の自傷度と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、空想内における他者の傷付く程度によって攻撃性に差があるとは言えず、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 12

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の他傷度と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	他傷度		性別		交互作用	
	F値	有意差	F値	有意差	F値	有意差
短気	0.68	n.s.	2.17	n.s.	0.12	n.s.
敵意	1.13	n.s.	1.72	n.s.	2.09	n.s.
身体的攻撃性	0.93	n.s.	17.99***	男>女	0.17	n.s.
言語的攻撃性	0.19	n.s.	5.51*	男>女	0.41	n.s.
全攻撃性	0.67	n.s.	6.34*	男>女	0.05	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

空想内の自身の死の有無と攻撃性の関連

まず、空想内における自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均値と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表 13～15 に示す。

表 13

男性の空想内の自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	自身の死あり($n=16$)		自身の死なし($n=41$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	14.9	4.41	14.1	4.04
敵意	20.8	4.43	17.8	4.68
身体的攻撃性	20.4	5.38	17.0	4.68
言語的攻撃性	17.2	4.52	15.7	3.61
全攻撃性	73.3	13.17	64.5	9.07

表 14

女性の空想内の自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	自身の死あり($n=19$)		自身の死なし($n=62$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	15.6	3.81	12.5	4.60
敵意	19.6	5.08	18.0	5.32
身体的攻撃性	13.6	5.50	13.4	4.66
言語的攻撃性	15.2	3.34	14.0	3.69
全攻撃性	64.1	13.16	57.9	11.89

表 15

全体の空想内の自身の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	自身の死あり($n=35$)		自身の死なし($n=103$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	15.3	4.05	13.2	4.43
敵意	20.2	4.76	17.9	5.05
身体的攻撃性	16.7	6.36	14.8	4.96
言語的攻撃性	16.1	3.99	14.7	3.74
全攻撃性	68.3	13.78	60.6	11.28

次に空想内の自身の死の有無と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表 16 に示す。

その結果、空想内の自身の死の有無による攻撃性への主効果が見られたのは、短気性 ($F(1, 134)=5.11, p<.05$)、敵意性 ($F(1, 134)=5.59, p<.05$)、全攻撃性 ($F(1, 134)=10.78, p<.01$) であった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 134)=28.70, p<.001$)、言語的攻撃性 ($F(1, 134)=6.43, p<.05$)、全攻撃性 ($F(1, 134)=12.15, p<.001$) であった。また、空想内の自身の死の有無と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、自身が死ぬ空想を行わない人よりも行う人の方が短気性、敵意性、全攻撃性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 16

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の自死の有無と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	自身の死の有無		性別		交互作用	
	F値	有意差	F値	有意差	F値	有意差
短気	5.11*	有>無	0.24	n.s.	1.74	n.s.
敵意	5.59*	有>無	0.22	n.s.	0.53	n.s.
身体的攻撃性	3.61	n.s.	28.7***	男>女	2.77	n.s.
言語的攻撃性	3.34	n.s.	6.43*	男>女	0.02	n.s.
全攻撃性	10.78**	有>無	12.15***	男>女	0.34	n.s.

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

空想内の他者の死の有無と攻撃性の関連

まず、空想内における他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均値と標準偏差を男性、女性、全体で示したものを、それぞれ表 17～19 に示す。

表 17

男性の空想内の他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	他者の死あり($n=17$)		他者の死なし($n=40$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.8	4.10	14.5	4.17
敵意	20.9	4.43	17.7	4.64
身体的攻撃性	18.9	6.21	17.5	4.54
言語的攻撃性	16.6	4.99	16.0	3.39
全攻撃性	70.2	14.45	65.6	9.02

表 18

女性の空想内の他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	他者の死あり(<i>n</i> =16)		他者の死なし(<i>n</i> =65)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.5	4.50	13.2	4.65
敵意	20.2	4.61	18.0	5.37
身体的攻撃性	12.6	4.26	13.7	4.97
言語的攻撃性	14.1	2.87	14.3	3.81
全攻撃性	60.4	10.56	59.1	12.86

表 19

全体の空想内の他者の死の有無における各攻撃性および全攻撃性の平均と標準偏差

下位尺度	他者の死あり(<i>n</i> =33)		他者の死なし(<i>n</i> =105)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	13.7	4.19	13.7	4.50
敵意	20.6	4.46	17.8	5.08
身体的攻撃性	15.9	6.16	15.1	5.14
言語的攻撃性	15.4	4.23	14.9	3.72
全攻撃性	65.5	13.46	61.6	11.93

次に空想内の他者の死の有無と性別によって各攻撃性と全攻撃性の得点に差があるかを検討するために、行った二要因分散分析の結果をまとめたものを表 20 に示す。

その結果、空想内の他者の死の有無による攻撃性への主効果が見られたのは、敵意性 ($F(1, 134)=7.46, p<.01$) であった。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性 ($F(1, 134)=25.78, p<.001$)、言語的攻撃性 ($F(1, 134)=7.36, p<.01$)、全攻撃性 ($F(1, 134)=11.63, p<.001$) であった。また、空想内の他者の死の有無と性別による各攻撃性および全攻撃性への交互作用は見られなかった。以上の結果から、他者が死ぬ空想を行わない人よりも行う人の方が敵意性が高く、女性よりも男性の方が身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性が高いことが示された。

表 20

各攻撃性および全攻撃性についての空想内の他者の死の有無と男女差による二要因分散分析の結果

下位尺度	他者の死の有無		性別		交互作用	
	<i>F</i> 値	有意差	<i>F</i> 値	有意差	<i>F</i> 値	有意差
短気	0.14	<i>n.s.</i>	0.55	<i>n.s.</i>	0.31	<i>n.s.</i>
敵意	7.46**	有>無	0.04	<i>n.s.</i>	0.25	<i>n.s.</i>
身体的攻撃性	0.03	<i>n.s.</i>	25.78***	男>女	1.48	<i>n.s.</i>
言語的攻撃性	0.09	<i>n.s.</i>	7.36**	男>女	0.29	<i>n.s.</i>
全攻撃性	1.54	<i>n.s.</i>	11.63***	男>女	0.47	<i>n.s.</i>

注)*** $p<.001$, ** $p<.01$

考 察

本研究では空想と攻撃性との関連を検討することを目的として、BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた質問紙を用いて大学生を対象に質問紙調査を行った。空想内

容と性別を独立変数、各攻撃性と全攻撃性を従属変数とした二要因分散分析を行い、主効果および交互作用の検定を行った。その結果をまとめたものを表 21・22 に示す。

表 21

各攻撃性および全攻撃性についての空想内容による各主効果の検定の有意差の一覧

下位尺度	空想経験の有無	空想内の自傷度	空想内の他傷度	空想内の自死の有無	空想内の他死の有無
短気性	有>無	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	有>無	<i>n.s.</i>
敵意性	有>無	高>低	<i>n.s.</i>	有>無	有>無
身体的攻撃性	有>無	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
言語的攻撃性	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
全攻撃性	有>無	高>低	<i>n.s.</i>	有>無	<i>n.s.</i>

注) ____ は分散分析では有意差は見られなかったものの、多重比較では有意差が見られなかったもの。

注)空想経験の有無、空想内の自死の有無、空想内の他死の有無については多重比較を行っていない。

表 22

各攻撃性および全攻撃性についての男女差による各主効果の検定の有意差の一覧

下位尺度	空想経験の有無	空想内の自傷度	空想内の他傷度	空想内の自死の有無	空想内の他死の有無
短気性	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
敵意性	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
身体的攻撃性	男>女	男>女	男>女	男>女	男>女
言語的攻撃性	男>女	<i>n.s.</i>	男>女	男>女	男>女
全攻撃性	男>女	男>女	男>女	男>女	男>女

空想経験の有無と攻撃性の関連

空想経験の有無においては短気性、敵意性、身体的攻撃性、全攻撃性と主効果が見られ、そのすべてが空想を行ったことがない人よりも行ったことがある人の方が高いという結果であった。つまり怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度、身体的な攻撃反応の高さと、空想の行いやすさには関連があるということである。これは日常解離にあたる空想が攻撃性という不適応と関連する解離であると言える結果であるだろう。空想が不適応と関連する解離である理由としては、目的でも挙げた通り、空想のその自由度が上げられる。空想は意識明瞭でありながら、夢のように無意識的且つ自由な内容であり、より個人の内面が現れやすいと考えられるが、自由な空間を体験するまたは体験しようとするということは現実世界において自由に動いていないということではないだろうか。つまり現実世界で社会的な観点から攻撃性を抑圧しているものの、それが解消できず自由な空想へ逃避を行っているという可能性が考えられる。

もう一つの可能性として空想経験の記憶の有無が考えられる。空想経験の有無を聞く質問で空想を行ったことがないと回答した人はいたものの、実際一度は「お金持ちになったら」などと考えたことがあるのではないだろうか。つまり忘れていた可能性が考えられる。言い換えると空想の有無が攻撃性と関連しているのではなく、空想を記憶しているかどうか、空想が攻撃性と関連しているのではないだろうか。空想は自由な空間という特性上、現実からの逃避やより

良い状況への願望として行われる可能性が高いだろう。その現実からの逃避やより良い状況への願望を記憶し続けているということは、空想に執着又は追いかけて続けているとも言えることができ、つまり現実の抑圧の解消に力が向いていないとも考えられ、結果的に現実の抑圧が消えず、結果的に攻撃性として表れている可能性が考えられる。そのため一時的に現実からの逃避や願望を行っても、すぐに抑圧の解消に力が向く人は空想が記憶されず、攻撃性も低くなる可能性が考えられる。

また、言語的攻撃性のみ関連が見られなかった理由として、言語的攻撃性は適応的、補償的な攻撃性という可能性が考えられる。例えば言語的攻撃性測る質問は「不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきりというか」や「でしゃばる人をたしなめることができるか」などであるが、これは他の個体に対して危害を加えようと意図された行動ではなく、むしろ他の個体に傷つけられないように適切な距離を取る手段という側面が強い。この距離を取る手段という点では「挑発されたら殴りたくなるか」や「権利を守るためには暴力もやむを得ないと思うか」などの身体的攻撃性を測る質問にも言えることではあるが、現代社会では身体的攻撃性が問題とされており、言葉を用いた対話で距離を取る言語的攻撃性が望ましいとされていることは明らかである。もちろん言葉を用いた対話と言っても、言葉遣いや声の大きさ、トーンなどによっては対話ではなく、より攻撃的な暴言になることもあるが今回使用した攻撃性の質問紙ではそういった部分が聞かれていなかったため関連が見られなかったのだと考える。そのため「言葉遣いが悪くなるか」や「大声で威圧してしまうか」などの質問項目があれば言語的攻撃性も空想との関連が見られた可能性があるだろう。

空想内の自傷度・自身の死の有無と攻撃性の関連

空想内における自傷度においては敵意性、全攻撃性と主効果が見られ、その両方が空想を行ったことがない人よりも行ったことがある人の方が高いという結果であった。つまり他者に対する否定的な信念・態度が高い人は比較的に自身が傷つく空想を行いやすいということである。また、この結果は空想内における自身の死の有無においても似た結果が示されている。空想内における自身の死の有無においては短気性、敵意性、全攻撃性と主効果が見られ、そのすべてが空想内で自身が死なない人よりも死ぬ人の方が高いという結果であった。つまり、怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度が高い人は比較的に自身が死ぬ空想を行いやすいということである。

以上の二つはどちらも自身に被害を受ける内容の空想であり、自由な空間である空想内においては自

身にとって不適当な内容といえるだろう。以上の二つにおいて主効果が見られたのは情動的側面の短気性と認知的側面の敵意性である。これらは行動化する以前の段階の攻撃性であり、自身の願望と現実のギャップによる欲求不満によって起こると考えられる。それに対して行動的側面の2つは社会的な望ましさは影響するものの、その欲求不満を解消するための対処であり、抑圧は少ないと考えられ、さらにその対処方法は多岐にわたる。そのため行動的側面は空想との関連は見られず、誰もが共通して体験する欲求不満、すなわちうまくいかないという被害が、空想内においても自身が被害を受けるという内容として表れているのだと考えられる。

空想内の他傷度・他者の死の有無と攻撃性の関連

空想内における他傷度においてはどの攻撃性とも関連は見られなかった。対して、他傷度と同じく他者が被害を受ける内容である空想内における他者の死の有無においては、敵意性と主効果が見られ、空想内で他者が死なない人よりも死ぬ人の方が高いという結果であった。つまり他者に対する否定的な信念・態度が高い人は比較的に他者が死ぬ空想を行いやすいということである。

これは他者を否定するという攻撃性が、他者を死という形で排除する空想として現われたのだと考えられる。傷つける空想との関連が見られなかったのは、攻撃性の対象である他者が欲求不満の原因であり、その他者を傷つけても欲求不満の解消とはならず、他者を排除することが欲求不満の解消となるためだろう。しかし、社会的にそれを実際に行うことはできないため新たな欲求不満が生まれ、自由な空想内において他者が死ぬという内容として疑似的に解消しているのだと考えられる。つまり敵意という攻撃性が、解消できないという欲求不満とその疑似的な解消という形を通して、間接的に空想内容に表れたのだと考えられる。また、これは上記の自傷度や自身の死の有無における欲求不満よりも後の段階であるため、対処方法として攻撃性との関連が現れたのだろう。

男女差と攻撃性の関連

空想内容と性別においてはどの攻撃性とも交互作用は見られなかった。つまり空想内容と攻撃性との関連に男女差は見られないということである。性別による攻撃性への主効果が見られたのは、身体的攻撃性、言語的攻撃性、全攻撃性であり、この結果はどの分析においてもほぼ一貫している。つまり女性よりも男性の方が身体的な攻撃反応、言語的な攻撃反応が高いということである。湯川（2010）のP-Fスタディを用いた研究によると、男子は女子よりも

攻撃的反応を行う傾向が高い、という結果が出ており、そちらの結果には準じているといえる。この点を踏まえると、怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度の高さは男女差なく空想内容に表れると言えるのではないだろうか。

以上のことから空想内容と攻撃性は一部関連があることが分かった。具体的には対処する前のより原初的な攻撃性が、自身が被害を受ける空想内容という形で表れることが分かった。また、原初的な攻撃性は、欲求不満の原因である他者を排除できないという新たな欲求不満に対して、他者の死の空想という疑似的な対処方法として表れることも分かった。

この研究の結果はカウンセリング場面において活用が期待される。例えば教育場面において、子どもは自身の感情を理解できない、言語化できない可能性が考えられる。そういった子どもに対して空想の話をする事で、空想内容を投影法のように活用し、子どもの攻撃性を測ることができるのではないだろうか。例えば周囲との関係を避ける子どもに空想内容を聞いたところ、自身が死ぬような空想を行っていた場合、その子どもは怒りや否定的な信念が高く、怒りが喚起されやすいと推測できる。こういった内容は子ども本人の信念や考え方のクセといった要素が強く、本来であれば一度のカウンセリングで引き出すことは容易ではないだろう。対して空想の会話は雑談として話すことが可能であり、子どもにとっても比較的話しやすい内容であると考えられる。こういった雑談を通して攻撃性を測れる可能性が示されたのは本研究の成果であるだろう。

しかし、本研究では言語的攻撃性との関連や想像との比較など本研究では検討できない部分が多く見られたと考えられる。そのため、より空想と攻撃性の関連を検討するためにも今後の研究では空想だけではなく想像との比較や細分化された攻撃性を用いて研究することで、より正確に攻撃性を測ることができるのではないだろうか。また、空想は自由な思考であるがゆえに受ける周囲からの影響も考えられるだろう。例えば空想を見る直前に、主人公が攻撃を受ける映画等を見ていた場合、自身がその映画の主人公になり攻撃を受ける空想を行う可能性が考えられる。その他にも昨今の事件や地震、戦争などの報道といった、社会から常に受け続ける情報にも影響を受けるだろう。そのため本研究では分析を行うことができなかった空想のベースとなる物についても検討を行う必要があると考えられる。

以上のように空想と攻撃性の関連の研究有用性があると考えられると同時に、未だ検討されていない部分も多く、今後の研究で知見を蓄積していく必要があるだろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Ludwig, A. M. (1983). The psychological functions of dissociation. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 26, 93-99.
- (ラドウィグ, A. M. 市田 勝 (訳) (1996). 解離の精神生物的機能 精神科治療学, 11, 197-201.)
- Lynn, S.J., & Rhue, J.W. (1988). Fantasy proneness hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. *American Psychologist*, 43, 35-44.
- 舩田 亮太 (2008). 青年の語りから見た日常的解離の発達について 事例研究による体験・意味づけ変容モデルの検討 パーソナリティ研究, 16(3), 295-310.
- Matsumoto, T., Yamaguchi, A., Asami, T., Okada, T., Yoshikawa, K., & Hirayasu, Y. (2005). Characteristics of self-cutters among male inmates: Association with bulimia and dissociation. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 59, 319-326.
- Putnam, F. W. (1993). Dissociative disorders in children: Behavioural profiles and problems. *Child Abuse & Neglect*, 17, 39-45.
- 田辺 肇 (2002). 解離現象 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 3 異常心理学 I 東京大学出版会 (pp.161-182)
- 吉住 隆弘・村瀬 聡美 (2008). 大学生の解離体験と防衛機制およびコーピングとの関連について パーソナリティ研究, 16(2), 229-237.
- 横田 晋大 (2017). 攻撃性の男女差の進化的起源 —進化心理学の観点から— 心理学評論, 60(1), 15-22
- 吉住 隆弘 (2010). 一般青年の解離傾向とアグレッションの関連について P-F スタディを用いた検討 パーソナリティ研究, 19(1), 62-64.
- 湯川 隆子 (2010). P-F スタディにみる社会的表象としての攻撃反応のジェンダー・バイアス 奈良大学紀要, 38, 171-206.
- Zlotnick, C., Shea, T., Pearlstein, T., Simpson, E., Costello, E., & Begin, A. (1996). The relationship between dissociative symptoms, alexithymia, impulsivity, sexual abuse, and self-mutilation. *Comprehensive Psychiatry*, 37, 12-16.

「道化師になること」のオートエスノグラフィ ——欠点・弱点が個性になるプロセスに関する一人称的研究——

岡村 心平 神戸学院大学心理学部

An autoethnography on becoming a clown: A first-person exploration of the transformation of flaws and weaknesses into individuality

Shimpei Okamura (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究は、公認心理師であり臨床心理学者でもある筆者が、研究の一環として出会った道化師（クラウン）の養成講座を受講し、その体験を通じて自身に起こった変化を記述するオートエスノグラフィの試みである。クラウンになる過程は自身の弱点が「個性」へと変化していくプロセスであり、その内実を一人称の視点から検討することが本研究の目的である。筆者自身がクラウンになっていく講座受講のプロセスを対象とし、講座の中で練習したクラウン・ルーティンや、キャラクター・ディベロップメントなど各プログラムの内容を踏まえ、その際に起こった自身の変化や葛藤、驚きについて再帰的に吟味しつつ、個性化の過程や同期受講生とのコミュニティの意義、またクラウニング講座自体がある種のオートエスノグラフィの実践形態の可能性について考察した。本研究を通じて、自身の欠点が共有され、それが当事者性と結びつきながら魅力として機能する側面が明らかになった。

Key words: Clown, Clowning, autoethnography, fieldwork

キーワード：道化師（クラウン）、クラウニング、オートエスノグラフィ、フィールドワーク

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2025, Vol.7, No.2, pp.101-115

導入：心理師、道化師になる

本研究は、公認心理師であり、臨床心理学の研究者である筆者（以下、私）が、ある研究を進める過程で知るに至った道化師の養成講座を受講する過程でどのような変化がその身に起こるかを記述し、その意味を検討する、オートエスノグラフィの試論である。

岡村・道重（2023）で報告されているように、道化師の養成過程は、刑事施設において支援の一環として実践されている。私はこの研究に関わる中で、いわゆるクリニカル・クラウンのように道化師が施設を訪問しユーモアを対象者へと提供することで対象者に訪れる臨床的効果ではなく、人が「クラウンになる」ということ自体が、当事者にとって何らかの変容を与えるという点に強い関心を持った。少なくとも、私の知る限りそのような研究や機序が検討

されている研究論文は見当たらず、岡村・道重（2023）ではユーモアにおける反転理論を用いて検討したのであった。

クラウンになるということは、「個性的になる」ということである。大島（2021）および岡村・道重（2023）で説明されているように、道化師で株式会社 G・E-Japan 代表取締役の白井博之氏（以下、白井先生）によって各地で実践されているクラウニング講座は、クラウンになることを通じて、その人の弱点や欠点を、愛すべきユニークさ、個性に反転させ、その過程である種の癒しを伴った自己理解がもたらされるという特徴があるという。

私は、ある共同研究の一環として、実際にフィールドワークを行った。その際、白井先生から、G・E-Japan において、コロナ禍を経て数年ぶりに一般市民を対象にしたクラウン養成講座のビギナークラスを開始するという連絡を受けた。フィールドワー

クを実施して私が感じたことは、「面白い…何かが起こっているのかがよくわからない」というものであった。実際に自分の身をもってやってみないとわからないではないか…。という感覚と共に、ぜひ自分でもやってみたいという思いが出てきた。そこで「あくまで研究の一環として…という建前」と（実際に同僚にはそう言っていた）、それよりも強い、止められない好奇心のようなものを胸に、クラウニング講座の受講を申し込むに至った。

白井先生ご自身も、私が受講するということを喜ばれると共に、確かに驚かれていた。別のある人には「正気ですか?」と言われて「もちろん」と笑って返したが、そこで初めて自分が受講することはそんなに変な選択をしているのか…と頭をよぎったが、しかし腹は決まっていたのである。こんなに面白い話はそうそうない。もちろん、これ自体が研究上の大きなチャンスだという打算的な思い、いわゆる「いいネタになる」という考えがないわけではないが、私は以前から道化師に関心を持っていたのだ。特に 10 代の頃には、ピエロや大道芸人に憧れを持っていた。私にとっては長い歳月を経て訪れた好機であった。

方法：クラウニング講座のオートエスノグラフィ

本研究は、私自身がクラウニング講座に参加し、「道化師見習い」になっていく過程についての参与観察であり、見習いとしてフィールドに入り、共に受講者として過ごすエスノグラフィ実践としての側面があるが、むしろ、「クラウンになっていく」という過程において、「個性化」のプロセスを辿るなかで私自身に何が起こるのか、どのような体験をするのか、何を感じるのかに焦点を当てる一種のオートエスノグラフィ（Adams, Jones & Ellis, 2015）であるとも言える。

井本（2013）によれば、オートエスノグラフィは「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」であり、これは単なるフィールドで起こったことの記述だけでなく、その記述を通じて「自身の感情を振り返り、呼び起こす、内省的な行為」でもあるという。クラウニング講座で私自身に起こったことを再帰的に検討することが、本研究の目的である。自身の体験を再帰的に理解するというプロセスは、私の専門である人間性心理学分野におけるフォーカシング実践（Gendlin, 1981）の特徴であり、かつその考案者であるジェンドリンらが提唱している一人称科学、一人称的な研究実践の実例（Gendlin and Johnson, 2004）であるとも言えるだろう。

本論ではフォーカシング的、かつオートエスノグラフィの手法を意識しつつ、自身の体験を振り返り、その臨床的な意義についての検討を、心理師である

私自身が一人称的に捉えようとする実験的な試みである。

以下に、実際に私がクラウニング講座を受講した体験を、時に時期を前後することもあるが概ね継時的に記述していく。その際、講座受講時のメモや日誌、板書の写真等を参照しながら記載するが、特に私自身がその時どう感じたのか、あるいはこの論文をまとめている段階で、どのようにそれを理解しているのかを重ねて記述する。

講座全体の概要

私の受講したクラウン・ビギナー・クラスの開催時期は、2024 年 5 月から 10 月までの全 20 回。金曜の 20 時 15 分～21 時 45 分までの 90 分間に実施された。場所は西宮市某所のスタジオで、高架の側にある建物にスタジオが入っている。同スタジオでは、タップダンスやミュージカル、大道芸のクラスなどが毎日行われており、ダンススタジオらしく音響設備や一面が鏡張りになっている。ビギナークラスの直前までタップダンスクラスが行われており、教室に近づくと音楽と、軽やかで心地いいタップの音が響いてくる。前室およびスタジオは「年季が入っている」という形容が相応しい。

クラウニング講座の講師は白井先生を含めて 4 名（クラウンすまいること白井先生、クラウン・ジン先生、クラウン・ドレミ先生、ジャックと 0084 クン先生）。それぞれがジャグリングやミュージカル俳優、スタチューパフォーマンスを行なっている現役のパフォーマーである。講師も一緒にレッスンに入り、パフォーマンスのお手本を示してくださる場合があり、クラスが始まった当初は先生方のお手本はただ「面白い」というものであったが、回を重ねることに、そのパフォーマンスの見事さ、真似することの難しさを痛感し、後半になると笑いというより「おお…」という感嘆の声に変わった。特に、ネタのアイデアはもちろん立ち方、止まり方、視線の動かし方などの所作がいかに真似し難い“うまさ”を伴っているかを痛感していった。

私が入った第 10 期メンバーは最終的に 10 人で過去最多であるという（5 回目からの追加参加者もあった）。受講生には、以前よりすでにクラウンの経験のある方もいたが、ほとんどの参加者がはじめてクラウンになるプロセスを体験する。クラスには、ろうの方を含め、手話ができる人が計 4 名参加している。ろうの方、手話をされる方でクラウンをされる人は多く、当講座の修了生にも複数名いるという。手話は身体的な言語であり、かつ表情で伝える言語でもあるため、手話者の表現力はとても豊かだというのが講座を通じた印象である。講座中は、板書や音声アプリの利用だけでなく、手話も交えて進んでいく。そのほか、韓国にてクラウンやバルーンアートのプ

ロパフォーマーを長年している方も受講者として不定期に参加する。日本語や英語、身振り手振りを交えてやり取りをするが、手話が飛び交う中で英語や韓国語が混ざり、韓国人の方に手話を使ってしまい、皆で笑うようなシーンもあった。

なお、正確に聞き取ったわけではないが、おそらく私は最年少メンバーだと思われる。基本的に毎回の講座は、定番の準備体操、身体ほぐしと表情筋ほぐし、発声を行った後、後述するクラウン・ルーティンであるトリップ・テイク・リアクションを練習して、各回の単元に入る。また、最終回の第20回はこの講座内での発表会、いわばプチ卒業公演が行われることが事前に決定されていた。衣装やメイクも含めて、「一応、クラウンとして人前に出られる段階を目指すこと」がこの講座の最終到達目標である。

プログラム内容とその体験

第1回：導入と自己紹介、クラウンネームの決定
初回はイントロダクション、クラウン (clown, 道化師) とは何かについての講義と、自己紹介、およびクラウンネームの決定が行われた。まずクラウンについての概要の講義に関しては、日本ではピエロという呼称の方が有名であるが、クラウンのキャラクターは世界に1000種類以上いること、中でもオーグスト、ホワイトフェイス、キャラクターというおおまかな三つの類型が存在することが説明された(第14回にて詳述)。現在、クラウンはサーカスや大道芸などのフィールドで活躍しているが、ジャグリングを得意とするジャグラー、マジックをするマジシャン、他にもバルーンアーティスト、ダンサーなどがいるが、これらは全て何らかのパフォーマンス技法が「できる人」を指す。一方、クランとは、何かが「できない人、ダメな人、愚か者(クラウンの語源でもある)」と定義される。もちろん実際のクラウンは、何らかの別のパフォーマンスに熟達しており、本講座の講師もそれぞれタップダンスやジャグリング、バルーンアートやスタチュー、そして演劇、マジックなどのプロフェッショナルである。それらをできる人が「あえて意図的にできないを演じる」という場合があることも、クラウン芸のユニークさであるという。

概要が終わり、次に受講者がクラウンネームをその場で考え、本日この場で、以降の講座で用いるクラウンネームを発表するという。クラウンネームはそのクラウンのキャラクターを示す愛称、ニックネームで、親しみやすく呼ばれやすいものが好まれる。子どもたちからも呼ばれやすく、ポップな雰囲気があるようなものが望ましい。また、本講座の歴代の先輩クラウンの愛称とも被らないこと、原則として以降の講座でクラウンネームの変更は受け付けないことなどが説明された。呼びやすかったり、名前をもじっていたり、あとは破裂音(パピプペポ)が入っ

ていると可愛い雰囲気になるが、可愛さや愛嬌が重要だとも説明され、受講生は皆黙り、どうしようかと考えていた。5分、10分ほど時間が設けられた。

クラウンネームは、最初呼ばれるときは違和感があるものの、この講座が終わる頃には、もうその名前しか有り得なくなるのというのが不思議なところだ、と白井先生は言う。あとは気分とか気まぐれで選んでも、「らしさ」は後から付いてくるという。そんなものなのだろうか…と考えつつ、私は悩み続けた。

しまったなあ、とも一瞬思っていた。私自身はクラウン講座の受講は初めてであるが、以前研究の一環で出かけたフィールドワークでもクラウン講座の1回目を見学したことがあった。その時いきなりクラウンネームを考えてもらうことに驚いたが、事前に考えることをすっかり忘れていた。今回のフィールドワークとしては、事前に考えてきていてはあまり良くないとはいえ、何もアイデアが出てこない。迷っていると「案外何も考えない方がいいのが出てくるし、考えすぎるのもよくない」と白井先生は言う。以前の見学時は食べたいものや好きなものをそのままクラウンネームにしたりしていたことを思い出していたが、そうこうしているうちに10分が過ぎた。迷っていたら「これとこれで迷っているとってください。一緒に決めましょう」と言われた。

自己紹介は申し込み順となり、私は二番目に発表することになった。頭の中で浮かんでいた候補は、何か今食べたいもの…とその場で思いついたのが、喉が渇いていたので「ラムネ」。ポップでいい感じであるが、自分にはいささか爽やか過ぎやしないか…と言うことで却下。もう一つは名前をもじるという戦略であった。下の名前のシンペイからとって、たとえば…シンに何か一文字つければ良いと思い「シンバ」と言うのはどうか。ちょうど今朝テレビでライオンキングを観たせいだろうか。「新葉」にも通じるが、商標登録されてそうなものは好ましくないようだった。あるいはペイの方が、破裂音も入っていて良さそうであり、たとえば2回繰り返して「ペイペイ」が可愛い響きでよかった…が、これもすでに大手のキャッシュレスサービスの呼称である。ということで自分の中で決まりきらず、「迷ってます」と切り出し、そのまま自己紹介を話し出すことになった。

自分がどんな人であるのかをここで話すのはそれなりに難しかった。何をしている人かではなく、どんな人か…。私は差し当たりあまり深く考えず、人と話すのが好きで、いつも笑っていたいなあと思う人、いつまでも学生気分が抜けない人です、と答えた。これは実際に、学生や親しい人にもいつも言ってることでもあった。

クラウンネームの候補としては、名前をもじって

「シンバ」か「ペイペイ」かで迷っているが、どちらもすでに存在していて困っている、とみなさんの前で話をした（ペイペイのくだりは少しウケた）。白井先生曰く、「ペイペイ」の方が響きはいいので、その場でいくつか考え、白井先生より「ではペペなんかはどうでしょう?」と言われた。参加者の中でクラウンを体験されている方から「ペペ、いいじゃん。プロっぽい」との声もあった。どうも同じ音が続く二文字のネームは玄人っぽいらしい。「ペペでどうでしょう?」と言われ、ではそれで、となった。こうして私はその日から、講座では「クラウン・ペペ」と呼ばれるようになったのである。

他の方もユニークなクラウン・ネームをつけていった。もう決めている人もいれば、これかな…ということで悩みながらお話しされる人もいた。どちらも半々というイメージだろうか、おそらく私が一番悩んだタチかもしれない。

家に帰り、改めてペペになったことを思い返すと、果たしてこれで本当に良かったのだろうか?という疑問というかモヤモヤとした感覚が湧き起こっていた。ペペ。とても三枚目な響きだが、可愛過ぎやしないだろうか…その響きに応じていけるのだろうか。なにげなく「ペペ」という文言をネット検索してみたら、ペペという愛称のサッカー選手やラーメン屋、株式会社、あとは同名のアダルト向け商品名称まで出てきた（国によっては *pepe* という語は卑猥な意味になることがあるようだ）。また関わっている司法領域で、慰問コンサートを長年されているデュオアーティストの Paix2（ペペ）と被ってしまったことに気がつく。その場では気づかなかったが、ペペという名前ですべてにいいのだろうか、変えた方がいいのか…しかし原則変えないという話だった…。ということで、その日の夜は悶々と考え込み、深夜まで眠れなかった。

第2回 クラウン基本動作：トリップ・テイク・リアクション ペペとなって1週間後の講座。モヤモヤは差し当たり受け入れて、とりあえずペペと呼ばれたり名乗ったりすることは妙に受け入れていた。

2回目からしばらくは、クラウンの基本動作であるいくつかを技を反復的に学んでいく回であった。特にトリップ (trip)・テイク (take)・リアクション (reaction) という3つのステップである。詳細は岡村・道重 (2023) に詳しいが、トリップは「つまづく」、テイクは「(つまづいた何かを) 見る」、リアクションはそれに「(色々な感情で) 反応する、驚く」ことをする。その後でつまづいた対象と何か関わるという + α のひと演技、パフォーマンスを行う。この練習をスタジオの端から歩きながら反復練習をする。それぞれの動きを、そこに何かがあるように、そして観客につまづいたことがわかるように、しっかりと分かりやすく表現する必要がある。

私の体験としては、何もないところでつまづいた

り、それを見たりすること以上に、リアクションの部分の表現が難しかった。通常、人はつまづいた何かを見て驚く時には、つまづいた対象に対して驚くが、クラウンでのリアクションは、観客側に顔を見せながら驚く必要がある。つまり、クラウンはあくまで「演技」であり、自然なリアクションを取ればよいということとは異なる。しかも、なるべくそれが伝わりやすく、丁寧に、そしてはっきりとする必要がある。

第3回 ダブルテイク 前回の復習+テイクの部分のいわゆる二度見、ダブルテイクに変えて練習を行った。一度対象を見て、その際には気づかず先に進もうとしたが「おや」と思い、もう一度見て驚く、という一瞬のうちに色々な感情が変化する芸であり、非常に難しかった。これものちも毎回反復練習を行っており、いつの間にか身体に馴染んでいくということがある。

しかし、他の人のパフォーマンスを見て、その人らしさや、仕草の面白さ、メリハリの強さ、動作の美しさなど、「うまいなあ」と思う受講生が増えてきた。クラウンはできそうと自信があったものの、さらにうまい人、経験を重ねている人、堂々としている人を見て、とても勉強になるし羨ましいという感じがあった。自分はこのクラスでは優等生ではなく、少なくとも中の下という認識がこの辺りから出てきた。

見ている認識と、それを身体表現として示すことの難しさも痛感する場面が多かった。テイクは「カラダで見る」ということが重要であり、視線を向けるだけでなく重心や姿勢などもそちらに傾けつつ、かつ「動作が流れる」ということがないように、止まることが大事である。動くことよりも「止まることの難しさ」を体感するのがこのトリップ・テイク・リアクションの要点であった。

なお、以降も繰り返されるトリップ・テイク・リアクション + α の練習は、受講者一人ひとりが自分で考えるため、その人なりの味が出る。これがしばらくの間繰り返されることになるが、やっていくうちにその人なりの「定番ネタ」が出てきたり、あるいは前の人のネタに被せたりすることがある。

例えばある受講生は、いつも何か食べ物や飲み物につまづき、それを食べてしまって、お腹を下したり、酔っ払ったりするというネタが定番になる。また別の受講生や、お金や金品につまづき、ニヤリと悪い顔でそれをくすねるネタをするなど、その人ならではのいつものネタというのが出てくる。また私がやったネタで、スマートフォンにつまづいて、それで自撮りをしてまた捨てちゃうということをやった後に、次の番の人が同じそのスマホを拾い、私が撮った自撮りに驚いて落として逃げる…というような人のネタに被せて面白くしていくという場面もあった。

このトリップ・テイク・リアクションのネタは毎

週行われていて、毎週何か考えようとして、結局アイデアが浮かばず、その場でぶっつけ本番になっていた。

その人なりの定番が見つかることは羨ましいことでもあり、そして人のネタに被せて何かアイデアを出せることは「命拾い」でもある。ネタをやったあと、白井先生より「今のはここが良かった」「とっても○○さんらしい!」「動きがはっきりしている」「客席にお尻が向いていたので反対を向いた方がいい」「今の表現、私だったら…」などの講評やアドバイスが即時で行われる。受講生も笑ったり、拍手をしたりして温かい雰囲気での練習は実施される。最後には他のスタッフの講師の先生のトリップ・テイク・リアクションも見ることができ、そのストーリー性や演技のコミカルさ、そして一つのネタとしての完成度にみんな驚愕する。先述のように、最初のうちは「面白い」だったのが、だんだんとその芸がいかに洗練されて、巧みに演技されているのか気がつき、笑いよりも感嘆の拍手が出る。

第4回 スラップスティック・コメディ 以降は、クラウンの基本動作のうち1人ではなく2人以上の複数人で行うネタ（クラウンルーティンやクラウンギャクとも呼ばれる）の練習が開始された。一人で行うトリップ・テイク・リアクション以上に、個々人が息を合わせたり、相性のようなものも意識されるようになった。今回はスラップというジャンルのネタである。クラウンの起源には演劇も含まれるが、特にヨーロッパのフェンシングに由来するステージ・コンバット（stage combat: 殺陣）に影響を受けつつ、実際には叩かないが音のなる棒（slap stick）や自分の手足を使って相手を叩くようなアクションと音を使う表現技法、スラップスティック・コメディ（slap stick comedy）と呼ぶようである。

これはいわゆるドタバタ劇のことで、一方がある酷い目にあったり、一方が出し抜いたり、とある種の役割が出てくる。この役と、その演技手であるクラウンのキャラクターとの相性、そして2人で演じる場合にはその二人の相性が出て、オリジナリティや面白さが醸成されていく。第4回は「待ち合わせ」というネタで、複雑なため詳述はしないが、殺陣の要素がありお互いの「息を合わせる」という難しさがあった。

第5回 ミラーギャグ 前第5回は2名で行うクラウンルーティンのうちのミラーギャグを練習した。これは具体的にどのような動作をするかは決まっていないネタである。2人組を組み、一方がリーダー、一方がフォロワーの役になる。リーダーは「動きを決める役、相手がついてきやすい動きをする」こと。フォロワーは「リーダーの全体を見て、動きを合わせる」ことを行う。

誰とコンビを組むか、どちらかリーダー/フォロワーをするかは差し当たり白井先生の判断で決める。

相性や、この人がリーダーをやったらどうなるのか…ということを見ているようであった。二人が距離をとって向かい合い、リーダーがする動きを真似る。この際に重要なのは、フォロワーがついて来れるように動くことである。動きのメリハリや、分かりやすさ、スピードなど、リーダーはフォロワーがついてきやすいようにスタートし、そしてだんだん慣れてきたら、複雑な動きをしたり、不意をついたり、少しふざけたりという遊びの要素を入れたりもする。これを5分程度行う。

リーダーとフォロワーの両方をやってみて、どちらが好きか、あるいは得意かが講師から参加者全体に投げかけられた。これも、ある種のクラウンとしてのキャラクターの開発の一環であることが色濃くわかる。はたから見ているとリーダーとしてグイグイと引っ張っていた人が、好みとしてはフォロワーの方が良いと答えたり、意外な回答もあった。私としては、楽しかった体験はリーダーの方であったが（あえて変な動きをしたり、舌を出したりして誘いかけた）、実際に自分の体験として学びがあったのはフォロワー体験であった。講師の白井先生には、リーダーとしてのタイプ、素養があるが、フォロワーとしても可能であったという評であった。むしろ自分は、誰かの動きを真似る方が興味があるし、かつ気持ちよさがある、ということであった。先導するよりも、受け身でいることの心地よさを感じた回であった。

気になったのは、私自体がリーダーの立場でパフォーマンスする際の、身体の動作のボキャブラリーのなさであった。出てくる動きとしてはワンパターンで、どうしてもラジオ体操のような動きになる。もちろん、ラジオ体操の動きは簡単で共有しやすく、フォロワーと動き方を同調するには重要であるが、他の参加者の異なる動きを見て、あのような仕草があるのか、自分には出て来ないな…としみじみと感じていた。そして動きや仕草の中に、明らかなその人の個性、らしさがあることを感じ取っていた。

第6回 ジェブリッシュ 第6回は、クラウンの動作基礎編の最後のジェブリッシュである。ジェブリッシュとは世界共通のクラウン語であり、いわば「無茶苦茶語」である。クレイアニメの『ピングー』を想起すると分かりやすいかもしれないが、出鱈目な言葉を発し、音とニュアンス、勢いや仕草、表情などで、相手に自分のイメージや感情を伝えるというものである。ポイントは、出鱈目に話すとはいえ滑舌良く、はっきりと喋り、モゴモゴとしないことである。

講師が立ち、その横に3～4名が並ぶ。まずは講師によるジェブリッシュでの投げかけに、同じようなトーン、感情、仕草で応答するというのを数ターン繰り返す。感情が徐々にエスカレートして、悲しい感情や、怒った感情など、ジェブリッシュだけで

やり取りをする練習をするのである。

そのあと、講師と受講生が一对一で、道で出会い（おそらくは）「最近どう？」に続くやり取りをジェブリスシュだけで行うというネタを行う。見ている受講生も含めて完全に出鱈目語なので、意味がわかる場合も、わからない場合もあるが、とにかく皆恥ずかしいやら一生懸命やらで大盛り上がるの回であった。

この回で特に印象的だったのは、自分自身がジェブリスシュをする中で、自分のエネルギーの高さのようなものを再確認したことであった。ジェブリスシュは出鱈目語なりに声色やトーンで相手とやり取りをするが、割と普段から声がよく通るタチの私は、このジェブリスシュのネタをやっている最中に、これまでの講座の中で自分がやや遠慮気味だったり、加減して参加していたことを自覚した。特に講師と二人の会話の中では、その日偶然来ていた恐竜の柄のTシャツを講師が拾い、恐竜のジェスチャーから自分が恐竜になるというようなダイナミックな展開となった。その時にも、自分の感情や表現のボリュームを一気に上げた、遠慮する気持ちを脇に置いてただ楽しめたような気持ちになっていた。講座全体を通じて、一つの起点となる回であった。

なお、日本ではピエロというクラウンキャラクターの印象から、クラウンは喋らないというようなイメージがあるが、白井先生曰く世界のクラウンの8割は、ジェブリスシュに限らず喋るのだそうだ。本講座では、基本的にまずは喋るキャラクターになることを目指し、必要に応じてのちに喋らないキャラクターになる場合もあるとのことであった。喋りたくないから、あるいは喋るのが苦手だから喋らないということではなく、キャラクターとしてふさわしければ喋らない、というのが基本である。なお、大きな声やリアクションを小さくすることはできるが、小さなものを大きくするのは難しいため、まずは大きなリアクションや発声ができるように、本講座では毎回発声練習や表情、身体表現のレッスンが準備段階として行われているとのことである。

第7回 デッド・アンド・アライブ (1) 今回から第14回までが応用編になる。まずは、本講座のルーツでもあるアメリカのサーカス団「リングリング・サーカス」などが出資したクラウン養成学校“Ringling Bros. and Barnum & Bailey Circus Clown College”の作成した生徒募集のビデオ“Be A Clown”という映像資料を見て、当時のクラウNSTAジオの風景、全米で4名しかいなかったマスタークラウンの一人である「ルー・ジェイコブス」のパフォーマンス、そしてクラウン・ルーティンの一つである「デッド・アンド・アライブ (Dead and Alive)」を視聴し、当時の雰囲気を感じつつ、実際にルーティンをやってみるということを行なった。なお、当該養成学校の日本校の出身者が本講座の講師であるクラウンすまいること白井先生と、クラウン・ジン先生であるが、バブル

の崩壊とともに日本校もアメリカ本国の学校も倒産し、すでに存在しないという。「大風呂敷を広げてダメだった、というのめいかにもクラウンらしい」というのが講師の談であった。

「デッド・アンド・アライブ」はテンポが早く動作も複雑で、受講生にとっては難易度が高く感じられるルーティンである。二人の登場人物が出てきて、旧友であり握手を交わそうとするがお互いすれ違い目の前からいなくなり、ついに一方が握手をしようと手を伸ばしたが、もう一方は帽子を手に取り挨拶、それに倣い帽子をあげると相手が手を伸ばし、とチグハグなやり取りが続き…というネタである。最後には一方が意識を失い倒れてしまい、それを支えるという身体を張ったルーティンが故に“Dead and Alive”という名前がついていると思われる。

段取りを覚え、テンポ感、息を合わせることと演劇としての完成度を高めていく作業と、クラウンとしての感情表現の両立が難しく、クラウンの動作は即興でやれているように見えて、繰り返し反復練習することによる「身体で覚えること」と相手のトーンや動きに合わせて「身体で反応すること」のどちらもが可能になる必要がある。段取りと練習を繰り返し行い、ペアになって実演してみてこの回は終了時間となった。

第8回 デッド・アンド・アライブ (2) 前回の続きでルーティン「デッド・アンド・アライブ」を今度は人と役割を変えて行なった。ペアないし複数人でクラウン・ルーティンを行う場合は、いわゆるボケとツッコミ、酷い目に遭う役と展開を作る役に分かれることが多く、それぞれ自身のキャラクターとの相性を踏まえて演じることがままある。前回と別の人と同様の人がルーティンを行なったが、前回はどちらかという相手はツッコミ役で私はボケ役であったが、今回はボケ役の強い相手と演じることになった。改めて、相性や演劇としての役回りを指揮してルーティン演じるに至った。この辺りで、私自身のキャラクターは果たしてどのようなものなのだろうか…と、自分のキャラクターがさらによくわからなくなってきていた感覚があった。

第9回 ポンプギャグ 第9回は別のクラウン・ルーティン「ポンプギャグ」である。日本のクラウンはロシアで発展したクラウンからも影響を受けており、ポンプギャグはその代表芸だと教わる。アメリカのクラウンは、華やかでエンターテインメント性が高いが、ロシアのクラウニングはより演劇的で風刺的、シュールな作品が多いという。これはクラウンがソ連時代に革命のシンボルであったことにも由来するようである（大島, 2021）。

ポンプギャグは2人組のルーティンで、ある人が、気絶して萎れているのをもう一方の人を見つけ、その人を元気にするために、近くにあったポンプを口に入れて膨らませる…という謎の設定のネタである。

今回このネタをやった私とペアの人はイタズラ好きのキャラクターであった。終盤、萎れている相手に無理やりポンプで空気を入れることに夢中になっている私の役が、口からポンプが外れた相手から反撃を喰らうシーンがあるが、相手は演技の中で即興で私の脇腹をこついたり、アドリブでいろんな要素が入り込んできたりして、演じること自体が面白くも発見的なことで、かつ即興で起こることに対応するための「余白」が必要だと強く感じた回であった。

自分自身では即興で何か対応することは得意な方であると思っていた私は、不意を突かれて驚いたとともに、むしろ講室内で「ちゃんとやろうという意識が働きすぎている」という側面に気が付く瞬間であった。うまくやろう、やりたいと思う私と、もっと楽しみたい、ふざけたいという思いとの葛藤がグッと強まっている感覚があった。とはいえ、この頃には同期の受講生とはかなり打ち解けた中で講座が進んでいくようになった。

第10回 スタイル・アンド・ボウ 今回はスタイル・アンド・ボウ (style and bow) を学んだ。これはサーカスのオープニングやショーの冒頭でクラウンたちが登場する際に、音楽に合わせて舞台袖から舞台中央に向かってクラウンが登場して走ってきて、真ん中でポーズをとって「ヘイ！」と挨拶をする、登場シーンで用いられる一連のパフォーマンスのことである。それぞれのクラウンのキャラクターに見合ったポーズ (style) で一人ずつ登場して捌けていき、最後に全員でポーズと取るが、今回の重要なテーマはむしろ声掛けの「ヘイ！」という発声であった。

今回紹介されたのが「エナジー」という概念である。これは自分を表現する際の伴うエネルギーのことであり、ここでいかに華やかに、エネルギーにエナジーを開放できるかが、クラウンにとっての要であるという。後の回で白井先生は「数十年間、クラウンとして活動してきた仲間と話していて、結局大事なのは『ヘイ！』のエナジーだとみんな口を揃えている」と言っていた。ジェブリッシュや動作の大きさ等にも関連するが、クラウニングにおいて、前述のように大きなエネルギーを小さく調整することは比較的容易であるが、小さなエネルギーを大きく増幅することは難しいという。そのため、ビギナークラスではいかにこのエナジーを強く、大きくして表現できるかを大切にしているということであった。

この回で私は、自分の中に強いエナジーがあるにも関わらず、それを意図せず遠慮して控えていたかもしれない、と確信を持って実感してきた。以前のジェブリッシュを学んだ回にも感じたことであったが、むしろ、この本講義への参加が研究の一環であるという意識が、むしろ薄れてきたのかもしれないとも感じる時期であった。ちょうど講座も折り返しの段階であった。

第11回 演劇的表現 第11回は、クラウニングにおける演劇的表現と個々人の個性との関係についてである。まず、舞台に立つとはどういうことか、その立ち方のパターンを学ぶ基本的なところからスタートした。「立つ」というのにも2種類あり、足を揃えて立つこと、足を広げて立つことを、実際に姿勢の修正や足の置き方の工夫を指南されながらやっていた。私は実際にボディワークや身体性の心理療法を学んだり自分で受ける中で、このような姿勢について振り返るという機会があったが、むしろ他者からどう見えるのかという視点から姿勢について考えるということは新鮮であった。さらに歩いてきて止まるということと、怒りや驚き、妬みなどの感情表現を行うことに関しても、同様の指導を受けた。

今回において特に発見的だったのは、「歩く」レッスンであった。クラウンは芸である以上、人を笑わせたり、おかしいと思ってもらうパフォーマンスを意図的に行うことを志向することになるが、クラウンとして「個性的に歩く」ということが、「ユニークな面白さ」につながることを体験的に学んだことであった。受講生は二組に分かれ、一方が歩く人、もう一方がそれを観察する人に分かれる。そして歩くグループは、2種類の「普通に歩く」ということを行う。一方は、自分なりに「①普通に歩く」(=私のいつもの歩き方)、もう一方は社会的に「②普通に歩く」(=一般的に普通な歩き方)を何往復か行う。その上で、2種類の「普通に歩く」を行なった際に、それぞれ自分で気がついている自分の特徴を、あえて「誇張」して歩いてみるのである。

例えば、2種類の普通を比較してみて、社会的に「②普通に歩く」を行なっているときに、より腕を振ることを意識していた際は、あえて強く腕を振ってみたり、自分自身の「①普通に歩く」のときに足を擦り気味であったと気がついたのなら(私自身がそうであった。昔、柔道をしていた時の癖であろう)、あえてすり足を誇張してズリズリと歩いてみる。こうすると、いわゆるふざけて「面白そうに歩く」ということとは異なる魅力を持つ、その人ならではのユニークさ、その人の身体に根ざした「ユニークな歩き方」となり、観察していても思わず笑ってしまうということが多々あった。その人らしさのわずかな特徴を、あえて誇張させて演じることで、その人の個性、ユニークさを増幅させるという、クラウン流の個性の開発の手続きをコンパクトに体験できた回であった。

このワークはこれだけ取り出しても、学生とゼミで行なったり、ワークショップ形式でいろんな人と共有したい内容だと思った。

第12回 講義：クラウンの歴史 第12回は全体で唯一の座学の回、クラウンの歴史についての講義を資料のもとに学んだ。クラウンの起源からヨーロッパにおける発展の歴史、それがどのように日本に伝

わったのか、そこにあるクラウンの本質について、当時の資料や逸話をもとに白井先生よりお話を伺う。特に、日本のクラウンのルーツとして古事記・日本書紀の時代における「海彦・山彦伝説」についてや、「ジェスター (jester)」と呼ばれる宮廷道化師の存在が特徴、代議士のような政治的な役割も担っていたこと、現在のクラウニングのもとになったイタリアの伝統的な演劇形式であるコメディア・デラルメの話は強く印象に残った。

コメディア・デラルメという劇に登場するアルレッキーノ (Arlecchino) がクラウンの原型の一つである。この演劇は二時間以上にわたる舞台劇、喜劇であるが、セリフというものが一切ないという。大まかな流れや段取りはあるが、役者が舞台上でどのようなやり取りをするのかは、あらかじめ決まっていなかった。しかし、それぞれの役に特徴的な「キャラクター」があり、そのキャラクターが明確であるため、その役になれば自然と舞台上でのやり取りが生まれる、というのである。むしろ、セリフが決まっていなかったからこそその掛け合いの面白さがある、というのが興味深い。クラウンにおけるキャラクターの重要性が、より理解できる講義であった。

この頃は受講生同士で少しずつ話をする機会も増えてきた。特に自分の素性を話したり、普段何をしているのかなどは機会があれば特に隠さず話していたが、ある人は私のことを「売れない劇団員か何かだと思っていた」と言った。大学で心理学を教えていると言っても信じてもらえなかったのも不思議な体験である。その流れで、共通の知人がいることがわかったが、実はその受講生のクラウンネームはわかって、本名を知らないことに気がつき、そして翻って自分がクラウンネームで呼ばれることに全く抵抗がない、むしろ受講生同士で本名で呼び合うこと自体に違和感があり、小恥ずかしさもあることに気がついた。ペペという呼び方は、かなり自分に馴染んでいるようだった。

第 13 回 ジャグリング講座 この回は応用編でもスピノフ企画であり、講師の 1 人であるクラウン・ジン先生によるジャグリング講座であった。そもそもジャグル (juggle) には、曲芸や奇術、詐欺やペテンなどの語義があるが、いわゆる曲芸としてのジャグリングはその特徴として、その芸がわかりやすく、かつボールやピンなど持ち運びのできる小道具を用いて行うことが可能で、一人でも二人でもできる手軽さが挙げられる。先述のように、クラウンは「できないこと、弱点のあること」が芸になる稀有な存在であるが、実際のクラウンには曲芸やジャグリングなどの芸が「できるにも関わらず、できないを演じる」ことの巧みさが求められるという。あえて失敗をするということもクラウンの特徴であるが、クラウンが行うジャグリングの特徴は「技を見せるのではなく、技を演じる自分を見せること」

にあるという。あくまでクラウニングという芸の中に、ジャグリングという要素が入っていると考えられるべきなのであろう。

今回は、最初に上記のジャグリングに関するレクチャーがあり、次にジャグリングの基本技法である「3 ボールカスケード」を練習した。3 つのボールを使ったジャグリングにはいくつかの種類があるが、左右のボールを外から内に交互に投げるカスケードの他に、いわゆる日本式の「お手玉」のように一方にボールが回っていく「シャワー」というように名称が決まっている。差し当たり、受講生全員で 3 ボールカスケードを練習したが、私自身がこれがなかなかできない。元々球技が苦手な方で、過去に大学生の時に一度克服しようとしてジャグリングを練習しようとしたことがあったが、全くできず挫折したことがあった。今回も、左手でボールを上手く右手に送ることすらうまくできなかった。

受講生の中には、かつてテニス部だったことがありボールの扱いが上手ですぐになれる者もいたが、概ね自分で投げたボールを自分で追いかけて探すというドタバタの練習時間となった。最後に、ボール以外の道具を用いて、講師の先生方に教えてもらいながら一通り体験してみる機会を得た。いわゆる皿回しやディアボロ (中国ゴマ)、一本のスティックを別のスティック 2 本で操るデビルスティックやポイ、シガーボックスと呼ばれるジャグリング芸など、一通り試してみた。差し当たりこの回では、これだというものを見つけることはできず、自分のセンスのなさを痛感した (ジャグリングボールは購入したが、諸般の事情で練習できていない)。

第 14 回 キャラクター・ディベロップメント プログラムのすべての回でも特に重要だと位置づけられている「キャラクター・ディベロップメント」を行う回である。それぞれのキャラクターがどのような性格を持っているのか、それを開発・発展・展開 (development) していくプロセスを体験する。各クラウンの性格は、その人のなりたいたいクラウン像や総合的・平均的な特徴というよりも、その人のいくつかある性格、例えば「慎重な、温厚な、おっちょこちょいな…」という 3 つの側面の中から、おっちょこちょいな側面を取り出し、増幅させ、誇張してクラウンとしての性格に発展させていき、例えば「おっちょこちょいなクラウン」というクラウン・テーマと呼ばれる文言に落とし込む。

この回では、講師によるいくつかの質問、たとえば「好きな色は?」「食べたいものは?」「やってたスポーツは?」「旅行に行くならどこ?」「子どもの頃の自分は?」などの簡単な問いかけ、あくまで直感的に答えた回答と、この講座を受講しているなかで垣間見える受講生のその人らしさ踏まえ、クラウンとしての性格を一言で言い表した「クラウン・テーマ」を講師から提案し、受講生がそれを聴き、了承

するという流れとなる。

クラウンとしての性格は、先述のように「できないこと、弱点や欠点」が愛らしさやその人の唯一無二の魅力になることではあるが、講師の白井先生曰く、過去の講座でこのキャラクターディベロップメントで「あなたにはこんな魅力がある」とお話しした際に、そのポイントがいわば的を射ていたがために、講座が終わった真夜中にその参加者から泣きながら電話がかかってきたこともあったようである。それほど、このクラウン・テーマ、そこに反映されているクラウンとしてのキャラクターは、まさしくその人らしさであることが多い。

受講生が順番に簡単な質問に答えていった。ちなみに私自身は「好きな色は…緑。理由は、恐竜とかの色のイメージだから」「旅行に行くなら…ドイツ、ビールとソーセージが目当て」「子どもの頃の自分は、夢中になると止まらず、朝から晩までザリガニを取っていた」などと問いかけに応答していた。どれも直感で答えたが、なるべく「こう答えてやろう」という意図や先読みをせずに、本当にその場で感じることを回答するように心がけた。

そのあと、受講者それぞれにクラウンテーマの発表（提案）があった。私が先生から言われたことをなるべく逐語的に記述すると、以下の通りであった。「ペペさんとは、最初は別の仕事で（研究の一環で）お会いしたが、会うたびにイメージがガラガラと崩れていった人でした。ペペさんのキャラクターは、“少年のようなクラウン”でどうでしょうか。子どもならではの至らなさ、子どもならではの没頭がある。男の子だからこそその単細胞さ。いい意味でのアホさ、みたいところ。それが少年ならではの魅力でもあり、かつ少年っぽさは、一番クラウンらしいところでもある。いかがでしょう」だった。「少年のような」というテーマを聞いた瞬間に、なるほど、と非常にしっくりきて納得のいく感じがあった。他の受講者からも「ほんと少年っぽいよね、確かに」というリアクションがあり、それでお願いします、と了承するに至った。かくして「少年のようなクラウン、ペペ」が生まれたのだった。

他の受講生のクラウンテーマも、私が聴いていてもその人に非常にフィットしたものだと感じた。「好奇心旺盛なクラウン」、「小悪魔なクラウン」「悩めるクラウン」、「やり過ぎるクラウン」などなど…今回は全員がお互いのテーマを、非常に納得して受けいれている様子であった。講師の先生がどのようにそのテーマを見つけ、言葉にするか、何を見ているのかは興味深いことであるが、まずは自分にとってこのクラウンテーマが何を意味するのかを吟味したい。

自分にとって「少年のような」という言葉から連想する、自分の中の幼さや至らなさ、大人になりきれない感じというのは、自分の悩みや一般的な意味でのコンプレックスの中核にあった。今回の帰り道

では、色々な連想やこれまでのエピソードが想起された。最初の自己紹介で「学生気分が抜けない」と言ったのは、限りなく本音に近かった。実際に、大学、大学院のいわゆる修士・博士課程までストレートで入学し、ポストクの期間を経て幸運にも現任校に縁があり講師として着任した私にとっては、臨床心理士として学校や病院で働いた経験がありつつも、学生の延長で教員になった…という感覚が強かった。もちろん、その良さがあるとどこかで思っているものの、どこかで自分「甘さ」や「未熟さ」に対する引け目があることも事実だった。

未熟さは、自分が専門としているフォーカシングの個人セッションを受けたり、セラピーを受ける中でも私自身にとって繰り返し登場したテーマであった。もともと低体重児として生まれてきた私は、物心ついた頃には体も大きかったものの、どこか、自分を幼さや未熟さ、臆病さに結びつけてしまうところがあった。やりきれなさ、向き合いづらさのような気分は、自分の人生においてお馴染みの気分のようなものとして、いつもそこにあった。自分が親となる経験をした際にも、自分が本当に親役割をまっとうできるのか、その自信のなさや怖さを若干なりとも感じていたことを覚えている（ちょうどその頃に受けていた身体心理療法のトレーニングにおいても扱うことがあった）。

このような文脈で、この「少年らしさ」が自分のクラウンテーマとして出てきたことには、納得感があると同時に、決して自分では焦点を当てづらい、思い至らないところであった。あまり自分がどのようなクラウンになるのかを意識しないようにしていたが、自分のクラウン・テーマはより豪快でただエネルギー的な方向か、もっと悩ましげでクヨクヨするような、神経質な側面に焦点が当たるのか、そのどちらかではないかと予感していた。それらのどちらの部分も、「少年のような」という形容詞によって、的確に包摂されたような感覚もある。

そこからしばらくは、この「少年のような」という言葉を色々な場面で響かせながら生活していた。なお、このクラウニング講座を受講していることは授業等でも折りに触れて学生に話していたが、担当のゼミ生に自身のテーマが「少年のようなクラウン」になったと話したら、ある学生からは「それ、先生そのまんまですね」との評を得た。授業等で自分の関心があることを話している様はまさしく少年のような表情をしているのだそうだ（裏を返せば、この話には興味がないということもバレているのかもしれない。未熟である）。学生から見ても「少年のようなクラウン」というテーマは私にフィットしているようであり、そこには嬉しさと若干の恥ずかしさを感じた。

第15回 メイクアップ（1） 前回で決定したクラウンテーマとキャラクターを元に、第15・16回に

おいては、各クラウンのメイクアップを実際に講師の先生より提案してもらい、そのメイクを行う回である。クラウンのメイクは、そのクラウンのキャラクターを体現するものであり、各クラウンにとってオリジナルなものであるという。かつてのリングリングサーカスでは、クラウンとして登録された際に写真付きの登録証が作成され、クラウンメイクの中で線や模様を1センチでも変更するのであれば登録をし直す必要があったとのことだ。メイクはクラウンにとってまさしくIDのようなもの、その人のアイデンティティを示すものであると言ってよい。

なお、クラウンのメイクは、本講座では概ね3つの類型にカテゴリーされて説明された。一番目は「ホワイトフェイス」であり、顔全体が白く、必要に応じて赤や青のラインが入るスタイルのメイクである。ホワイトフェイスはその性格の特徴として、リーダータイプであったり、クールだったり、恥ずかしがり屋だったりすることが特徴である。2番目は「オーグスト」であり、これは目と口の周りだけが白く、他は肌色だったり差し色が入る。オーグストは明るい性格だったり、元気だったり、アホでトラブルメーカーなイメージを伴う、いわゆるボケ役である。3番目は「キャラクター」と呼ばれているタイプの類型であり、これは実在の自分やある種の業種をデフォルメしたものとして表現される場合が多い、典型的なキャラクタータイプはチャップリンであるが、ダボダボのズボンだったり、髭面、眉毛が濃かったりなど、マイペースでより個性的な性格を示す場合が多い。またこれらの類型は、お互いにブレンドされることもある。

今期の受講生は、純粋なホワイトフェイスが1名、オーグストが3名、そのほかは各類型がブレンドされているメイクであった。ちなみに私はオーグストとキャラクターのブレンドであった。明るさやアホさに、より個性的な要素が載っているメイク＝キャラクターだという。

例年は各受講者のクラウンメイクは一回で全員が行っていたが、今回は受講生が多いため、第15・16回に分けられた。私はこの15回にクラウンメイクの例を実施してもらった。クラウンのメイクに使うものは、舞台用のドウランであり、まるで油性の絵の具のようなこってりとしたもので、日本の歌舞伎役者や芸者さんが使う水白粉とは異なるものである。ドウランや模様を書いた後、ベビーパウダーを振って粉を定着させることで、どれだけ汗をかいても落ちないメイクが完成する。

前回から1週間かけて白井先生が練ってきたメイクアップを、実際に一人ずつやってもらう。私の番が来て、その後自分でもそれができるように、メイクの様子は動画に記録した。私の場合はオーグスト・キャラクターのメイクのため、まずは目と口の周りを白く塗る。この際、どこに色を置くかはその人の

表情筋の動かし方などの特徴によるため、例えば同じオーグストでもメイクは全く異なる。「眉毛を動かして、口を動かして」と表情の出方を見ながら、実際にメイクをするラインを決めていく。基本的にクラウンメイクは自分でできるようになる必要があるため、ラインに迷ったら自分の表情を動かして見出す必要があると指導を受ける。次にキャラクターの特徴である眉毛のメイクに入る。クラウン・ペペのメイクの特徴の一つは太い眉毛であり、元々私自身もかなり眉が太い方であったが、そこがデフォルメされている。目の周りをくると縁取るラインが、キャラクター的な特徴であるという。

その他、赤や青などの色味も足されて、本来は最後にラテックス性の鼻とカツラをつけて、メイクが完成する。また、パフォーマンス中に赤い鼻が落ちてでもいいように、鼻の頭にも赤い丸模様を書いておくことが多いようである。ジン先生曰く、基本的にはクラウンのメイクはメイクをしているというのではなく、こういう肌だという設定でパフォーマンスをするとのことである。オーグストタイプも肌色が見えるところには肌色のドウランを塗ることになる。

完成したメイクはFigure 1の通りである。鏡を見てまず驚いたのは、自分の表情筋の動きがデフォルメされていて、わずかに動かただけで、その動きがかなり誇張して示されるように見えることである。表情を動かす面白さ、というより気持ちよさに、思わず鏡を見ながら笑ってしまう。先生方からは「クラウンメイクをしたら、素顔よりもメイクの顔の方がその人らしくなる感じがする」と聞いていたが、少なくとも私自身はメイクへの違和感よりも、あま

Figure 1

クラウン・ペペのメイク

(オーグストキャラクター)



りに表情筋に沿っていて馴染んでいることへの驚きが大きかった。

オーグストタイプのメイクは、目と口の周りが白く塗られていることが特徴であるが、特に少し離れたところから見ると、表情によってその白い部分の面積や形が大きく変化するため、自身の表情がより増幅されていることがより実感された（Figure 2）。むしろ、あまりに表情が増幅されるため、この顔でどのように表現したり、表情を作ればいいのか、練習が必要だと直感した。このメイクをした身体をうまく乗りこなすために練習がいる、というような感覚に近い。

他の受講生のメイクも進むが、ホワイトフェイスやオーグストなど、皆それぞれの性格的な特徴が体现されていた。ホワイトフェイスは顔を全て塗るため大変そうであった。私のメイクはまさしく少年らしく、他の受講生にも定評だった。自分自身でも、特に表情の作りやすさや顔に馴染む感じ、華やかな感じが気に入ったのだった。

第16回 メイクアップ (2) 今回もメイクアップの実施日であるが、前回やったため、今回はメイクをする際のプロセスに着目して観察した。どの受講生も一様に、初めて自分がメイクされた姿を鏡で見た時は思わず吹き出してしまっていた。しかしその後、まじまじと鏡を見ながら、表情を変えたり、角度を変えたりする様子が印象的であった。女性のクラウンの場合は、アイラインやつけまつ毛をつけることもあるようで、個別にメイクについて相談している受講生もいた。

クラウンのメイクは理想的には30分程度で行うと良いそうだが、何度か練習しても45分ほどかかってしまう。それなりに慣れが必要である。

第17回 コスチューム案 メイクが完成し、それに合わせて衣装を決定する回である。それぞれの

人のクラウンテーマに合わせて、衣装を作っていく。ビギナークラスの場合は、基本的にはなるべく手間や費用をかけず、とりあえずの簡易のものでいいが、原則は自分でテーマにあったものをアレンジして用意することになる。

コスチュームはキャラクターの具現化であり、服装だけでなく、ウィッグ（髪）も含めて自身のキャラクターを元に決定していく必要がある。なお、クラウンは一般的な意味での「人間」ではないため、トップスやボトムスは自身の身体のラインがあまり見えないもの、人間の素肌が見えないものが望ましいとされる。手も手袋を着用する場合がある。また、キャラクターものやロゴが入ったものの避けるべきで、企業ロゴなどがどうしてもある場合はテープで隠すなどの工夫をする。

コスチューム案については、白井先生から各受講生におおまかな方向性のアドバイスをもらい、また別途個別に相談に応じてもらった。「少年のようなクラウン・ペペ」のコスチュームアドバイスとしては、例えば野球やアメフト、バスケットボールのユニフォームのような趣向の衣装はどうか、と提案を受けた。実際に本国アメリカでは、上記のようなユニフォームの意匠のクラウンコスチュームがジャンルとして存在していて、スタジアムなどで活動していることがあるそうだ。ほかにも、裾の長さやウィッグの色に関しても、メイクの写真を見せながらいくつかのプランを提案していただいた。

これを受けて、講座終了以降、実際に自分の子どもの頃に何らかのスポーツや選手に入れ込んだ体験のない中で、ユニフォームの衣装をどう考えたいのか悩ましくあれこれ考える日々が続いたが、今の自分が少年だったら、確実にハマり、憧れ、なりたいと思うであろう存在を見つけた。ちょうどこの時期に、連日メディアで取り上げられていた、ド

Figure 2
表情を誇張するメイク



ジャーズの大谷翔平選手である。

偉業を成し遂げたカッコいい存在に、わかりやすい少年のようなクラウン・ペペは、のめり込んだらもうその色しか着ない！と言いきそうな気がした。通常、クラウンの衣装は色々な色味が混ざったカラフルなものが多い印象であるが、クラウン・ペペの衣装は青一色で行くことに決めた。そういえば自分が小学生の頃、同級生にも私服が赤一色、青一色という人がいたような記憶を思い出したからである。野球のユニフォームの趣向で、青色の無地のユニフォームに手作りで、色々と装飾をすることにした。

帽子や衣装にも自身の嗜好を示す恐竜や野球道具のワッペンを貼ったり、ボタンを付け替えるなどの装飾を追加した (Figure 3)。帽子が小道具のようになればと思い、目のボタンをつけている。ウィッグは明るめの緑や黄色、青などが良さそうで、結局は鮮やかな青色のショートヘアのものを選択した。なお、背番号の 5 番の理由は、最終回のパフォーマンスの出番が 5 場面だと決まっていたことと、5 歳くらいの少年を想定していたからである。結局、コスチュームが完成したのは発表会の前々日あたりであった。

第 18 回 ウォークアラウンド・ギャグ、グリーティング この回は衣装の準備期間でもあったが、クラウンの真骨頂であるグリーティングとウォークアラウンド・ギャグについて学んだ。現代のクラウンはサーカスの一員として (時にリングマスターという重要な役割として) パフォーマンスを行う場合が多いが、特にサーカスにおけるクラウンは、中央の舞台でパフォーマンスの準備をしているときに、視線を舞台から逸らしたり、観客を飽きさせないための前座や場つなぎ役、あるいはショーが終わった後のお見送り (追い出し) 役として機能している。

例えば舞台が暗転したかと思えば、クラウンが観客席の中に突然現れ、客いじりをしながら別の出入り口まで歩き、そして観客を沸かせて引っ込むと中央で次のパフォーマンスが始まる、というようにである。その中でも、観客を飽きさせないための“くだらない”ギャグを 3 つほど持っておくことは、クラウンにとっては必須のことだという。例えばマジックをやって失敗したり、ぬいぐるみをペットに見立てて撫でてもらったりなど、些細ではあるがわかりやすく、思わず笑ってしまうネタを総称して、ウォークアラウンド・ギャグと呼ばれている。

また、「グリーティング」と呼ばれる回遊型パフォーマンスもクラウンに特徴的な形式の一つである。いわゆるショータイムのように、観客が見ている舞台に演者が現れるのではなく、クラウン自体が観客のいる場所や道などに出逢いに行く、あるいは通路などでお客さんを歓迎しつつ誘導するなどの役割を担うことになる。最近では、ショッピングモールでのイベントや、地域のマルシェなどでクラウン・グリーティングを行うことも多いそうである。

グリーティングは基本的に即興劇であり、その場で観客と関わりながら、中には嫌がったり、怖がったりする人ともうまく距離を保つなどの工夫をしながらパフォーマンスをする必要がある。白井先生曰く、「ミート・アンド・グリート (meet & greet: 出会いと歓迎)」と呼ばれるこのグリーティング・パフォーマンスで重要なことは、「お客さんが何をして欲しいのかを主眼とすること」であるという。相手のニーズ、関わりたいのか、遠くから見ていたいのか、ちょっと写真だけ撮りたいのか…そのニーズを感じ取りながら、即興で関わっていく必要があるという。ジャンケンや握手、小道具や世間話など、さまざまな仕方で観客と繋がろうとするクラウンは、巧みな「媒

Figure 3

クラウン・ペペの衣装



介者」であるように思え、魅力的な存在であるように思えた。これができるようになるには、たくさん場数をこなす必要や胆力が必要であろうことも想像できた。

第19回 発表会リハーサル 第19回は、翌週最終回の発表会に向けてのリハーサルや準備のための時間である。発表会では、一人につき約5-10分の持ち時間があり、何かひとネタやるということが決まっているだけで、どのようなパフォーマンスをするのか自体も、受講生が考案する必要がある。

少年のようなクラウン・ペペが、どのようなネタをするべきか、原案を白井先生にお話しし、大枠の流れを作っていく。考案したパフォーマンスは、毎回のよう実践していったトリップ・テイク・リアクションの動きを元にしている。「ご機嫌に道を歩いていると、道端に黒い影が動いていることに気がつき驚いて怖がるリアクションをする。よく見るとそれはクワガタで、嬉しくって掴もうとするが、ちょっと怖くもある。でも怖くないふりをして、掴んで強がって観客に得意げに見せびらかす。ついでに強がって胸につけてみたら顎で挟まれて大騒ぎ、挙句服の中に入って七転八倒、なんとか服から取り出して泣きながら去っていく…」このような流れである。

これまで練習してきたテイクの要素と、少年らしさを表現する展開を想定した。白井先生に相談する前の原案はクワガタを捕まえて意気揚々と去っていくことで終わっていたが、何かもうひと展開を、ということで囁かれてしまうシーンを入れてみるというアドバイスをいただいた。ただ、シナリオはできても、これをどのように演じるか、本当にできるのか、不安は募る一方であった。

第20回 発表会 ついに最終回、発表会本番当日を迎えたが、ちょうどビギナークラスは卒論ゼミがある日でもあり、その日はギリギリまで指導して急いでスタジオに入り、急ぎメイクをしてギリギリ間に合い、緊張するまもなくスタートしたと言うのが本音であった。最終回についての事前説明としては、プチ発表会と言えども正確には我々受講生と講師陣、ひょっとしたら本講座の修了生が数名来るかもしれない程度の小規模なものだと聞いていたが、蓋を開けてみたら関係者が20名近く来ていて、スタジオにずらっと椅子が並び観客席となって満員状態であった。「話が違う！」と騒ぐ受講生たちを尻目に、本番がスタートした。

本番が始まり、袖に並べた椅子に座って仲間たちのパフォーマンスを観ていた、というよりも見守っていた。そして私が演じる番となる。「少年のようなクラウン、ペペ」。とにかく自分にできることは、もう元気いっぱいやるしかない、ということでエナジーを高く、とにかくハキハキと行こう、とパフォーマンスをスタートした。大まかな段取りは想定通りで、観客近くを歩いていたら何か見つめてびっくり！

と言うテイクの仕草をしたら、勢いがありすぎたのか、実際に何かいたと思われたのか近くの観客から悲鳴が飛ぶ。パワーの制御を間違えたかと血迷ったが、今更後には引けない。気を取り直して拾ったクワガタをおっかなびっくり観客に見せつけて、服につけて、うっかり囁かれて転げ回る。途中、ウィッグが取れかけるハプニングがあったり、想定外のことも起こったが、なんとか自分の出番をやり切った。

観ていた同期や先生方、先輩方からは「元気で面白かった」という評をいただいた。とりあえず無事に出番が終わっただけで安堵した、というのが本音である。普段から教員として大勢の人前に立つことはあれど、このような形でパフォーマンスをすること、人前で「クラウン・ペペ」として愛すべき弱点を曝け出すことのヒリヒリする感覚を味わうことができた。

そして、これがこのビギナークラスの最終回でもあった。皆でバタバタとクラウンのメイクを落とし、長い間ありがとう、と挨拶をしてそれぞれ帰っていく。実はこのビギナー・クラスが終わった二ヶ月後には、アドバンスクラスという上位クラスがあり、みんな継続するのか気になっていた。そして結局、このクラスの全員が、またアドバンスクラスで再会することになり、クラウンとしての探求は、現在も続いている。

考察と今後の展望

クラウニングと個性化の過程

上記のように、私のクラウニング講座体験の内実と、私自身に起こったことを記述した。特に第1回のクラウンネーム決めから、講座前半のクラウン・ルーティン練習と、第14回のキャラクター・ディベロップメントを経て、自身のキャラクターの開発のプロセスを通じて、クラウン・テーマである「少年のような」というキーワードで示される私の特徴の位置側面、特にその弱点や欠点を含む「私らしさ」へと、クラウンという具体的なパフォーマンスを通じて探究を進めていくこととなった。

各回の記述部分でも書いた通り、「少年のようなクラウン」という私のクラウン・テーマはそれを聴いた時には意外でありながらも、確かに納得のいくものであった。自身の未熟さや幼さ、向き合いづらさのようなものは確かに私自身の自覚する、考えても手厳しい私の悩ましい欠点の部分であったが、一方で自分の持っているついつい何かにのめり込んでしまうような一側面は、自分の強みでもある。確かにそれは弱点でありながらも、それを自身のクラウン・キャラクターとして取り出し、それを増幅してルーティンを通じて「演じてみる」「なる」という具体的かつ身体的な活動によって再体験した。特に、クラ

ウンのメイクや衣装など、まさに実際に自分が身体的に変化する過程を伴って、自分自身ではあるがある種別の存在になるという体験を通じたことは、より再帰的に、かつ自身の少年らしさを粒立たせて理解するための契機となるように考えられる。

この再体験には、他の受講生、観客、他者からの「笑い」を伴って実現される。自身の弱点へのアクセスという極めて脆弱で、内省的な営みを、他者とともに、身体的なパフォーマンスを通じて行うというプロセスは、いわゆる心理療法的な過程と類似しているようでいて、より身体的かつ笑いのエネルギーを呼び起こすかたちで実現されるがゆえに、異なる位相で行われるように感じられる。

欠点・弱点を認めあうコミュニティの醸成

ある時、ゼミを終えて大学からスタジオへと向かう道すがら、帰り道が一緒になった学生とクラウニング講座の様子を話していた。特にトリップ・テイクリアクションの毎回の課題を皆でやるが大変だという話をしていたら、そのゼミ生は「それだけ一緒に大変な課題をやっているって、きっとお互いに優しくなれそうですね」と言った。確かにその通りであった。

クラウニング講座においては、同期の受講生がメンバー相互に同じ課題に向かいながら、一つのコミュニティを形成しつつ学び合う過程であるということにより、自分の欠点や弱点をお互いに表現し合い、笑い合い、褒めあって支え合うプロセスが醸成されている側面が強い。ともに日々のクラウン・ルーティンの課題に冷や汗をかきつつ切磋琢磨しあい、同じ経験を共有し、お互いが自身の「個性」へと手探りにアクセスしていく過程には、他者からの賞賛や、笑い合い、認め合える関係性が重要な機能を果たしていると考えられる。

お互いをクラウンネームで呼び合い、その人をクラウン・キャラクターという誇張されたその人のある一側面ではあるが、確かにその人の「らしさ」と関わり合うこの講座のコミュニティは、べてるの家の実践で知られる当事者研究と類似する点がある。向谷地 (2009a) は、当事者研究にはユーモアが不可欠であると指摘しており、その思想的な背景としてフランクルのユーモア論を挙げている。また当事者研究が個人の「弱さの力」(向谷地, 2009b) を重視する点も、弱点・失敗こそ評価されるクラウニング講座の特徴との類似性を示し、クラウニング講座が個々人の弱点・欠点、あるいは当事者性へとつながることを促すことにつながるのである。クラウンというユーモアの要素を踏まえつつ、個々人の当事者性とのつながりを促すクラウニング講座においては、自己理解を深め、臨床的な意義をもつことが示唆された。

オートエスノグラフィとしてのクラウニング

本研究には、クラウニング講座の受講を経て、私自身の体験したことを対象にオートエスノグラフィを試みた。講座各回の内容、受講生への関わりを通じて、私にどのような変化が生じたのかを記述していったが、一方で、このクラウニング講座を通じて私自身が「少年のようなクラウン・ペペ」になるという過程そのものが、私のある側面を再帰的に理解するある種のオートエスノグラフィと捉えることができるのではないかと。

井本 (2013) が「自叙伝、詩、小説、日記、写真、戯曲、映像、回想録、論文アド、実に様々な形態をオートエスノグラフィはとる」と指摘しているが、まさにクラウニング講座では、自身の特徴、それもどちらかといえば弱点や欠点である側面を、自身の愛すべきクラウン・キャラクターとして体現化して、それを他者に表現していくこの一連のプロセスが、まさに戯曲的、身体表現的なオートエスノグラフィの取り組みであるとも言えるだろう。

また、オートエスノグラフィは「自分をケアする方法」(Adams et al., 2015) としての側面もあり、このような再帰的な自己の内省過程がある種のケアをもたらすという特徴が、クラウニング講座の臨床的な機序にも関連すると考えられる。特に、オートエスノグラフィの持つ「脆弱性」への関心を向ける側面は、クラウンの持つ「弱点・欠点が個性や強み、その人の魅力となる」というある種の価値の反転(岡村・道重, 2023) の中で実に精密なかたちで、かつ同じくクラウン養成過程の受講者同士の相互作用のうちで実現されていると考えられる。

鈴木 (2022) もまた、オートエスノグラフィによる「脆弱性」による他者との関わり、結びつきについてポストヒューマンの議論を踏まえて論じているが、これはまさにクラウニング講座において実践されている対人的相互作用そのものの特徴だとも言える。ここに、弱さへの志向を通じて、クラウン、当事者性、オートエスノグラフィの共通項が浮き上がってくる。

「なる」の複数性

本研究では、クラウンに「なる」という過程をめぐるオートエスノグラフィの試論であったわけだが、実際にクラウン養成講座を受講する中で、「なる」をめぐる戸惑いや居づらさを感じていた。たとえば第6回のジェブリッシュを学ぶ回で、自分のなかのエネルギーギッシュな部分、のちの「少年らしさ」に通じる奔放で自由な側面に接近するが、その際に初めて、自分がこの講座を通じて、研究者・観察者としてのスタンスと、講座の受講者としてのスタンスとのあいだで揺れ、わずかでも遠慮、萎縮して参加していたことに気がついた。今思えば、全力でクラウン

グを楽しんでしまうことで、何か本来のクラウン
グ講座のムードを壊してしまいはしないかという恐
れや警戒心があったように思うが、このような警戒
心自体はフィールドに入る上では当然の想定である
とも思う。

さらに言えば、研究者（フィールドワーカー）と
してのスタンスと、一受講者としてのスタンスが影
響し合いながら、とまどいの中で受講していたので
あった。この場合、「なる」という一連の行為には、
この一つの語では言い表しきれない、意味の違いと
重なりがあるように思われる。いわば、研究者とし
てフィールドワークを遂行することとしての「為る」
（研究を完遂しようとする）営みと、講座の一参加者
として自身の探究を行うこととしての「成る」（自身
のキャラクターになろうとする）という2つの役割
が拮抗した時期が長かった。

このような拮抗がもう存在しない、とは決して言
い難く、さらにはクラウンに「成る」という過程に
おいても未だ数ヶ月の探究を終えたばかりである。
クラウンというモチーフに対して、研究の視点を踏
まえたいわば鳥の目のような「為る」と、自身のキャ
ラクターの探究による「成る」という2つの次元を
往来しつつ研究を進めていく必要がある。

前出のように、私はすでにビギナークラスの次の
段階であるアドバンスクラスの受講を始めている。
ここはさらに上級者向けのクラスとして、受講者そ
れぞれのキャラクター開発はもちろん、ジャグリン
グなどの技能やエンターテイメント表現力の向上を
目指しつつ、最終的にはさらに一年後の卒業公演の
ショーの出演を目指すものである。クラウン・ペペ
というキャラクターを通じた「クラウンになる」過
程を探究する本研究プロジェクトは、今後も継続さ
れる予定である。

利益相反

本研究に関連して、現在、神戸学院大学、播磨社
会復帰促進センター、株式会社小学館集英社プロダ
クション、株式会社 G・E - JAPAN、社会福祉法人
かがやき神戸の5者において共同研究（課題名：矯
正教育におけるクラウン講座の効果とその意義
に関する探索的研究）を実施しており（研究契約期間：
令和5年10月1日～令和7年3月31日）、筆者はこ
の当該共同研究の研究代表者として、株式会社小学
館集英社プロダクションによる研究費の出資を受け
ている。なお本研究自体は、筆者の個人研究費を用
いて進められ、当該共同研究の枠外で行われたもの
である。よって、本論文は当該共同研究とは独立し
た筆者の個人研究活動として実施されたものである。

謝 辞

本研究の執筆にあたり、お世話になりました株式
会社 G・E - JAPAN の白井博之先生をはじめ、講座
講師のクラウン・ジン先生、クラウン・ドレミ先生、
ジャックと 0084 クン先生、そしてともにクラウンビ
ギナークラスで学んだ第10期同期生の皆様に感謝申
し上げます。

引用文献

- Adams, T. E., Jones, S. H. & Ellis, C. (2015).
*Autoethnography: Understanding Qualitative
Research*, Oxford University Press. (アダムス, T. E.・
ジョーンズ, S.H. エリス, C. 松澤 和正・佐藤美保
(訳) (2022). オートエスノグラフィ 質的研究を最
高し、表現するための実践ガイド 新曜社)
- Gendlin, E.T. and Johnson, D.H. (2004). *Proposal for an
international group for a first person science*, The
Focusing Institute.
- Gendlin, E.T. (1981). *Focusing (2nd ed.)*. New York:
Bantam Books. (E・T・ジェンドリン 村山 正治・
都留 春夫・村瀬 孝雄 (訳) (1982). フォーカシング
福村出版)
- 井本 由紀 (2013). オートエスノグラフィー—調査者が
自己を調査する. 藤田 結子・北村 文 (編) ワー
ドマップ現代エスノグラフィー—新しいフィー
ルドワークの理論と実践 (pp. 104-111) 新曜社
- 向谷 地生良 (2009a). 統合失調症を持つ人への援助論
——人とのつながりかたを取り戻すために 金剛
出版
- 向谷 地生良 (2009b). 技法以前——べてるの家のつく
りかた 医学書院
- 岡村 心平・道重 さおり (2023). 反転理論によるクラ
ウン講座の教育的意義と臨床的可能性の検
討—矯正教育における身体性をめぐって— 神戸
学院大学心理学研究, 6(1), 57-66.
- 大島 幹雄 (2021). 日本の道化師 平凡社新書
- 鈴木 ちひろ (2022). オートエスノグラフィーと学際的
協働：痛みを感じられる言葉によるリフレクショ
ン 大阪公立大学 人間社会学研究集録 17, 3-29.

—2025.1.14 受稿 2025.1.17 受理—

担当教員 岡村 心平

- ・園芸療法が人間の心身の健康に及ぼす影響についての文献的検討
——心理職が園芸療法について学ぶ意義をめぐって——
- ・日本人の人の多面性についての受容形態に関する要因の文献研究
- ・締め切り前に部屋が散らかる原因の解明と改善法の検討
——ストレスがもたらす先延ばし行動の観点から——
- ・犯罪の背景にある被虐待経験がこどもの犯罪傾向につながるメカニズム
- ・大学生の自尊感情がパートナー選択と恋愛欲求に与える影響
- ・教育心理学の観点による音楽ジャンルの好みと大学生の情緒安定性の影響の検討
- ・心理学部生から知る一般的心理学の分析及び、心理学部在籍数を増加させる効果的手法についての仮説
- ・メディアからの影響の受けやすさと曖昧さへの耐性が親の養育態度への認知に与える影響
- ・日本プロ野球名監督の心理学的特徴の共通点
- ・サドベリー教育における十分に機能する人間に向かう教育コミュニティの検討
——フォーカスグループインタビューを用いて——
- ・読書感想文作成過程におけるフォーカシング的視点の応用
——自分で納得するまで「待つ」ことの重要性——
- ・インターネットの歴史とネット恋愛の言説に関する文献研究
- ・ファンダムがブランドロイヤリティによる忠誠心に与える影響に関する研究
——ファンの感情的結びつきと参加活動の調査——
- ・戦後日本における社会危機と信念体系の関係性——クライシス・カルトの観点から——
- ・チャットメッセージの文末句点が感情理解に与える影響——大学生を対象とした質問紙による印象調査——

担当教員 河瀬 諭

- ・SNS 投稿と自己肯定感の関係について
- ・音楽ジャンルと服装の趣向の関連について
- ・音楽の聴取において作曲者情報が印象に与える影響
- ・2色配色によって構成される安全色が人に与える心理的效果に関する研究
- ・音楽聴取の心理的背景に関する質的研究
- ・チャットツールで用いられる感情表出記号と性格特性の関連
- ・音楽能力は性的魅力の増加に影響するのか
- ・スポーツ観戦頻度における性格傾向調査
- ・心理的負債感とライフスキルの関連
- ・アルバイトにおけるクレーム・不快な出来事への対処法と性格特性の関連性について
- ・髪型・髪色による印象の違いについて
- ・ロゴの色彩が記憶に及ぼす影響
- ・電車で知らない人に寄りかかれたときの行動特性について
- ・チョコレートのパッケージカラー・デザインにおける印象評価と購買意欲への影響について
- ・楽観性が喫煙に与える影響
- ・コンテンツ課金をする際の心理

担当教員 小久保 香江

- ・大学生における自己肯定感と信頼感の関連性
- ・アロマセラピーの心理学的及び生理学的効果について
- ・大学生における幼少期の親子関係と夫婦間の関係が現在の自己肯定感に与える影響
- ・現代の大学生の睡眠問題に関連する要因と改善案の検討
- ・植物が人に及ぼす心理的效果
- ・大学生における腸の調子と不安およびストレス対処の関係
- ・アレルギー疾患が与える QOL への影響についての文献検討
- ・推し活動と心理学の関連について——推し活動の一環としてオタクが痛バッグを組む理由——
- ・サッカーにおける心理的プレッシャーとパフォーマンスの関係
- ・人間の攻撃性と犯罪——法的制裁と社会的制裁——
- ・オノマトペによる商品の印象評価——UNIQLO のタックワイドパンツを用いて——

- ・大学生のリーダーシップ能力とコミュニケーション・スキル——リーダー経験と体格について——
- ・表札の素材と書体による印象変化
- ・顔の印象評価における香水の影響：マッチとミスマッチの香水の比較
- ・香り・被服とパーソナリティの関係性についての検討
- ・期間限定商品を選択する者の性格特性と購買行動との関係

担当教員 小山 正

- ・攻撃性と社交性におけるスマホゲームと対人の比較に関する研究
- ・パニック症とその治療法
- ・抑圧と趣味への依存との関連性
- ・SNS における攻撃性の検討
- ・ルッキズムと無くならない外見による差別
- ・自閉スペクトラム症と非行行動との関連
- ・子どもの療育施設の現状と課題
- ・大学生における性的少数者の理解と受容の背景
- ・近年のイップスに関する研究動向
- ・MBTI 性格検査を用いた「類は友を呼ぶ」の実証性
- ・不注意・多動性・衝動性と自己意識との関連
- ・ギャンブル依存症の現状とその課題
- ・親と環境の影響性による子どもの性格形成

担当教員 定政 由里子

- ・教師のバーンアウトの要因とその予防について
- ・幼少期・青年期の愛着傾向と、対人依存欲求の関連性の検討
- ・パーソナリティが日本画の評価傾向に与える影響
- ・大学生における浮気の意志と交友関係の関連について
- ・学校における LGBTQ + 教育の現状と今後の検討
- ・大学生のスマホの依存と日常生活に対する主観的評価と自己意識との関連の調査
- ・髪の毛の色による見た目の変化と印象の関係性について
- ・お金に対する心理的態度と孤独感・主観的幸福度との関連について
- ・クチコミ参考の程度と性格特性の関連性についての検討
- ・大学生における動機づけ調整方略と性格傾向の関係性の検討
- ・救援者の PTSD 二次受傷に関する文献調査
- ・既視感体験と睡眠との関連
- ・大学生の怒り場面における対処毎の怒り感情と自尊感情の変化の検討
- ・YouTube 広告を視聴した際にユーザーが抱く感情について
- ・先延ばし意識特性と 5 大性格特性の関連性の検討

担当教員 道城 裕貴

- ・少年の非行行動の原因と更生方法について
- ・母子の共依存が及ぼす向社会的行動適応度への影響
- ・大学生のファン行動と自己愛人格傾向及び没入傾向の関連について
- ・母親の養育態度と母子関係が青年期のレジリエンスに及ぼす影響
- ・若者の薬物依存の現状と心理的援助
- ・シャーマンフロイデと対人親密度の関連
- ・SNS 利用が賞賛獲得欲求・拒否回避欲求及び主観的幸福感に与える影響
- ・SNS 使用態度と楽観性・悲観性の関連
- ・大学生バドミントン選手の音楽聴取とパフォーマンスの関連
- ・性格特性と部活経験が欺瞞的コミュニケーションに及ぼす影響
- ・若者における趣味と多面的楽観性の関連
- ・色が及ぼす心理的効果に関する展望
- ・商品広告の基調色による印象と購買意欲の関連

- ・出生順位及びきょうだい構成と性格特性の関連

担当教員 難波 愛

- ・若者世代の結婚観と子育て支援政策に関する現状と課題
- ・カミングアウトとアウトティングの実態と心理支援の考察
- ・障害者虐待を減らす手がかりの考察と取り組みについて
- ・人の同調傾向が行列行動に及ぼす影響
- ・親の養育態度が子どもの自己肯定感に与える影響について
- ・アニメ作品がなつかしさ感情と記憶想起に及ぼす影響——アニメ画像・アニメ動画を用いた調査——
- ・SNSの普及による大学生の浮気感情の変化について
- ・悲しい歌詞が気分 に 及ぼす影響
- ・時間的態度とストレス耐性がキャッシュレス決済に与える影響
- ・友人との会話が疲労感緩和に及ぼす影響
- ・メイク用品購入時に社会心理特性が知覚リスクに及ぼす影響について
- ・モチベーションの種類が逸脱行為に及ぼす影響
- ・思春期・青年期の心理的要因における過敏性腸症候群（IBS）の概念と支援
- ・SNSの誹謗中傷による精神的被害の現状と課題
- ・ファッションへの関心と自己肯定感との関連性の検討

担当教員 長谷川 千洋

- ・金融行動に関する文献研究
- ・聞き取り困難症についての文献的研究
- ・大学生の発達障害に関するイメージ——知識及び接触頻度との関連性——
- ・大学生における被共感経験と自己受容感および他者受容感との関連について
- ・大学生における両親間の葛藤に対する認知と自己効力感とが両親からの心理的自立に及ぼす影響
- ・大学生の社交不安症傾向と自己効力感の関連
- ・大学生における社会的問題解決方法とTOT解決方法との関係
- ・大学生における向社会的行動の経験と自己肯定感が家族関係に及ぼす影響
- ・犯罪の環境要因についての文献的考察
- ・大学生のネガティブ感情体験に対する筆記開示の有無が精神的健康に及ぼす影響について
- ・公認心理師を目指す学生の学習動機づけの傾向と推移
- ・自閉症スペクトラム障害のプロソディ認知とコミュニケーション
- ・身振りの有無が聴覚情報理解に及ぼす影響
- ・化粧品購入スタイルにおけるゆとり感比較
- ・大学生の郷土愛が地方創生に対する意識にもたらす影響について
- ・大学生の音楽の好み友人とのコミュニケーションに及ぼす影響

担当教員 広沢 俊宗

- ・態度と性格の類似性が対人魅力へ及ぼす影響に関する1考察
- ・人はなぜ説得されるのか
- ・愛着スタイルとひとりで過ごすときの感情および過ごし方との関連について
- ・ファン態度、ファン行動及び主観的幸福感との関連性
- ・大学生の深い自己開示に関する一考察——友人とセラピストによる開示対象の比較検討——
- ・ペットの飼育状況が愛着度、孤独感および主観的幸福感に与える影響
- ・失恋コーピング、恋愛関係のタイプ及び自己肯定感の関連性
- ・中国青少年の心理的ストレスに関する研究——孤独感、携帯依存症、及び抑うつ状況に焦点を話題——
- ・推し活に影響を及ぼす性格特性に関する一考察
- ・大学生におけるSNSの利用がメンタルヘルスに及ぼす影響——社会的比較の観点から——
- ・対面とLINEの自己開示量と心理的要因について
- ・商品の背景が購買行動における認知処理過程に及ぼす影響——背景色と明度に焦点を当てて——
- ・絵を描く際における描く対象や絵画技法・道具がもたらす心理的効果
- ・若者における睡眠とストレスとの関係について

- ・大学生のクラブ・サークル活動の経験がレジリエンスに与える影響
- ・絶対音感と認知機能の様々な関係性と今後の課題

担当教員 道重 さおり

- ・大学受験での成功体験と進路選択に対する自己効力感及び特性的自己効力感との関連についての検討
- ・日本の少年矯正施設における就学の課題に関する文献検討
- ・イヌ派とネコ派の性格傾向と集団帰属意識
- ・大学生における海外志向および日本志向に影響を与える性格特徴の検討
- ・読書習慣の違いによる援助行動の違いについて
- ・性格特徴による嘘の否定的認知度の違いについて
- ・アイドルに対する推し活動の有無と自己肯定感及び恋愛への態度の関連について
- ・愛着と障害の観点からみる少年非行の要因
- ・女子大学生における家庭での養育態度が性格特徴に及ぼす影響
- ・大学生の SNS における満足度と現実幸福度の関連の検討
- ・大学生のギャンブル行動における特徴の検討
- ・SNS 上の投稿内容と承認欲求の関連について
- ・過去の余暇活動の成功体験が大学生の進路選択に及ぼす影響
- ・カプセルトイに魅了されやすい性格傾向

大学生における性的少数者の理解と受容の背景

C121030 鈴木 礼華

性的少数者の理解・受容の現状と背景について研究するために、神戸学院大学心理学部の学生を対象に調査を行った。その結果、因子分析では3因子19項目が抽出され、対応のない t 検定では学校で知った場合とそれ以外で知った場合の各因子得点において有意な差はなかった。また、理解・受容と、マスメディアおよび SNS の利用の間の相関分析では関連性が低いとわかった。さらに、取り上げられた頻度は多くても1ヶ月に数回であり、理解・受容との繋がりには低いことがわかった。以上より、理解・受容にマスメディアや SNS の利用は関連しておらず、カミングアウトを受けた際の行動と高校の授業やセミナーで取り上げられた回数にも関連性がないことが明らかとなった。これは、若者がインターネットに触れる機会が増えていること、近年性的少数者に対する受容が広がりつつあることが関係していると考えられる。今後の取り組みとしては当事者の意見を聞き、過度に取り上げずに自然と向き合う環境を作っていくことが重要だといえるだろう。

身振りの有無が聴覚情報理解に及ぼす影響

C121135 奥田 結衣

発達障害や精神疾患などが背景要因にある人は、聴覚情報理解に困難さをもつことがあり、その支援のひとつとして、身振りなどの非言語的情報を同時に提示する方法が用いられるが、理解の促進についての詳細は不明である。そこで、本実験では、身振りの有無が聴覚情報理解に与える影響を検討することを目的とし、問題の難易度の違いによる影響についても検討を行った。具体的には、大学生52名（平均年齢18.5歳、 $SD = 0.75$ ）に対して、聴覚情報を音声のみで提示する条件、音声と同時に身振りを画面で見る条件、音声と同時に画像を見る条件に分けて提示した後に文章理解課題を実施し、身振りの有無によって成績が変化するか実験を行った。その結果、低難易度の問題において身振りは聴覚情報処理を阻害するが、高難易度の問題においては聴覚情報処理を促進することが示された。この結果は、選択的注意における情報処理レベルの違いが関与している可能性があると考えられる。

**チャットメッセージの文末句点が感情理解に与える影響
——大学生を対象とした質問紙による印象調査——**

C121165 日山 陽菜

2024 年, LINE などのチャットにおいて, メッセージの文末に句点「。」を付けることで相手に威圧感を与える現象が「マルハラ」として注目を集め, 一部で話題となった。しかし, 国内の先行研究では, チャットメッセージにおける句点が受け手の感情理解に与える影響についての検討はまだ少ない。そこで本研究では, 「マルハラ」の背後にあるメカニズムを探索的に調査し, さらに, 送信相手との関係性とその影響に及ぼす効果について検討した。SD 法を用いて文末句点の有無による印象評価を測定し, 記述統計と分散分析を行った。その結果, メッセージの印象には文末句点の有無だけでなく, 送信相手との関係性や文脈が重要な要因となることが示唆された。また, 「マルハラ」のメカニズムとして, 若年層にとって句点は相手の意図を汲み取りにくい要素であり, その結果, 多様な解釈を生むことで句点に過敏に反応する人が一定数存在する可能性が推測される。

自閉スペクトラム症をもつ子どもへの言語獲得支援における発達のアプローチ

8C23101 足立 薫音

(指導教員 小山 正)

本研究では、ASD (autism spectrum disorder) をもつ事例のコミュニケーションと言語発達に関して、表象、語彙、意味論、語用論、統語論、音韻論、形態論の7つの側面に注目し、ASD をもつ事例のコミュニケーションと言語発達の特徴と支援について検討することを目的とした。さらに、障害が併存している子どもとしていない子どもの支援、障害の様々な程度に対する支援、発達期に併せて支援はしているが、個々がもつ障害の状態をみて、どのような支援が有効と考えられるのかを検討した。本研究では、わが国の8つの学会から発表された2010年から2022年までの学術論文を対象に、ASD をもつ子どものコミュニケーション支援に関する研究を分析した。その結果、過去13年間に抽出された90本の論文のうち、適格基準を満たした14本を対象とした分析を行った。分析の結果、支援方法は、行動分析的アプローチのTEACCH、PECS、S-S法、発達論的アプローチ、語用論的アプローチのインリアルセラピー、共同ルーティン、ナラティブによる指導、補助代替手段(AAC)としてマカトン法などが実践されている。研究数は減少傾向で、研究内容は語彙や語用論的側面に偏っていた。さらに、ASD をもつ子どもへの支援研究は幼少期から学齢期に集中しており、10歳以上の子どもを対象にした研究は1編であった。早期療育が広く注目される一方で、青年期以降の支援における有効性や具体的な方法論はまだ確立されていない。発達段階に応じた支援方法として、前言語期には共同ルーティンやマカトン法、一語期にはPECSやインリアルセラピー、二語期以降にはナラティブ指導が有効と考えられる。これらの支援に加えて、発達論的アプローチを年齢や発達段階に適応させて行うことが、継続的な支援に繋がると示唆された。併存症への支援では、併存している障害やASDの程度や特性に応じた支援が必要とされている。例えば、ADHDを併存する場合は注意力への配慮が求められ、知的発達症を併存する場合にはその原因にも応じた支援が必要とされる。また、ASDの程度で支援の対象とすべき言語的側面が異なるため、個々の特性に応じた対応が重要である。ASD をもつ子どもへの言語・コミュニケーション支援は、一定の支援は基礎部分を確立しており、共通理解されていると考えられる。確立している既存の支援方法を参考にしながら、語彙や語用論以外の言語的側面へのアプローチなどの新たな支援方法の開発や、青年期以降を対象とした研究の発展、併存症やASDの重症度を考慮した個別化された支援の構築が、さらに求められると考えられた。

マスクの着用と社交不安との関係

8C23102 井上 真帆

(指導教員 長谷川 千洋)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行により、マスクの着用が長い間推奨されていた。新型コロナウイルス感染症の流行前から、マスクは衛生目的以外の理由で用いられていることが報告されている。新型コロナウイルス感染症流行後の研究では、特に他者にみられる不安の高い人がマスクの着用頻度を増やすことで、知覚的な匿名性を得て不安を軽減している可能性が指摘されている。一方で、対人交流不安はマスク着用頻度に有意な影響を与えないことが示唆されていた。本研究では、社交不安がマスク着用に及ぼす影響を検討することを目的とした。マスクを着用する頻度が高い人ほど、社交不安傾向が高く、また、マスクを着用している理由が感染不安等の理由であっても、社交不安傾向がある人がいる可能性についても検討した。

神戸学院大学の学生 131 名 (平均年齢 19.1 歳 ($SD=0.89$)) を対象に、Social Phobia Scale 日本語版 (以下 SPS-J) と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版 (以下 SIAS-J) を用いて社交不安傾向を測定した。本研究では、SPS-J と SIAS-J を合わせた尺度のことを社交不安尺度とした。また、マスク着用に関する質問として、ここ一か月のマスク着用頻度に関する質問項目と、マスクを着用している理由について「感染予防のため」、「周りも着用しているため」、「人に顔を見られるのが不安なため」、「着用しないといけない環境のため」などの 7 項目から回答を求めた。分析方法として、マスクの着用頻度を独立変数、社交不安の平均得点を従属変数とした分散分析を行った。次に、マスクの着用理由を 7 つの群に分け、分散分析を行った。そして、調査対象者を感染予防群、周りも着用している群、人に顔を見られるのが不安群の 3 つの群に分け、3 群を独立変数、社交不安の平均得点を従属変数とした分散分析を行った。結果、各群間に有意差はみられなかった。

マスクの着用理由ごとの社交不安傾向に有意差がみられなかったことから、感染不安や同調行動、他者からの視線に対する恐怖などのマスク着用理由にかかわらず、社交不安の程度は一定であると考えられる。また、マスクの着用頻度と社交不安傾向に有意差がみられなかったことからマスクの着用頻度の増加は社交不安傾向とあまりかわりがないとも考えられる。人に顔を見られるのが不安と回答した者の中には、欠点を隠すため強迫的にマスクを着用する身体醜形症傾向の回答者がいる可能性もあると考えられる。

映画鑑賞による心理的変容のプロセス

——M-GTA を用いた質的研究——

8C23103 大久保 大和

(指導教員 長谷川 千洋)

現代において映画は、映画館のみならず、テレビや電子端末など手軽に鑑賞できるものとなり、社会や文化に影響を与える受動的文化活動である。心理学においても映画研究は多くなされており、映画が授業や心理療法の場面において心理的変容を起こすことが報告されている。しかし、実験参加者やクライアントを対象とした主体的な映画選択や鑑賞後の心理的変容の促進に関する実証的研究はほとんどない。そこで本研究では、映画鑑賞による心理的変容のプロセスを明らかにすることを目的とし、映画鑑賞により心理的変容が起こった大学生 3 名および大学院生 4 名を対象にしたインタビュー調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた分析を行った。分析の結果、43 の概念が生成され、映画鑑賞による心理的変容のプロセスは、①映画鑑賞前状態、②映画鑑賞・体験、③変容準備状態、④心理的変容の 4 つのカテゴリ・グループに分けられた。鑑賞者は、映画との偶然の出会いや、映画予告、ポスターに惹かれ、興味を持って映画を選択することが多く、鑑賞中には感情移入や登場人物との同一化を通じた感情体験が得られる。この際、映画の撮影方法や音楽、俳優の演技などの演出が、映画体験を強化している。鑑賞後、鑑賞者は内容を解釈し、映画で得た知識や感情を現実結びつける。映画の解釈を促進するために、友人と話す、映画のレビューを見るといった行動を取ることも確認された。このプロセスを通じて、新たな視点や価値観が形成されること、映画を通じて自信を得る、及び行動変容の準備を進める場合があった。心理的変容プロセスの最終段階において、鑑賞者は知識の定着や行動の実行が起こることが明らかになった。また、映画鑑賞によって起こる心理的変容には、登場人物に対する共感的反応や親近性があり、ポジティブな気持ちへと自己変容が促されることが明らかになった。さらに、映画が持つ、俳優の演技や撮影方法、音楽と場面のマッチなどの「演出」と、対立や葛藤を分かりやすく描く、映画独自の三幕構成などの「構成」が、鑑賞者の感情体験や解釈に影響を与えることが示された。特に「映像作品への没入体験」が心理的変容を引き起こす重要な要因であり、映画の物語的要素や演出が鑑賞者の感情的・認知的な関与を高めることが考察された。今後の課題として、没入体験における注意集中や物語的臨場感をインタビュー調査で行う重要性が示唆された。

小学校における発達障害がある児童の支援に関する研究

8C23104 岡本 光里

(指導教員 村井 佳比子)

本研究は、国内の小学校での発達障害への支援に関する研究を概観し（研究 1）、小学生の子どもを持つ保護者の発達障害に対する認知度、知識、意識を調べ（研究 2）、さらに、小学校で支援を実践している専門家にインタビューを行うことで（研究 3）、発達障害がある子どもへより良い支援を提供するための手がかりを得ることを目的とした。研究 1 では、2006 年から 2023 年に出版された小学校に在籍する発達障害がある児童への支援に関する研究 37 篇を抽出し、検討した。その結果、道城他（2008）で指摘されていた、日本における通常学級での研究の少なさ、学業従事行動や学習行動、対人行動に関する研究の不足に関して、2006 年以降の研究ではこれらの研究が多く実施されていることが示された。一方、地域との連携に関する研究は見当たらず、今後の課題であることがわかった。研究 2 では、小学生の子どもを持つ保護者を対象に、発達障害の認知度、かかわりの有無、発達障害に関する基本的知識・意識について質問紙調査を行った。その結果、保護者の発達障害に対する認知度が 95.5%、発達障害に対する正答率も 90%を超える項目がある等、正しい理解が進んでいることが示された。発達障害がある児童とのかかわりの有無による差は、正答率に大きな差は見られなかったが、意識の「理解と交流への意欲」「社会の役割」については、かかわりがある群の方が高く、発達障害がある児童のよりよい支援環境を構築するには、保護者も含めた子ども同士の相互交流の機会を増やすことが必要であることが示唆された。研究 3 では、発達障害がある児童の支援に関わってきた心理専門職を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、3 つの側面が見出された。1 つ目の「通常学級と支援学級での支援の違い」では、それぞれの学級の特徴を生かし相補的に機能させる支援を実施することが、より効果的な査定や支援につながるということがわかった。2 つ目の「支援を行う上での課題」では、児童だけではなく保護者、教師ひとり一人を理解して、適切な支援を提供することの重要性が示唆された。3 つ目の「保護者の発達障害への理解、および、地域での支援の可能性」では、発達障害という言葉が広く知られるようになり、過剰に心配する保護者が増えた可能性が示され、発達支援を行う施設数は増加傾向にあるが、保護者との情報共有や連携についてはまだ課題があることがわかった。今後は、発達障害に関する情報提供や相互交流の機会を設け、さらにその機会がどのような効果をもたらすのかを詳細に検証し、よりよい支援環境の構築のために何が必要かを検討する必要がある。

自己対象反応の発達的理解

8C23105（著者の希望により氏名不掲載）

（指導教員 小山 正）

著者の希望により要旨不掲載

トラウマインフォームド・ケアに関する文献研究

8C23106 北川 眞羽

(指導教員 土井 晶子)

近年、日本において児童虐待が深刻な社会問題となっており、児童虐待の原因やその影響に対する理解が求められている。虐待の種類には身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待があり、虐待は単に身体的な危害だけでなく、精神的な苦痛や育児放棄も含まれる。虐待の原因について、こども家庭庁（2024）は、「保護者側」「子ども側」「養育環境のリスク要因」を挙げている。虐待が引き起こす心理的反応には、感情・思考の変化、身体的症状、行動の変化などがある。トラウマ体験後、子どもは過度の緊張を感じて夜に眠れなかったり、筋肉の震え、腹痛などの身体的症状が現れたりすることがある。また、感情が麻痺し、過度の無力感や強い罪悪感を抱く等の心理的な症状も現れることがある（文部科学省, 2003）。

虐待を受けた子どもは、心理的なトラウマを抱えることが多い。トラウマとは、生命や存在に強い衝撃を与える出来事である。トラウマの心理治療を効果的に進めるための基盤を作る方法として、トラウマインフォームド・ケア（TIC）が挙げられる。TIC は、トラウマを受けた個人に対して、治療や回復支援を行う際に、組織全体がその影響を理解し、対応する方法である。米国薬物乱用精神保健管理局（SAMHSA）によれば、TIC は「4 つの R」という基本的な前提条件に基づいて進められ、これに加え、6 つの原則を遵守する必要がある。

日本の TIC の実践例として、行政の取り組みとしては、大阪府中央子ども家庭センターや岡山県子どもの心の診療ネットワーク事業が挙げられる。民間団体では、例えば、一般社団法人 TICC で、トラウマを理解し、対応するための TIC サポーターやコーディネーターの養成が行われている。また、精神科医療や更生施設でも TIC の実践が行われている。

TIC は、トラウマの再発防止に有効だけでなく、専門的治療に先立つ支援法であると考えられる。また、子どもが自分のトラウマを理解できるようにすることで、子ども自身が自分を大切にする姿勢を養う心理教育的な役割もあると考えられる。TIC 導入施設が増加しているが、一般層への浸透はまだまだ進んでいない。今後は、TIC の基本的な部分を理解した教員等が、子どもを専門機関に繋げる支援が求められる。

職場における心理的安全性とストレスおよびパワーハラスメントとの関連

8C23107 北村 温香

(指導教員 土井 晶子)

本研究では、パワハラが発生を予防するため、パワハラ発生に関する要因を検討すること目的とした。第一研究では、パワハラをめぐる概念やキーワードについて、文献研究により整理を行った。パワハラとストレス反応には関連があること、また、パワハラが発生を防止するためには、心理的安全性が重要であることがわかった。

第二研究では、第一研究に基づき、職場における心理的安全性とストレスおよびパワハラの関連について、心理的安全性が高いとパワハラ認識性が高く・パワハラ体験が低くなり、心理的安全性が高いとストレスが低いという仮説を検証するために、労働者を対象に質問紙調査をオンラインで行った。研究協力者は、楽天インサイトに登録している正規被雇用者・会社経営者・役員・公務員・団体職員で、調査への同意を得られた男女 200 名であった(男性 158 名, 女性 42 名, 平均年齢 46.19 歳, $SD = 8.57$)。その結果、仮説の一部は支持されたが、心理的安全性が高いとパワハラ認識性が高いという仮説は支持されなかった。

心理的安全性が高いほどストレスが低いのは、心理的安全性が高いと自身の意見を抑圧したり、過剰に周囲に迎合したりせずに済むため、ストレスが少なくなるからだと推察される。次に、心理的安全性リーダーセクション得点が高い人ほど、パワハラ認識性(状態)をパワハラであると有意に認識していないとの結果が得られた。チームのリーダー(または上司)についての心理的安全性が高い場合、一般的にパワハラであると認識されるような内容であっても、上司や上位者に対して肯定的に考えるのではないだろうか。また、パワハラ認識性(状態)項目をパワハラだと認識している人ほど、有意にストレス A 領域の得点が高いことが示された。上位者との関係に難しさを抱えており、ストレス A 領域得点が高いものほど、パワハラ認識性(状態)項目をパワハラであると認識しやすいのではないかと推測される。さらに、心理的安全性高群は、心理的安全性低群よりも有意にパワハラ認識性(態度)に該当する項目をパワハラではないと認識していた。心理的安全性が高いことで、パワハラ認識性(態度)に該当する言動を上位者が行っても、自由に意見できるため、問題化に至らないのではないかと推測される。加えて、心理的安全性高群は、心理的安全性低群よりも有意にパワハラ認識性(態度)に該当する項目をパワハラでないと認識していた。研究協力者は、製造業従事者が最も多く、新規開発にあたり様々な意見を取り入れる必要があるため、「自分とは異なる意見や訴えに耳を貸さない」等の項目をポジティブに捉えたのではないかと推測される。

高齢犯罪者への心理支援 ——主に高齢初犯者に焦点をあてて——

8C23108 白波瀬 加菜

(指導教員 清水 寛之)

本研究は、65 歳以上で犯罪に至った者（以下、高齢犯罪者という）を対象に、文献調査と面接調査を用いて、心理専門職に求められる高齢犯罪者への支援の方法を検討することを目的とした。

文献調査から、高齢者の刑法犯検挙人員は、緩やかに減少傾向にあるが、総数に占める高齢者の割合は年々増加していることが明らかになった。高齢犯罪者は、「万引き」「窃盗」の罪名の割合が半数以上を占めており、それらが高齢犯罪者の増加の主要因であることが示唆されている。これまで、高齢者犯罪の犯行動機として、高齢者特有の性格特性や背景があることが指摘されている。また、認知機能の変化と犯行動との関係について、加齢や認知症による抑制機能、実行機能、意思決定能力、道徳判断の低下が犯行動と関連することが指摘されている。高齢犯罪者に対する社会復帰支援では、現在、司法手続きの早い段階で生活環境調整を行うことができる仕組みができているものの、そうした支援を受けられる者は限られている。

面接調査は、実際に高齢初犯者と関わった経験のある 3 名の専門家に半構造化面接で行った。高齢初犯者の犯罪に至る要因として、経済的な問題、社会的な孤立と孤独の問題、認知機能の低下の問題が挙げられた。また、高齢初犯者の性格特性として、「頑固であり人の話を聞かない。」という特徴があることが示唆された。社会復帰に向けては、①高齢者本人、②受け入れ先側、③制度の 3 点が重要であることが明らかとなった。また、受刑者自身が社会的な役割があると思え、受刑者自身が望んだタイミングで支援を受けられるような制度や関係機関との連携が必要であると語られた。

以上のことから、高齢受刑者に対する支援としては、①出所後の環境調整の支援だけでなく、心理専門職とともに自身の人生を振り返り、今後の生活に関して考える時間を設けること、②受刑には至らなかったが、犯罪を行った高齢者に対する支援としては、犯罪の背景要因を十分に精査して、適切な治療や矯正教育、生活環境調整に繋げること、③高齢者全体に対しては、高齢犯罪者の一般的傾向として、自ら相談することが難しいことから、警察が行う巡回連絡と福祉や心理の専門家が連携することで、要支援者に支援者側から歩み寄るような仕組みを設けることの 3 点が必要であるとまとめた。

通級指導教員の援助行動を行う上での認知・行動プロセス

8C23109 關川 ひより

(指導教員 竹田 剛)

近年、発達障がいを持つ児童生徒も特別支援の対象になったことにより、特別支援のニーズが増加している。そのような状況の中、発達障がいのある児童生徒を受け入れている通級指導の利用者が増加傾向にある。文部科学省(2021)では、通級指導とは、一部の時間で特別な支援を行うことにより、障がいによる学習・生活面での困難を改善し、克服することが目的であるとされている。本研究では、通級指導教員の援助行動を行う上での認知・行動プロセスについて明らかにすることを目的とした。教員の「価値観」＝「認知」から援助行動が生じているという筆者の考えのもと、支援内容と教員の認知、援助行動を切り離して捉えるのではなく、一連のプロセスとして研究し、包括的に通級指導に従事する教員、通級指導教室の意義について考えることが重要であると考えたからである。また、この研究によって、「通級指導」への周知・理解を促すことで、通級指導教員の支援のしやすさや通級指導教員の養成や経験の浅い教員への道筋ともなわれる。本研究では、通級指導教室で支援に従事している教員、もしくは過去に従事していた教員5名を対象に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析を行った。各調査対象者のインタビューは、平均 69 分±12.4 分で実施され、平均 21,122 文字±3,727.5 文字であった。分析の結果、大カテゴリが 6 個、カテゴリが 24 個に分類され、それをもとにプロセス図が作成された。研究の結果、通級指導教員は、通級指導に従事したいと思うきっかけがあり、1対1での支援が必要であると強く感じていた。通級指導に従事することになると、児童生徒の特性を理解することに努め、児童生徒一人一人に適した支援内容を生み出すことに尽力していた。そこには、支援を困難にさせる課題を抱えながらも支援実現に向けて努力する教員の姿が読み取れた。支援を模索することで、児童生徒の成長を感じ、通級は「生きていく力を身に付ける」場であると考えようになっていた。また、支援が上手く行く経験を積み重ねることで、「生きていく力を身に付ける」という考えが正しいことを再確認し、次の支援に生かしていた。このようなプロセスを何度も経験することで、教員の共通認識・価値観が構築されていることが明らかとなった。一方、支援への自由度が高いことから、通級指導教員の負担や責任はかなり大きいものであると推測された。実際、児童生徒の教科指導や自立活動だけではなく、卒業後の進路先や福祉施設への連携先、児童生徒が在籍する学校への理解促進などを一人の担当教員が行っていた。そのため、担当教員ではなくてもできることを周りがサポートすることで、教員の負担を減らし、より良い支援の提供が行えるだろう。

大学生の被服行動への関心と他者評価不安との関連

8C23110 谷口 元直

(指導教員 村井 佳比子)

我々の日々の生活では、他者からの視線や評価を意識しながら自己を表現する行動が日常的に行われている。このような自己表現の 1 つの手段として、被服行動がある。被服行動は古代において身を守る手段であったが、現在では服装や化粧、ヘアスタイル、ネイルなどを通じた多様な自己表現の手段として発展している。一方で、他者とは違う自分らしさの表現への欲求と、仲間外れを避けるための同調欲求との間で葛藤が生じる場合がある。最近では、被服行動の心理的効果としてストレス緩和効果やメンタルヘルスの向上効果があることが指摘されており、被服行動に関心がある場合、自分らしさを大事にできるのではないかと考えられる。本研究では、大学生の被服行動への関心と他者からの評価に対する不安との関連を明らかにし、被服行動を通じた対人不安を抱える人への心理的支援の可能性を探ることを目的とした。仮説は「被服行動への関心が高いほど、他者からの評価に対する不安が低い」であった。調査 1 では、被服行動への関心を測定する尺度を作成し、「好みの追求」「スタイリングへの関心」「新たな発見への熱意」「体験の多様性」という 4 つの因子を抽出した。調査 2 では、被服行動への関心尺度を基に、被服行動尺度、FNE 短縮版尺度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を用いて大学生を対象に調査を行い、他者からの評価に対する不安との関連を性別ごとに分析した。結果として、女性は男性に比べて被服行動への関心が高く、特に「適切性」との関連が強いこと、また、被服行動への関心と他者からの評価に対する不安については、女性のみ関連が認められ、体験の多様性が高い場合に他者からの不安が低くなることが示唆された。一方、スタイリングに対する関心の高さと、拒否回避欲求の高さが関連していることが認められた。このことから、仮説は一部支持されたものの、検討の余地があることが分かった。さらに、男性の場合、「流行性」を追求する際に「適切性」「機能性」を伴うことに対し、女性は「流行性」に「適切性」が伴っていても「機能性」が伴っておらず、「体験の多様性」因子が独立していた。このことから、女性は機能性を犠牲にして流行性を追求する傾向があること、流行性に偏りすぎると他者評価不安が高くなり、精神健康に影響する可能性があることが示唆された。健康的な被服行動は、積極的な自己表現を楽しむとともに、自分自身が心地よいかどうかを大切にすることが重要であるといえる。

中学生の「居場所」と学校適応との関連

——第3の居場所の視点から——

8C23111 西川 秀聡

(指導教員 村井 佳比子)

現在、不登校児童生徒数は増加傾向にあり、この問題は看過できないものとなっている。これについて、児童生徒の家庭や学校、友人関係における「居場所」の重要性が指摘されている。一方、近年では子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しており、インターネット環境や地域クラブでの活動など、「第3の居場所」の存在が指摘されている。そこで、本研究では複雑な不登校要因を擁する中学生を対象として、家庭や学校に加えて、それらとは異なる「第3の居場所」と学校適応との関連を検討することを目的とした。調査1では、現在の中学生の居場所について自由記述による実態調査を行った。その結果、家庭や学校・友人の回答が多かったものの、それらに分類できない回答がみられ、第3の居場所と学校適応との関連を検討する必要性が示唆された。調査2では第3の居場所と学校適応との関連を検討するために新たに「中学生の居場所尺度」の作成を行った。調査1の自由記述から得られた19項目について、因子分析を行ったところ、3因子が抽出され、それぞれ「学校および学校内の友人」「家庭」「第3の居場所」と命名された。併存的妥当性の検討のために2つの既存の居場所と関連した尺度との相関分析を実施した。その結果、「第3の居場所」は「学校および学校内の友人」と類似した機能を持つ一方、「安心感」の要素を持つ「学校および学校内の友人」「家庭」とは異なる場であることが示唆された。調査3では、調査2で作成した「中学生の居場所尺度」と学校適応感との関連を検討するために質問紙調査を実施した。中学生の居場所と学校適応感との関連を検討するために、中学生の居場所尺度の3因子を説明変数、学校への適応感尺度の4因子を目的変数とした重回帰分析を実施したところ、「学校および学校内の友人」「家庭」の得点の高さが学校適応感の高さを有意に予測していたのに対し、「第3の居場所」は学校への適応感との関連がみられなかった。そのため、「第3の居場所」因子の各項目と学校への適応感尺度との相関分析を実施したところ、同年代の友人との交流が想定される場が関連を示す傾向がみられた。この結果は中学生における友人関係の重要性を示唆しているといえ、居場所と学校適応との関連を見るうえでは、学校内・外で友人関係を分けるのではなく、連続体として柔軟に捉え、子どもたちの交友関係に広がりを持たせるような働きかけが必要であるといえる。

幼少期から大学生の読書経験が自己理解・他者理解に及ぼす影響

8C23112 福田 梅花

(指導教員 竹田 剛)

読書における先行研究では、読書によって生じる体験に 4 つの感情が含まれる自己変容感情仮説が提唱されている。これらの明らかとなっている感情を土台とし、読書体験によって自己理解や他者理解が向上すると考えられる。そこで本研究では、読書体験から自己理解や他者理解が深まる過程において、本を読む頻度や意識、年齢などとの関連について検討した。本研究の目的は、幼少期から大学生までの経時的読書経験が自己理解・他者理解に及ぼす影響について調査することであった。研究 1 では質問紙調査を実施し、読書経験として「幼少期の被読み聞かせ経験」と「小・中・高・大学生」に分けて読書活動を振り返ることで回答を求めた。自己理解・他者理解と関連が見られたのは周囲と比べてより多くの本を読んでいたと思うかという『主観的読書経験』に関するものであった。パス解析の結果、『幼少期の主観的被読み聞かせ経験』は自己理解に ($\beta=.18$)、『高校生時の主観的読書経験』は自己理解に ($\beta=.23$)、『大学生時の主観的読書経験』は自己理解に ($\beta=.15$) と、いずれも有意な正の影響を与えていた。そして、自己理解は他者理解に ($\beta=.43$) と有意な正の影響を与えていた。得られた結果から考察すると『幼少期の主観的被読み聞かせ経験』が自己理解の土台を作り、高校生や大学生の時期には、登場人物と自己との比較を行い、モラトリウムの中で多元的なアイデンティティとの向き合いが行われることから自己理解が深まると考えられる。研究 1 を踏まえ、自己との向き合いであった読書体験がどのような過程を辿り、他者理解へと繋がるかについて検討するため、研究 2 のインタビュー調査を実施した。5 名に半構造化面接を実施し、分析は M-GTA を採用した。その結果、読書経験から自己理解が深まるには、〈1：ストーリーや登場人物への心的イメージ〉、〈2：思考の現実化〉のプロセスを辿り、自己理解から他者理解へと進むには〈3：新しい価値観の受容〉が行われ、〈4：他者への結びつけ〉は自己理解・他者理解の双方に影響を及ぼす中核的な役割があることが明らかとなった。総合考察として、本研究で自己変容感情仮説の 4 つの感情の体験を土台とし、連続性をもった自己理解・他者理解の深まりに影響を及ぼし、発達段階ごとの課題の乗り越えに手がかりを与えることでアイデンティティの確立の一端を担う可能性が示唆された。さらに、他者理解が深まるまでのプロセスが明示化されたことは、読書が他者とのコミュニケーションにおける視野の広がりを獲得させたり、他者の立場に立って物事を考えたりできるようになるといった多角的な視野を獲得させる有用性を示したと言える。

自尊感情の程度と対人ストレスコーピングとの関連

——コロナ禍の影響を考慮して——

8C23113 堀口 晃太郎

(指導教員 竹田 剛)

本研究の目的は、コロナ禍においてゼロから人間関係を築くことを余儀なくされた群(大学4年次生)と、コロナ禍終息後に人間関係を築く機会を持てた群(大学1年次生)との間で自尊感情と対人ストレスコーピングとの関連性に違いがあるのかを検討することである。堀口(2023)の研究より、4年次生の自尊感情が高い人は解決先送りコーピングを多く取るのではないかと考える。また、その結果はコロナ禍特有の対人関係があったからではないかと考える(仮説1)。一方、1年次生はコロナ以前の対人関係等を取り戻そうと積極的な対人関係を築こうとするのではないかと考える(仮説2)。仮説立証のため、4年次生65名と1年次生86名を対象に自尊感情尺度、対人ストレスコーピング尺度、青年期用対象関係尺度を用いたWEB調査を行った。

分析の結果、ポジティブ関係コーピングについて、自尊感情の程度の主効果に有意差がみられ、学年の主効果に有意傾向がみられた。また、解決先送りコーピングの条件で、自尊感情高群の方が自尊感情低群よりも平均得点が有意に高かったが、学年の主効果および交互作用はみられなかった。仮説1をより詳しく検討するため、対人関係尺度について分析すると、認知的側面において4年次生と1年次生には質的な違いがあることが示唆された。これらの結果より、仮説1については、自尊感情が高い人ほど解決先送りコーピングを用いるということが言えるが、それはコロナ禍に対人関係を形成した群特有のものとはいえないという結果であった。しかし、4年次生においてのみ自尊感情高群で解決先送りコーピングに関する自由記述回答をした人数が多い傾向にあった。このことから、「コロナ禍特有の環境が実質的な中身を伴う対人交流が少ない中での対人関係であったからこそ、対人関係が希薄になることを避け、解決先送りをすることが多くなった」点は、自尊感情高群においてのみで行動面にあらわれている可能性があると考えられる。コロナ禍においてコミュニケーションに齟齬が生じることが少なくなかったと考えられ、そうした対人ストレスを抱えた中でも解決先送りする(何もしない)ことを選択できるということがコロナ禍における自尊感情高群特有の自律的判断であるということが示唆された。仮説2については、コロナ以前の対人関係の形成が可能になったため、そうした対人関係等を取り戻そうと積極的な関わりを求めた結果なのではないかと考える。

産業・労働分野における遠隔心理支援の実際と今後の展望

8C23114 本田 千陽

(指導教員 土井 晶子)

本論文では、労働者のメンタルヘルス対策として、近年注目されている遠隔心理支援に着目し、遠隔心理支援のこれまでと現在の利用状況を整理した上で、今後の展望について検討し、労働者への心理支援としての遠隔心理支援の活用について考察を行った。遠隔心理支援には、電話相談、メール相談、ビデオ通話相談、SNS 相談など、さまざまな相談形態が存在する。それぞれに特徴は異なり、メリット・デメリットがある。まず全体として、時間や場所の制約が少ないため、時間に余裕がない時にも気軽に利用できる点がメリットとして挙げられる。また匿名性の高さから、対面での相談に抵抗がある人が安心して相談できるという利点もある。一方、デメリットとしては、非言語的な情報が伝わりにくいため、相談者の状態の正確な把握が難しいという点が挙げられる。さらに、対面相談とは異なり、危機介入が必要な場面での即時介入ができないという点も懸念される。労働者のメンタルヘルス対策に関しては、遠隔心理支援は一定の利便性があり、特に二次予防における早期発見・早期対応に有効であると考えられる。多くの労働者は、職場でのストレスを抱えながらも、“時間がない”、“勤務先に知られたくない”等の理由から専門機関への相談に対して消極的である。遠隔心理支援は、このような労働者にとっても気軽に相談できる機会を提供し、メンタルヘルス不調の悪化を防ぐことに貢献できるだろう。一方で、遠隔心理支援の活用にあたっては、いくつかの課題がある。まず、枠の設定の難しさである。メール相談や SNS 相談では、対面相談のように開始・終了時間を明確にしたり、守られた空間を保証したりすることが難しい。そのため、相談の質を担保するための工夫が必要である。また、対面相談へリファーしても、実際に対面相談につながったかどうかを確認することは難しい。遠隔心理支援と対面相談の相談員が互いに連携する必要があるだろう。遠隔心理支援は新型コロナウイルス感染症対策をきっかけに認知度が上がり、徐々に広まりつつある。しかし、非言語的な情報が得られない遠隔心理支援が、完全に対面相談の代替として機能することは難しいかもしれない。むしろ、対面相談の代用ではなく、対面相談へとつなぐための補完的な支援として導入することが望ましいのではないか。それぞれの相談形態のメリットとデメリットを理解し、相談者の状況に合わせて最適な支援を提供することが求められるだろう。

音楽聴取後の自己憐憫と悲しみ感情の関係について

8C23115 水谷 彰秀

(指導教員 長谷川 千洋)

人は人生において、大切な人や物を失ったり、目標が達成できなかった際に、悲しみ感情を経験することが知られている。また、失敗や喪失体験時には「自己憐憫」と呼ばれる認知や感情を抱くことが臨床事例や実証的研究から報告されている。一方、音楽聴取には失敗や喪失体験による悲しみ感情を緩和する効果があるが、自己憐憫が音楽で同様に影響を受けるかは不明である。本研究の目的は、失敗および喪失体験で生じる自己憐憫と悲しみ感情の関連を調べ、自己憐憫が音楽聴取によって変化するかを検討することである。

本研究では、関西圏の大学生および大学院生 62 名 ($M=21.85$, $SD=1.97$) を対象に、ポジティブ音楽聴取条件 (Po 条件)、ネガティブ音楽聴取条件 (Ne 条件)、中立音楽聴取条件 (Am 条件)、音楽聴取なし条件 (Co 条件) の 4 群にランダムに振り分けた。音楽刺激は先行研究から音楽 (12 曲) と作曲理由 (12 個) を用い、予備調査で審美性 (1:非常に醜い~5:非常に美しい) と感情価 (1:非常に悲しい~5:非常に喜ばしい) の 2 次元で評価し、10 曲を選定した。実験では、失敗および喪失体験を自由記述および口頭で想起させ、音楽聴取前に想起内容に類似するネガティブな作曲理由を選択させた。選択後、ランダムに割り振られた音楽を聴取させ、聴取後に悲しみ感情尺度及び自己憐憫尺度、聴取曲の既知度に関する質問に回答させた。なお、Co 条件では作曲理由の選択と音楽聴取、既知度に関する手続きは行わなかった。使用した悲しみ感情尺度および自己憐憫尺度では、悲しみ感情得点 (下位因子:抑うつ不安, 倦怠, 涙, 胸の痛み, 無力感) と自己憐憫得点 (下位因子:ある運命に対する悲観, 同情に対する不信感, 思いやり希求) を算出した。

その結果、自己憐憫と悲しみ感情の間には正の相関が認められた。下位因子間では、悲しみ感情尺度の「抑うつ不安」と自己憐憫尺度の「同情に対する不信感」および「思いやり希求」に正の相関が見られた。また、悲しみ感情尺度の「無力感」は、自己憐憫尺度の「ある運命に対する悲観」、「同情に対する不信感」、「思いやり希求」と正の相関を示した。さらに、音楽聴取条件間で自己憐憫得点には有意差が認められなかったが、悲しみ感情得点に関しては中立音楽聴取条件 (Am 条件) でのみ有意な差が確認された。これらの結果から、自己憐憫と悲しみ感情には部分的に関連が認められ、音楽聴取は悲しみ感情には影響を与える一方で、自己憐憫にはあまり効果を及ぼさない可能性が示唆された。

幼少期の親の養育態度、愛着形成および青年期の自尊感情との関連

8C23116 柳本 夏希

(指導教員 清水 寛之)

本研究の目的は、幼少期の親の養育態度における愛着形成と青年期の自尊感情との関連を明らかにすることである。幼少期の親の養育態度は愛着形成、自尊感情に影響を与えており、幼少期の親の養育態度が安定的であると認知している者ほど、愛着形成が安定し、現在の自尊感情が高いという仮説を立てた。この仮説を検証するために、個人の内的作業モデル（安定、アンビバレント、回避）を媒介変数と仮定し、幼少期の親の養育態度の認知が青年期における個人の自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行った。本研究では、自尊感情を測る「自尊感情尺度」、幼少期の愛着傾向を測る「内的作業モデル尺度」、幼少期の親の養育態度を測る「親子関係検査」を用い、約 120 名の大学生・大学院生を対象とした。

分析の結果、幼少期の親の養育態度について、母親の「不満」の平均値は、他の下位尺度得点の平均値と比べて、最も低いことが明らかとなった。さらに、父親の「溺愛」の平均値は、他の下位尺度得点の平均値と比べて、最も高いことが明らかとなった。

各尺度間の関連性の検討では、母親の「不満」と「厳格」は、「自尊感情」、「安定」、「アンビバレント」、「回避」の各尺度得点すべてに関わりがあることが示された。自尊感情の高低（高群、中群、低群）と内的作業モデルの各下位尺度得点を比較したところ、母親、父親ともに、自尊感情低群でのみ、「不満」の平均値が高いことが明らかとなった。また、自尊感情低群でのみ、父親の「非難」、「厳格」の平均値が高いことが明らかとなった。これらの結果から、主に自尊感情に関連しているものとして、自尊感情が低すぎる場合には、母親の「不満」、父親の「不満」、「非難」、「厳格」、内的作業モデル尺度の「回避」が示された。また、内的作業モデル尺度の「安定」の傾向が強いほど、自尊感情が高く、「アンビバレント」の傾向が強いほど、自尊感情が低くなることが示された。このことから、幼少期の親の養育態度は愛着形成、自尊感情に影響を与えており、幼少期の親の養育態度が安定的であると認知している者ほど、愛着形成が安定しており、現在の自尊感情が高いという仮説が支持された。

親の養育態度が内的作業モデルおよび自尊感情に与える影響の調査結果からは、母親の「不満」と父親の「非難」は子どもの愛着スタイルである「アンビバレント」を介して、自尊感情を下げることが推察された。

2024 年度 活動報告

(教育・研究・社会貢献・大学運営) (アルファベット順)

土井 晶子 (どい あきこ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・専門職心理実習Ⅰ (心理実習Ⅰ)
- ・心理学入門ゼミナール (心理学入門演習Ⅰ)
- ・心理学専門ゼミナールⅠ (心理学専門演習Ⅰ)
- ・心理学専門ゼミナールⅡ (心理学専門演習Ⅱ)

[大学院]

- ・心理実践実習Ⅰ
- ・心理実践実習Ⅱ
- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ
- ・心理実践実習B
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・心理学研究科大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・松島 由美子・村井 佳比子・土井 晶子 (2024). 中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響 産業ストレス研究, 31, 201-210.
- ・野崎 光紀・土井 晶子 (2024). 日常的フォーカシング態度と主張性および職場のメンタルヘルスとの関連 心理臨床学研究, 42, 121-130.

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

- ・(独)大阪産業保健総合支援センター 産業保健相談員

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本人間性心理学会 第15期役員選挙 選挙管理委員長
- ・Scientific Committee member for PCE2024
- ・『人間性心理学研究』論文査読
- ・『Person-Centered & Experiential Psychotherapies』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「フォーカシングから学ぶ悩み方・気持ちの切り替え方のコツ」(大阪産業保健総合支援センター主催 5月30日・6月10日・6月24日・7月18日 エルおおさかにて)
- ・「フォーカシングで体験する「心のお手入れ」」(大阪産業保健総合支援センター主催 8月27日 エルおおさかにて)
- ・「毎日できるセルフケア:心の健康を守る方法」(大阪産業保健総合支援センター主催 9月12日・10月10日・12月3日 エルおおさかにて)
- ・「健康経営のためのポジティブメンタルヘルス」(兵庫県社会保険労務士西宮支部 令和6年度第3回研修会 10月22日 西宮商工会議所にて)
- ・「ポジティブ心理学入門:幸福感を高める方法」(保健師連絡協議会11月度研修 11月14日 アットビジネスセンター梅田にて)
- ・「ストレスに強くなる:悩み方・気持ちの切り替え方のコツ」(丹波篠山市商工会主催 11月18日 丹南商工会館にて)
- ・「自分にぴったりのリフレッシュ法を見つけよう:フォーカシングで聞くからだの声」(大阪府社会保険協会研修会主催 令和6年度第4回健康講習会 11月25日 大阪府社会福祉会館にて)
- ・「Social-Oriented Focusing Workshop (講師:Yehudit

First)」通訳（インタラクティブ・フォーカシング（IF）ティーチャーの会主催 12 月 11 日 オンライン）

- ・「対人援助職のメンタルケアとサポート」（大阪府人権協会主催「2024 年度おおさか相談フォーラム」基調講演 2 月 HRC ビルにて）
- ・「日常に活かすフォーカシング：～自分をいたわり、元気を見つける心のお手入れ～」(日本フォーカシング協会主催「フォーカサーの集い」公開ワークショップ 2 月 15 日 和洋女子大学にて)
- ・「フォーカシングと特別支援（講師：Laura Bavalics）」通訳（こどもとフォーカシング研究会主催 3 月 20 日 オンライン）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

- ・男女共同参画運営委員
- ・学長選出管理委員会 副委員長
- ・心理臨床カウンセリングセンター長

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・学部・研究科実習運営委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

なし

道城 裕貴（どうじょう ゆき）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・教育・学校心理学Ⅱ（教育）（教育心理学（教育・学校心理学））
- ・心理学入門実習Ⅲ
- ・心理演習Ⅰ（専門職演習）（専門職心理演習Ⅰ（心理演習））
- ・心理演習Ⅱ（専門職演習）（専門職心理演習Ⅱ（心理演習））
- ・心理学専門ゼミナールⅠ（心理学専門演習Ⅰ）

- ・心理学専門ゼミナールⅡ（心理学専門演習Ⅱ）
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文
- ・教育心理学（資格）
- ・教育実習事前・事後指導（資格）

【大学院】

- ・教育分野に関する理論と支援の展開
- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理学特別演習Ⅰ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・道城 裕貴・清水 寛之・村井 佳比子・難波 愛・中村 敏 (2024). 大学における地域子育て支援拠点事業の特色——ステークホルダーに対する面接調査より—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 13-25.
- ・川島 梨瑛・土井 晶子・道城 裕貴 (2024). 明石市「5 歳児発達支援事業」との連携報告 教育開発ジャーナル, 15, 43-48.
- ・村井 佳比子・道城 裕貴・清水 寛之 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育へのイメージと期待——モンテッソーリ教育に関する知識と経験の影響—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 1-12.
- ・難波 愛・岡野 太郎・道城 裕貴・清水 寛之 (2024). 大学が主催する地域子育て支援拠点の利用ニーズに関する研究——神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」利用者への面接調査を手がかりに—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 47-58.

3. 学会・研究会発表

- ・道城 裕貴・村井 佳比子・清水 寛之 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ (2) ——モンテッソーリ教育に関する内容説明の前後における意識変化—— 教育心理学会第 66 回大会 (9 月 15 日 アクトシティ浜松にて)
- ・清水 寛之・村井 佳比子・道城 裕貴 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ (1) ——モンテッソーリ教育に関する内容説明の前後における意識変化—— 教育心理学会第 66 回大会 (9 月 15 日 アクトシティ浜松にて)

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・神戸市校区調整審議会委員
- ・神戸市教育委員会 巡回相談員
- ・明石市教育委員会 巡回指導員
- ・神戸市すこやか保育支援事業巡回指導アドバイザー

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「発達障害がある子供の多面的・多角的アセスメント～支援を在籍校園へつなぐために～」(神戸市教育委員会主催 5月14日 神戸市総合教育センターにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「この人に会いたい」(防災情報誌『いっせーのせ』2月)

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

- ・教務委員
- ・研究科自己点検評価委員
- ・教職教育センター委員
- ・教職課程小委員会委員
- ・カリキュラム・アセスメント担当委員
- ・障がい学生支援体制推進プロジェクトチーム委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

なし

長谷川 千洋 (はせがわ ちひろ)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・心理学概論
- ・神経・生理心理学Ⅱ(神経)(神経心理学(神経・生理心理学))
- ・心理学入門ゼミナール(心理学入門演習Ⅰ)
- ・心理学基礎ゼミナール(心理学基礎演習Ⅰ)
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文

[大学院]

- ・心理実践実習C
- ・心理実践実習D
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・大学院進学希望者のための英語論文講読会

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・水谷 彰秀・長谷川 千洋(2024). 自身を憐れむ心理——自己憐憫の臨床心理学的知見と展望—— 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要, 18, 25-30.

3. 学会・研究会発表

- ・長谷川 千洋(座長) 外傷・加齢・その他(O2B-3) 第48回日本神経心理学会学術集会(9月6日 京都府立都学歴彩館/稲盛記念会館にて)
- ・水谷 彰秀・大久保 大和・井上 真帆・長谷川 千洋(2024). 失敗体験及び喪失体験に伴う自己憐憫と音楽聴取の関係について 関西心理学会第135回大会(11月3日 大阪人間科学大学にて)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本神経心理学会 評議員
- ・日本高次脳機能学会 代議員
- ・臨床神経心理士資格認定・カリキュラム委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「第 3 回日本認知心理学会神経心理学部会研究会—神経心理学と認知心理学における記憶研究の今—」開催（日本認知心理学会神経心理学部会研究会主催 8 月 24 日 神戸学院大学三宮サテライトにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など なし

4. その他

- ・国立病院機構大阪刀根山医療センター 心理療法士

【大学運営】

1. 学内委員

- ・学部長
- ・評議員
- ・大学院委員
- ・自己点検評価委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員
- ・広報活動委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他 なし

- ・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
- ・専門職心理演習Ⅲ（心理演習）
- ・多職種連携実践 D

【大学院】

- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動 なし

3. 学外での教育活動 なし

【研究活動】

1. 著書 なし

2. 論文 なし

3. 学会・研究会発表 なし

4. その他 なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「高次脳機能障害について」（池田市医師会主催 10 月 24 日 池田市保健福祉総合センターにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など なし

4. その他 なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・環境保全委員会委員
- ・省エネルギー推進委員会委員
- ・研究支援委員会委員

博野 信次（ひろの のぶつぐ）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・人体の構造と機能（人体の構造と機能及び疾病）
- ・神経・生理心理学Ⅰ（生理）（生理心理学（神経・生理心理学））
- ・行動神経学
- ・高齢者心理学
- ・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ）
- ・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ）
- ・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員長
- ・教育研究委員会委員

3. その他

なし

広沢 俊宗（ひろさわ としむね）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・消費者心理学
- ・心理学概論（資格）
- ・心理学入門ゼミナール / 心理学入門演習
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文
- ・社会の中の心理学Ⅰ
- ・社会の中の心理学Ⅱ（心理学入門演習Ⅱ）
- ・社会の中の心理学Ⅲ
- ・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）
- ・社会の中の心理学Ⅴ
- ・キャリア・インターンシップ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・関西国際大学経営学部 非常勤講師（「産業心理学」他）
- ・京都先端科学大学人文学部 非常勤講師（「感情・人格心理学」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・模擬授業「人はなぜ他者に心惹かれるか—対人魅力の心理学—」（9月24日 兵庫県立柏原高等学校にて）
- ・大学見学会 模擬授業「心理学—さまざまな研究領域とその研究方法—」（10月10日 島根県立平田高校、有瀬キャンパスにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・課題研究「メンズメイクの偏見や平等」に対するズームインタビュー対応（10月3日 神戸商業高等学校）
- ・『神戸学院大学心理学研究』査読

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

石崎 淳一（いしざき じゅんいち）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・公認心理師の職責（心理専門職入門（公認心理師の職責））
- ・心理学入門実習 A（心理学入門実習Ⅰ）
- ・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
- ・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
- ・心理学専門ゼミナールⅠ（心理学専門演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅡ（心理学専門演習Ⅱ）

- ・多職種連携実践 C

【大学院】

- ・心理実践実習 I
- ・心理実践実習 II
- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理実践実習 C
- ・心理学演習 I
- ・心理学演習 II

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・神戸学院大学美術部鷗風會・顧問
- ・人間文化学研究科心理学専攻臨床心理学系及び心理学研究科修士（公認心理師等）のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・川上 綾音・石崎 淳一 (2025). 日本における Highly Sensitive Person (HSP) の心理学的研究の動向——「美的感受性」因子に着目した文献的検討—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 81-90.

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・『心理臨床学研究』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「コミュニケーション演習」(神戸市シルバーカレッジ 健康福祉/ライフ 講師 9月9日 シルバーカレッジにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・明石市教育委員会（2022 年度）明石市特別支援教育巡回指導員
- ・『アートによる表現活動を支援する—あとりえ・クルレの実践から』配布
- ・山上 榮子, 陶山 和美, 北川 眞羽らとアートセラピー等に関する研究会を実施した。

【大学運営】

1. 学内委員

- ・心理学研究科長
- ・評議員
- ・総合企画会議委員
- ・危機管理委員
- ・男女共同参画推進委員
- ・公益通報処理委員
- ・個人情報保護委員
- ・防火防災対策委員
- ・賞罰委員
- ・国際化推進委員
- ・全学研究推進委員
- ・公正研究委員
- ・研究助成金審査委員
- ・全学教育推進機構会議委員
- ・大学院委員
- ・心理学部自己点検評価委員
- ・心理学研究科自己点検評価委員（座長）

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
- ・広報活動委員
- ・学部・研究科実習運営委員
- ・実習マニュアル委員

3. その他

なし

加藤 伸弥（かとう しんや）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理学的支援法 II
- ・心理学入門実習 C（心理学入門実習 IV）
- ・心理学入門実習 D（心理学入門実習 VI）
- ・心理学実験 II（実習）（心理学基礎実験実習 II（心理学実験））

- ・心理学専門実習Ⅱ
- ・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・東京家政大学心理学部 非常勤講師（「心理学実験Ⅱ」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・加藤 伸弥・泉 明宏 (2024). 事前登録研究：不公正者についての情報共有に及ぼすシャーデンフロイデの効果 パーソナリティ研究, 32, 128-130. <https://doi.org/10.2132/personality.32.3.4>
- ・加藤 伸弥・野田 昇太 (印刷中). アピアランス懸念の究極要因に関する一瞥 武蔵野大学認知行動療法研究誌.

3. 学会・研究会発表

- ・加藤 伸弥・泉 明宏 (2024). 利他主義の維持に及ぼすシャーデンフロイデの適応的機能 日本心理学会第 88 回大会（9 月 6 日 熊本城ホールにて）
- ・小林 真綾・西内 基紘・金子 響介・加藤 伸弥・野田 昇太 (2024). 日本語版 Appearance Anxiety Inventory (J-AAI) の信頼性と妥当性の検討——健常群における身体醜形症状—— 日本心理学会第 88 回大会（9 月 8 日 熊本城ホールにて）
- ・小林 真綾・西内 基紘・金子 響介・加藤 伸弥・野田 昇太 (2024). 日本語版 Appearance Anxiety Inventory (J-AAI) の信頼性と妥当性の検討——臨床群における身体醜形症状—— 日本認知・行動療法学会第 50 回大会（9 月 24 日 パシフィコ横浜にて）
- ・加藤 伸弥・泉 明宏 (2024). シャーデンフロイデが第三者罰期待を促す過程にある動機的要因——不公正者への嫌悪と被害者への共感的苦痛に着目して—— 日本パーソナリティ心理学会第 33 回大会（10 月 5 日 筑波大学にて）

4. その他

- ・加藤 伸弥 (2024). 書評（クリストファー ライアン・カシルダ ジェタ 山本 規雄（訳）(2024). 性の進化論——女性のオルガスムは、なぜ霊長類にだけ発達したか？ 作品社）日本パーソナリティ心理学会図書紹介 <https://jspp.gr.jp/book/87/>

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本パーソナリティ心理学会 広報委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「SNS の晒し行為… これは正義？ 許される境界線とは」(『ABEMA Prime』8 月 22 日)
- ・「他人の不幸を喜ぶ自分はダメなのか？ シャーデンフロイデとの向き合い方」(『毎日新聞医療プレミア』11 月 27 日)

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

河瀬 諭（かわせ さとし）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理学専門実習Ⅰ
- ・心理学専門実習Ⅱ
- ・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
- ・心理学専門ゼミナールⅠ（心理学専門演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅡ（心理学専門演習Ⅱ）
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文

【大学院】

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・相愛大学音楽学部 非常勤講師（「音楽心理学」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・河瀬 諭 (印刷中). 音楽と身体の動きの関係をめぐる研究動向 音楽教育学, 55.
- ・Kawase, S., Okano, M., Bechtold, T. & Senn, O. (in press). Japanese version of the Experience of Groove Questionnaire (EGQ-JA): Translation and Validation. *Music Perception*.
- ・Fukuie, T., Suwabe, K., Kawase, S., Inoue, K., Yamaguchi, A. & Soya, H. (in press). Effect of clapping movement with groove rhythm on executive function: Focusing on audiomotor entrainment. *The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness*.
- ・Kawase, S. (2024). Impact of the presence or absence of dancing in festivals on people's sense of community. *PsyArXiv*. <https://doi.org/10.31234/osf.io/an5hx>
- ・Kawase, S. (2024). Positive Moods before Listening to Music Enhance Groove. *PsyArXiv*. <https://doi.org/10.31234/osf.io/nqv3k>
- ・Jerjen, R., Bechtold, T., Hoesl, F., Etani, T., Kawase, S., Kilchenmann, L., Duman, D., & Senn, O. (2024). The Effect of Tempo Manipulation on the Urge to Move. *OSFPREPRINTS*. <https://doi.org/10.31219/osf.io/6vnuy>

3. 学会・研究会発表

- ・河瀬 諭 (2024). 音楽のヒットチャートによるなつかしさの生起 日本心理学会第 88 回大会（9 月 7 日 熊本城ホールにて）

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究（B）「音楽に同期した身体運動よる社会的な絆の形成プロセスの解明」（研究代表者：河瀬 諭, 2023 ～ 2025 年度）
- ・科学研究費補助金 挑戦的研究（萌芽）「音楽の一体感が生まれるメカニズム：グループ・フロー形成過程の解明」（研究代表者：河瀬 諭, 2024 ～ 2026 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本音楽知覚認知学会 編集委員
- ・電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会 専門委員
- ・21st Pacific Rim International Conference on Artificial Intelligence (PRICAI 2024) Program committee
- ・19th International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems (KICSS 2024) Program committee
- ・9th IEEE/ACIS International Conference on Big Data, Cloud Computing, and Data Science (BCD 2024-Summer) Program committee
- ・『International Journal of Clinical and Health Psychology』論文査読
- ・『Acta Psychologica』論文査読
- ・『Psychology of Music』論文査読
- ・『Plos One』論文査読
- ・『認知科学』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「音楽と身体の動きのむすびつきがもたらす効能—なぜ我々は踊るのか—」（神戸学院大学大学祭中央実行委員会主催 11 月 3 日 神戸学院大学有瀬キャンパスにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「科学的に正しい音楽の聴き方」（『女性セブン』 Vol.40 11 月 28 日号）
- ・「編集後記」（『音楽知覚認知研究』 Vol.29 No.1）
- ・「「アパトゥ」が耳からはなれない」（『朝日小学生新聞』 2 月 4 日）
- ・「大ヒット曲 APT. アパトゥが頭から離れないっ！」（『朝日中高生新聞』 2 月 9 日）

4. その他

- ・NHK 総合「あさイチ」
- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

- ・研究活動「科学研究費助成事業」 神戸学院大学総合案内

小久保 香江（こくぼ かえ）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・心理的アセスメントⅠ（心理検査法Ⅰ）
- ・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
- ・心理学入門実習Ⅴ（医療心理学入門実習）
- ・心理学基礎ゼミナール
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文
- ・専門職心理演習Ⅲ（心理演習）
- ・多職種連携実践 A

[大学院]

- ・心理的アセスメントに関する理論と実践
- ・心理実践実習 C
- ・心理実践実習 D
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・大学院入試対策勉強会の開催

3. 学外での教育活動

- ・森之宮病院 診療部 公認心理師

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・横山 未来・村井 佳比子・小久保 香江 (2024). 学生ボランティアの援助成果に関する研究——ボランティア活動経験の有無と活動の前後に着目して——. 神戸学院大学心理学研究, 7, 35-45.

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「社会の中の心理学」(1月10日 立命館大学茨木キャンパスにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

- ・広報委員
- ・入学センター委員
- ・教職課程小委員会委員

2. 学部内委員

- ・学部内自己点検評価委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
- ・実習運営委員会委員

3. その他

なし

小山 正（こやま ただし）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・言語心理学（学習・言語心理学）
- ・特別支援教育概論（発達障害学）
- ・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅠ
- ・心理学専門ゼミナールⅡ
- ・卒業論文
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ

[大学院]

- ・福祉分野に関する理論と展開
- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・甲南女子大学大学院人文科学総合研究科心理教育学専攻 非常勤講師（「言語発達心理学特論」）
- ・京都医健専門学校 言語聴覚士学科 非常勤講師（「言語発達障害Ⅳ」）

【研究活動】

1. 著書

- ・小山 正 (2024). 発達の理論——発達の多様性の理解と支援に向けて—— ナカニシヤ出版

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・小山 正 (2024). 知的発達症をもつ子どもの動作語獲得に見られるスピードアップと認知・遊びの発達との関連性 第 69 回日本音声言語医学会総会・学術講演会（10 月 17 日 学術総合センターにて）

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・臨床発達心理実践研究誌 編集委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・講演「3 歳—ことばの遅れと個人差」（虹を紡ぐ会 主催）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・入試総務委員
- ・自己点検評価委員
- ・法人設置学校連絡調整会議委員

- ・研究助成金審査委員会委員

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員

3. その他

なし

道重 さおり（みちしげ さおり）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・健康科学入門
- ・司法・犯罪心理学（司法犯罪心理学（司法・犯罪心理学））
- ・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
- ・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験））
- ・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
- ・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文
- ・社会の中の心理学Ⅴ
- ・キャリアインターンシップ

[大学院]

- ・司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・第 2 回 社会と矯正・更生をつなぐ心理学研究会 少年院の「今」を知る 加古川学園見学

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・越智 啓太・原田 知佳・道重 さおり・島田 貴仁・桐生 正幸 (2024). 特殊詐欺に対して心理学はなに

ができるのか 地域における犯罪予防と特殊詐欺
日本心理学会第 88 回大会 シンポジウム (9 月 6 日
熊本城ホールにて)

- ・真鍋 貴大・清水 翼・野口 剛・小林 佳世子・道重 さおり・本西 泰三・高野 洋一 (2024). 特殊詐欺の受け子・出し子に至る心理過程の分析 日本犯罪心理学会第 62 回大会 口頭発表 (9 月 14 日 福山大学にて)
- ・岡村 心平・石田 周良・道重 さおり (2024). 矯正教育における触法障害者に対するクラウニング講座の実践的研究①: ダイバーシティ社会において「道化師」を演じることの臨床的機能 日本犯罪心理学会第 62 回大会 口頭発表 (9 月 14 日 福山大学にて)
- ・石田 周良・岡村 心平・道重 さおり (2024). 矯正教育における触法障害者に対するクラウニング講座の実践的研究②: 事例検討による抵抗から受容の過程と効果的实践への探究 日本犯罪心理学会第 62 回大会 口頭発表 (9 月 15 日 福山大学にて)
- ・新田 千枝・斎藤 剛・望月 明美・道重 さおり (2024). 女性の健康とアルコール問題 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 シンポジウム (9 月 19 日 砂防会館シェーンバッハ・サボーにて)
- ・大宮 宗一郎・山口 玲子・新井 清美・菊地 創・山田 理絵・西村 美音・道重 さおり・森田 展彰 (2024). 精神保健福祉センターの薬物依存支援担当スタッフの更生保護施設に対する認識および連携に関する調査 2024 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 シンポジウム (9 月 21 日 砂防会館シェーンバッハ・サボーにて)

4. その他

- ・森田 展彰・道重 さおり・大宮 宗一郎・山田 理絵 (2024). 厚生労働省依存に関する調査研究事業 (令和 5 年度) における分担研究「更生保護施設における薬物依存症者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」令和 6 年度薬物依存者の回復支援における地域連携に関する意見交換会「薬物を一旦やめた後の、生きづらさや回復の支援」の実施 (10 月 18 日 筑波大学東京キャンパス文京校舎にて)
- ・森田 展彰・大宮 宗一郎・道重 さおり・山田 理絵 (2024). 厚生労働省依存に関する調査研究事業 (令和 5 年度) における分担研究「更生保護施設における薬物依存症者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」令和 6 年度薬物依存者の回復支援における地域連携に関する更生保護施設と精神保健福祉センターの相互研修会の実施 (12 月 20 日 オンライン)

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「特殊詐欺の背景にある心理的問題や特殊詐欺事犯への介入」講師 (兵庫県臨床心理士会司法・法務・警察領域委員会主催 第 1 回研修会 10 月 19 日 オンライン)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

神戸学院大学 BBS 顧問

三和 千徳 (みわ ちとく)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

- ・精神疾患とその治療
- ・専門職心理実習 I (心理実習)

[大学院]

- ・保健医療分野に関する理論と支援の展開
- ・心理実践実習 III
- ・心理実践実習 IV
- ・心理実践実習 D
- ・心理支援に関する理論と実践
- ・家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践

2. 大学内でのその他の教育活動

・心理学研究科大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・みわ心療クリニック 院長
- ・神戸精神分析研究所 監事
- ・NPO 法人コミュニティーカウンセリング協会 理事

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他

なし

毛 新華 (もう しんか)

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

なし (長期海外研究員のため)

[大学院]

なし (長期海外研究員のため)

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・Mao, X., Shimizu, H. & Kimura, M. (2024). What Confuses Japanese Expatriates in China? Poster presented at the 33rd International Congress of Psychology. (23rd July. Prague, Czech)
- ・Mao, X., Shimizu, H. & Kimura, M. (2024). What is necessary for Japanese expatriates to overcome their confusions in China? From a perspective of cultural adaptation. Poster presented at the 27th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology. (7th August. Bali, Indonesia)
- ・毛 新華 (2024). 日本心理学会大会企画シンポジウム (IS-008 一般公開): Researchers crossing countries. 企画代表者: 日本心理学会国際委員会 企画者: 毛 新華・山本 真也・家島 明彦・大塚 由美子・温 文 司会: 家島 明彦 話題提供者: Kong Garry・呉 長憶・笠原 伊織・Sharma Nachiketha 指定討論者: 大塚 由美子・温 文 日本心理学会第 88 回大会 (9 月 7 日 熊本城ホールにて)
- ・Mao, X. (2024). Cooperating on issues of mutual concern: Special focus on inequality and well-being, 2024 Japan-China-Korea Tri-National Psychology Symposium. Organizer: 2024 Japan-China-Korea Tri-National Psychology Symposium Committee, Ozaki, Y., Yotsumoto, Y., Shiotsuki, K., Park, J., Qian, K., Kubo, T. & Mao, X.; Speaker: Sasaki, Y., Li, L., Kim, H., Ohtaka, M., Kim, E. & Zhu, L. The 88th Annual Convention of the Japanese Psychological Association (IS-007) (6th

September. Kumamoto, Japan.)

- ・田 雨時・毛 新華・福澤 薫・池田 賢二・周 怡・幡生 あすか (2025) 日本における風邪や咳のセルフケアにおける一般用医薬品の使用——現状と影響要因—— 第35回日本疫学会学術総会 (2025年2月14日 高知市文化プラザかるぽーとにて)

4. その他

- ・毛 新華 (2024). 書評『現代中国の子育てと教育：発達心理学から見た課題と未来展望』（矢藤 優子・吉 沅洪・孫 怡編，ナカニシヤ出版，2023年）. 立命館アジア・日本研究学術年報, 5, 212-215.

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「中国の在留邦人の文化適応支援に関する心理学的研究（研究代表者：毛 新華，共同研究者：清水 寛之・木村 昌紀，2021～2024年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本心理学会 国際委員
- ・関西心理学会 常任委員
- ・「日中韓三カ国国際会議」2024年日本シンポジウム 日本側担当
- ・阪南大学留学生 OB・OG 会 会長

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・Social Psychology Seminar, Melbourne School of Psychological Sciences, The University of Melbourne “The Contributions of Indigenous Psychological Concepts to Social Skills Training(SST) and Cross-Cultural Training(CCT)” 講師 (2025年2月24日)
- ・中国・河南大学教育学部 Cross-Cultural and Education Lecture Series “The Contributions of Indigenous Psychological Concepts to Social Skills Training(SST) and Cross-Cultural Training(CCT)” 講師 (2025年3月23日 オンライン)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

村井 佳比子（むらい けいこ）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
- ・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
- ・心理演習Ⅰ（専門職演習）（専門職心理演習Ⅰ（心理演習））
- ・心理演習Ⅱ（専門職演習）（専門職心理演習Ⅱ（心理演習））
- ・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅠ
- ・心理学専門ゼミナールⅡ
- ・多職種連携実践B

【大学院】

- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

- ・村井 佳比子 (印刷中). 動機づけ面接の機能と作用機序 原井 宏明 (編) 動機づけ面接を始める・続ける・広げる 金剛出版

2. 論文

- ・松島 由美子・村井 佳比子・土井 晶子 (2024). 中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響 産業ストレス研究, 31, 201-210.
- ・村井 佳比子・道城 裕貴・清水 寛之 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ

——モンテッソーリ教育に関する知識と経験の影響—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 1-12.

- ・道城 裕貴・清水 寛之・村井 佳比子・難波 愛・中村 敏 (2024). 大学における地域子育て支援拠点事業の特色——神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」のステークホルダーに対する面接調査より—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 13-25.
- ・岡本 光里・村井 佳比子 (2024). 小学生の子どもを持つ保護者の発達障害に対する理解に関する研究 神戸学院大学心理学研究, 7, 27-33.
- ・横山 未来・村井 佳比子・小久保 香江 (2024). 学生ボランティアの援助成果に関する研究 神戸学院大学心理学研究, 7, 35-45.

3. 学会・研究会発表

- ・清水 寛之・村井 佳比子・道城 裕貴 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ 1 モンテッソーリ教育の認知度に関する全国 Web 調査より 日本教育心理学会第 66 回総会 (9 月 15 日 アクトシティ浜松 コンgressセンターにて)
- ・道城 裕貴・村井 佳比子・清水 寛之 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ 2 モンテッソーリ教育に関する内容説明の前後における意識変化 日本教育心理学会 66 回総会 (9 月 15 日 アクトシティ浜松コンgressセンターにて)
- ・武藤 崇・丹治 敬之・井垣 竹晴・村井 佳比子・石塚 祐香 (2024). 学会企画シンポジウム：なぜ、いま「橋渡し研究」なのか——行動分析学の現状—— 日本行動分析学会第 42 回大会 (9 月 15 日 駒澤大学にて)
- ・小野 信嗣・河村 有紀・林 昌範・村井 佳比子 (2024). 自主シンポジウム：心理職の“出戻り”転職の意義 日本心理臨床学会第 43 回大会 (9 月 29 日 オンライン)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤 (C)「学級の心理的安全性を向上・維持させるための教員研修プログラムの開発」(研究代表者：杉本任士, 2024 年度～2029 年度)
- ・心理学部社会貢献・地域連携プロジェクト助成金「神戸学院大学『子育てサロン まなびー』の社会的・教育的意義に関する心理学的研究」(研究代表者：道城裕貴, 2024 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・一般社団法人日本行動分析学会 理事 (事務局長)
- ・一般社団法人日本動機づけ面接学会 理事
- ・一般社団法人日本動機づけ面接学会第 13 回大会 (3 月 29-30 日) 大会長

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・研修会「動機づけ面接—基礎から応用へ—」(大阪市こころの健康センター主催 12 月 25 日 大阪市こころの健康センターにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』査読

【大学運営】

1. 学内委員

- ・学部自己点検評価委員
- ・教務委員
- ・共通教育等運営委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
- ・子育てサロン運営
- ・学部・研究科実習運営委員

3. その他

なし

村田 佳代子 (むらた かよこ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理調査概論
- ・対人心理学
- ・現代社会と心理学
- ・こころの科学
- ・心理学専門実習Ⅰ
- ・心理学専門実習Ⅱ
- ・社会の中の心理学Ⅳ (心理学基礎演習Ⅱ)

- ・心理学入門演習 C（心理学入門実習Ⅳ）
- ・心理学入門演習 D（心理学入門実習Ⅵ）
- ・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
- ・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・昭和女子大学人間社会学部心理学学科 非常勤講師（「心理学実験」・「心理学入門基礎演習」）
- ・拓殖大学商学部 非常勤講師（「心理学 A/ 認識と行動のメカニズム」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・Komatsu, H., & Murata, K. (2024). Occluded motion trajectories before appearance and the disappearance. 46th European Conference on Visual Perception. (26th August. Aberdeen, Scotland)
- ・Murata, K., & Ichikawa, M. (2024). Influence of aging on vection. 46th European Conference on Visual Perception. (26th August. Aberdeen, Scotland)
- ・小松 英海・村田 佳代子 (2024). 運動対象の出現前と消失後の遮蔽された運動軌道の知覚 日本基礎心理学会第 43 回大会.
- ・真保 陸斗・村田 佳代子・山中 七菜子・白井 述 (2024). 乳児期のシーン整合性効果について 日本基礎心理学会第 43 回大会

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』査読

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

中川 裕美（なかがわ ひろみ）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理学的支援法Ⅰ
- ・心理演習Ⅱ（専門演習）
- ・心理学入門実習 C（心理学入門実習Ⅳ）

【大学院】

- ・心理学研究法Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 小規模法人の健康経営における阻害要因の解明および支援プログラムの開発 (研究代表者: 中川 裕美, 2023 ~ 2025 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】(※いずれも後期)

1. 学内委員

- ・学生委員会
- ・図書館運営委員会
- ・就職委員会
- ・学生の未来センター運営委員会
- ・情報支援センター運営委員会
- ・生涯学習委員会

2. 学部内委員

- ・卒論委員
- ・教育・研究委員会
- ・大学院奨学金返還免除選考委員会
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員

3. その他

なし

難波 愛 (なんば あい)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・心理検査法Ⅱ (心理的アセスメントⅡ (心理検査法Ⅱ))
- ・教育・学校心理学Ⅰ (学校心理学) (学校心理学 (教

育・学校心理学))

- ・心理学実験Ⅱ (実習) (心理学基礎実験実習Ⅱ (心理学実験))
- ・専門職心理演習Ⅰ (心理演習Ⅰ (専門職演習))
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文
- ・学校心理学 (資格)

【大学院】

- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理実践実習Ⅰ
- ・心理実践実習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・学部ゼミ生を対象とする大学院受験のための心理学勉強会

3. 学外での教育活動

- ・関西国際大学大学院生のスーパーバイザー
- ・臨床心理士／公認心理師のスーパーバイザー
- ・本学修了生 10 人との子ども心理臨床に関する継続勉強会 (オンライン 2 時間×7 回: 2024 年 5 月 11 日, 6 月 8 日, 7 月 13 日, 9 月 14 日, 10 月 12 日, 11 月 9 日, 2025 年 01 月 11 日, 2024 年 02 月 8 日, 対面 5 時間 1 回: 8 月 6 日)

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・難波 愛・岡野 太郎・道城 裕貴・清水 寛之 (2024). 大学が主催する地域子育て支援拠点の利用ニーズに関する研究——神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」利用者への面接調査を手がかりに——神戸学院大学心理学研究, 7, 47-58.
- ・道城 裕貴・清水 寛之・村井 佳比子・難波 愛・中村 敏 (2024). 大学における地域子育て支援拠点事業の特色——神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」のステークホルダーに対する面接調査より——神戸学院大学心理学研究, 7, 13-25.

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

- ・AJAJ (日本ユング派分析家協会) グループスーパーヴィジョンでのケース発表 (4 月 20 日・11 月 16

日 オンライン)

- ・AJAJ (日本ユング派分析家協会) 2024 年度春学期体験セミナー 301「『夢をシェアし、夢と共に生きる』～夢に対する扉と集合的なつながりへの理解の扉を開こう～」における事例発表 (5 月 28 日・10 月 22 日 オンライン)
- ・こども臨床まなびーの会夏期研修会 発表「ゼロから学ぶメンタライゼーション」(8 月 4 日 神戸学院大学サテライトキャンパスにて)
- ・国際箱庭療法学会 (ISST) 箱庭療法家のための国際資格取得への特別プログラム Dr. Goerge Rasche スーパーヴィジョングループにおける事例発表 (11 月 25 日 このはな児童学研究所にて)

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本遊戯療法学会評議員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「体験から学ぶ遊戯療法の基礎——プレイルームでの立ち居振る舞いと応答——」講師 (岡山県総合教育センター主催 5 月 14 日 岡山県総合教育センターにて)
- ・「金沢大学留学生対象ストレス・マネジメント——ストレスとの付き合い方——」講師 (金沢大学保健管理センター主催 6 月 18 日 金沢大学角間キャンパスにて)
- ・「いきいき職場サポーター研修」講師 (明石市総務局職員室主催 8 月 21 日・10 月 22 日 明石市市役所にて)
- ・「心がしんどい子どもと関わるために」講師 (あかしフリースペーストロッコ研修会 8 月 22 日 あかしフリースペーストロッコにて)
- ・「思春期に多い精神疾患とその対応——学校でできる支援とは——」講師 (兵庫県立錦城高等学校職員研修 8 月 31 日 兵庫県立錦城高等学校にて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「地震経験 留学生の心ケア 専門家交え 金大でワークショップ」(『中日新聞』石川版 6 月 19 日 Web 記事 <https://www.chunichi.co.jp/article/915199>)

4. その他

- ・明石市健康管理委員会 委員
- ・西宮市教育委員会就学支援委員会 委員
- ・神戸市教育委員会「神戸市立中学校生徒不登校事案に関するいじめ問題追加調査委員会」 委員

- ・あかし男女共同参画センター相談事業スーパーバイザー
- ・(一財)HugLab (ハグラボ) コミュニティカフェ 嘱託心理士
- ・明石市支援対象児童見守り強化事業 支援員
- ・明石みもご心理相談室 代表

【大学運営】

1. 学内委員

- ・IPE 運営委員
- ・入試総務委員
- ・就職委員 (前期)
- ・図書委員 (前期)

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員会 (前期)
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・紀要委員 (前期)
- ・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
- ・広報活動委員会 (重点広報)
- ・入学前課題
- ・子育てサロン運営
- ・明石市との連携調整
- ・学部・研究科実習運営委員会

3. その他

なし

岡村 心平 (おかむら しんぺい)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・感情・人格心理学 I (人格) (人格心理学 (感情・人格心理学))
- ・社会・集団・家族心理学 II (家族) (家族心理学 (社会・集団・家族心理学))
- ・心理演習 I (専門職演習) / 専門職心理演習 I (心理演習)
- ・心理演習 II (専門職演習) / 専門職心理演習 II (心理演習)
- ・心理学入門ゼミナール (心理学入門演習 I)
- ・心理学基礎ゼミナール (心理学基礎演習 I)
- ・心理学発展演習 I
- ・心理学発展演習 II
- ・卒業論文

[大学院]

- ・心理学研究法Ⅱ
- ・心理実践実習Ⅰ
- ・心理実践実習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー
- ・岡村ゼミ学生対象の大学院入試対策勉強会（定期有瀬キャンパスにて）
- ・岡村ゼミ学生対象のフォーカシング体験会（9月13日 有瀬キャンパスにて）
- ・岡村ゼミ学生対象の学外研修・体験学習（7月21日 神戸布引ハーブ園にて）
- ・岡村ゼミ学生対象の学外研修・体験学習（11月3・4日 静岡市 大道芸ワールドカップ in 静岡にて）
- ・岡村ゼミ学生対象の学外研修・体験学習（12月20日 海遊館にて）
- ・道重ゼミ・岡村ゼミ学生対象の学外研修（5月10日 神戸地方裁判所にて）
- ・学生・院生対象の臨床的コミュニケーション勉強会・体験学習（講師・白井博之氏 2月28日 有瀬キャンパスにて）

3. 学外での教育活動

- ・関西大学 教育推進部 非常勤講師（「プロジェクト学習Ⅰ」）
- ・関西大学 人間健康学部 非常勤講師（「導入演習」）
- ・兵庫県立明石西高校「カウンセリングマインド研修」（12月12日 明石西高校にて）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・岡村 心平 (2025). フィールド観察型自己理解ワーク『アニクロ・ズー』の開発と実践：ゼミ課外活動における自由記述の分析を通じた考察 神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要, 18, 7-17.
- ・岡村 心平 (2025). 「道化師になること」のオートエスノグラフィ——欠点・弱点が個性になるプロセスに関する一人称的研究—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 101-115.

3. 学会・研究会発表

- ・岡村 心平・石田 周良・道重さおり (2024). 矯正教育における触法障害者に対するクラウニング講座の実践的研究①：ダイバーシティ社会において「道化師」を演じることの臨床的意義 日本犯罪心理学会第62回大会（9月14日 福山大学にて）
- ・石田 周良・岡村 心平・道重 さおり (2024). 矯正教

育における触法障害者に対するクラウニング講座の実践的研究②：事例検討による抵抗から受容の過程と効果的实践への探求 日本犯罪心理学会第62回大会（9月15日 福山大学にて）

- ・岡村 心平 (2024). SFプロトタイプリングによるフォーカシング実践の専門性と倫理の検討：ジェンドリンの言語論とLLMの比較から 日本人間性心理学会第43回大会（9月28日 KDDI 維新ホールにて）
- ・岡村 心平 (2024). 道化師になることから見たウェルビーイング：弱みを個性に変えるユーモア実践の臨床的意義 山口大学 DX 教育研究会「心理学からみた「ひと」と「まち」の豊かさをもたらすウェルビーイング」について（12月5日 山口大学にて）

4. その他

- ・京都プロセスモデル研究会（運営および発表担当）。

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・学術研究助成基金助成金 基盤研究（B）「荒川修作+マドリン・ギンズ映画資料アーカイブ構築による映画制作過程と身体論の研究」（研究代表者：三村 尚彦 2022年度～2024年度）
- ・関西大学研究拠点形成支援経費「空間と身体感覚の相互作用に基づく空間デザインの研究—荒川修作+マドリン・ギンズ「手続き型建築」の形態を探る—」（研究代表者：三村 尚彦 2023～2024年度）
- ・学外共同研究「矯正教育におけるクラウニング講座の効果とその意義に関する探索的研究」（研究代表者：岡村 心平 2023年10月～2025年3月）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本人間性心理学会常任理事（国際交流委員会委員長，研修委員会委員兼務）
- ・日本フォーカシング協会 国際交流グループ グループリーダー
- ・日本心理臨床学会『心理臨床学研究』査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「臨床心理学入門」（毎日文化センター常設講座 全6回4月27日，5月25日，6月22日，7月27日，8月24日，9月31日 毎日文化センター大阪にて）
- ・「『歴史と文化から見つめる臨床心理学の現在』（毎日文化センター常設講座全6回10月26日，11月30日，12月28日，1月25日，2月22日，3月22日 毎日文化センター大阪にて）
- ・「ボタニカル・クロッシング体験会」（focusing living labo 主催4月28日，6月15日，7月6日，1月21日，2月11日，3月10日 オンライン）
- ・「嫉妬と笑いの心理学」（Teachers 主催 マインドフ

ルネスビレッジ 6月22日, 7月6日, 7月20日, 7月27日, 8月10日 オンライン)

- ・「臨床身体学ラボ・フォーカシング特番」(臨床身体学ゼミ主催 8月14日, 10月17日 オンライン)
- ・「ユーモアと健康の心理学」(神戸新聞文化センター主催 午後のカルチャータイム 第29期 8月28日 神戸三宮 東急REIホテルにて)
- ・「臨床身体学ラボ・1周年記念ギャサリングイベント」(臨床身体学ゼミ主催 10月13日 南青山・TOKYHOYOGAにて)
- ・「フォーカシング・マルシェ+PLUS in 神戸」(フォーカシング若手の会主催 2月1日 オンライン)
- ・「臨床身体学ラボ・フォーカシング特番」(臨床身体学ゼミ主催 8月14日, 10月17日 オンライン)
- ・「臨床身体学ラボ・フォーカシング企画 身体感覚への「リテラシー」を高めるフォーカシング講座実践」(臨床身体学ゼミ主催 2月6日, 2月20日, 3月6日 オンライン)
- ・「臨床身体学×道化師 トークライブ」(臨床身体学ゼミ主催 3月17日 オンライン)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

- ・「身体感覚を重視する視点から「身体と心」の関係に迫りメンタルヘルスの工場をめざす」(『神戸学院大学の Social in』5月24日)
- ・「悪い予感とは、外さなければならない——登山のメタファーと臨床感覚 前半：登山家と臨床家の「勘」」(遠見書房『シンリンラボラボ』特集 対人支援における直感 #02 9月2日)
- ・「悪い予感とは、外さなければならない——登山のメタファーと臨床感覚 後半：予感の身体性と臨床実践」(遠見書房『シンリンラボラボ』特集 対人支援における直感 #02 9月2日)

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』査読
- ・神戸学院大学 心理臨床カウンセリングセンター カウンセリング担当教育職員
- ・focusing living labo 主宰・運営
- ・子育てサロン「まなびー」で特別プログラム「クリスマスロールケーキ&タルトを作ろう」クラウド出演 (2024年12月19日 有瀬キャンパスにて)

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

定政 由里子 (さだまさ ゆりこ)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・社会の中の心理学Ⅱ (心理学入門演習Ⅱ)
- ・社会の中の心理学Ⅲ
- ・社会の中の心理学Ⅳ
- ・心理学専門実習Ⅰ
- ・心理学専門実習Ⅱ
- ・心理学入門ゼミナール (心理学入門演習Ⅰ)
- ・心理学基礎ゼミナール (心理学基礎演習Ⅰ)
- ・心理学専門ゼミナールⅠ (心理学専門演習Ⅰ)
- ・心理学専門ゼミナールⅡ (心理学専門演習Ⅱ)
- ・心理学発展演習Ⅰ
- ・心理学発展演習Ⅱ
- ・卒業論文

【大学院】

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

- ・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー
- ・神戸市医師会看護専門学校 非常勤講師 (「人間と癒し」)

【研究活動】

1. 著書

- ・ヤブコ, M.D. (福井 義一 (監訳) 定政 由里子 (訳)) (2024). 違いの分かるセラピスト 北大路書房

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

なし

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C) 一般「大学生の不

適応症状軽減に資する NET の効果検証を踏まえた NET 活用 Exchange Model の構築」(研究代表者：道免 逸子, 研究分担者：定政 由里子, 2023 年～2027 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・兵庫県公認心理師会 研修委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「Narrative Exposure Therapy for PTSD 集中 2 日間コース」(関西国際大学公開講座 Well-being 研究所主催 9 月 15 日・16 日 KOBE Co CREATION CENTER「ROOMA」にて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』査読
- ・医療法人 篤友会 関西リハビリテーション病院 非常勤臨床心理士

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

清水 寛之 (しみず ひろゆき)

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・認知心理学 (知覚・認知心理学)
- ・知覚・認知心理学 (知覚心理学 (知覚・認知心理学))
- ・専門職心理実習Ⅰ (心理実習)
- ・専門職心理実習Ⅱ (心理実習)
- ・心理学実験Ⅰ (実習) (心理学基礎実験実習Ⅰ (心理学実験))
- ・心理学専門ゼミナールⅠ (心理学専門演習Ⅰ)
- ・心理学専門ゼミナールⅡ (心理学専門演習Ⅱ)

- ・専門職心理実習Ⅲ (心理実習)

【大学院】

- ・心理実践実習 A
- ・心理実践実習 B
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ
- ・心理学特別研究Ⅰ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・卒業生 1 名との心理学勉強会の開催 (4～8 月の隔週に 1 度の割合で 90 分程度、主に大学院進学に向けた心理学の学修に関する情報交換と補習を定期的に行った)

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

- ・郷間 英世・清水 里美・清水 寛之 (編) (2024). 新版 K 式発達検査 2020 による子どもの理解と発達支援——初版から 2020 年版までで変わったことと変わらないこと—— (pp.38-70). ナカニシヤ出版 (「第 2 章 新版 K 式発達検査の開発・改訂における標準化」を分担執筆)
- ・清水 寛之・瀧川 真也・榎 洋一・山本 晃輔 (2024). 読んでわかる心理学 サイエンス社

2. 論文

- ・Nagaya, K., & Shimizu, H. (2024). Probability overestimation induced by icon arrays. *Acta Psychologica*, 248, 104352. <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0001691824002294>
- ・田中 駿・清水 寛之・清水 里美・足立 絵美・郷間 英世 (2024). 人間の精神発達曲線への多項式のあてはめ：新版 K 式発達検査 2020 の標準化資料の分析から 発達心理学研究, 35, 70-79.
- ・Anderson, D., Yamashita, S., Shimizu, H., & Chihara, R. (2024). Who comes to the garden? A closer look at visitors and potential audiences of Japanese Gardens. *Journal of the North American Japanese Garden Association*, 11, 1-6.
- ・村井 佳比子・道城 裕貴・清水 寛之 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育へのイメージと期待——モンテッソーリ教育に関する知識と経験の影響—— 神戸学院大学心理学研究, 7, 1-12.
- ・難波 愛・岡野 太郎・道城 裕貴・清水 寛之 (2024). 大学が主催する地域子育て支援拠点の利用ニーズに関する研究—神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」利用者への面接調査を手がかりに— 神戸学院大学心理学研究, 7, 47-58.

- ・道城 裕貴・清水 寛之・村井 佳比子・難波 愛・中村 敏 (2024). 大学における地域子育て支援拠点事業の特色－神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」のステークホルダーに対する面接調査より－ 神戸学院大学心理学研究, 7, 13-25.

3. 学会・研究会発表

- ・清水 寛之 (2024). 記憶課題における成績予測の正確度と特性的自己効力感の関係——自由再生課題と特性的自己効力感尺度 (GSSES) を用いた検討—— 日本認知心理学会第 22 回大会 (6 月 2 日 帝京大学にて)
- ・Mao, X., Shimizu, H. & Kimura, M. (2024). What Confuses Japanese Expatriates in China? Poster presented at the 33rd International Congress of Psychology. (23rd July. Prague, Czech)
- ・Shimizu, H. (2024). Metacognitive prediction of one's own recall performance and the assumed general average of others. Poster presented at the 33rd International Congress of Psychology. (24th July. Prague, Czech)
- ・Anderson, D., Shimizu, H., & Massam, W. (2024). Generational Differences between Perceptions of Japanese Society and Nostalgic Strength. Poster presented at the 33rd International Congress of Psychology. (24th July. Prague, Czech)
- ・Mao, X., Shimizu, H. & Kimura, M. (2024). What is necessary for Japanese expatriates to overcome their confusions in China? From a perspective of cultural adaptation. Poster presented at the 27th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology. (7th August. Bali, Indonesia)
- ・長谷 和久・清水 寛之 (2024). アイコンアレイがもたらす確率の過大評価 日本心理学会第 88 回大会 (9 月 6 日 熊本城ホールにて)
- ・清水 寛之 (2024). 自他の記憶課題成績の予測と自己概念——自由再生課題と自己概念の明確性尺度 (SCCS) を用いた検討—— 日本心理学会第 88 回大会 (9 月 6 日 熊本城ホールにて)
- ・清水 寛之・村井 佳比子・道城 裕貴 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ (1) モンテッソーリ教育の認知度に関する全国 Web 調査より 日本教育心理学会第 66 回総会 (9 月 15 日 アクトシティ浜松コンgresセンターにて)
- ・道城 裕貴・村井 佳比子・清水 寛之 (2024). 乳幼児の保護者における就学前教育への期待とイメージ (2) モンテッソーリ教育に関する内容説明の前後における意識変化 日本教育心理学会第 66 回総会 (9 月 15 日 アクトシティ浜松コンgresセンターにて)
- ・松岡 利規・田中 駿・清水 寛之・清水 里美・全 有

耳・足立 絵美・郷間 英世 (2024). 新版 K 式発達検査 2020 の成人級課題の因子構造 日本発達心理学会第 36 回大会 (3 月 6 日予定 明星大学にて)

- ・田中 駿・松岡 利規・清水 寛之・清水 里美・全 有耳・足立 絵美・郷間 英世 (2024). 子どもの発達の時代的変遷 (1) 新版 K 式発達検査の各項目の 50% 通過年齢による検討とその意義 日本発達心理学会第 36 回大会 (3 月 6 日予定 明星大学にて)
- ・清水 寛之・田中 駿・松岡 利規・清水 里美・全 有耳・足立 絵美・郷間 英世 (2024). 子どもの発達の時代的変遷 (2) 新版 K 式発達検査の各項目の 50% 通過年齢の年齢段階別の検討 日本発達心理学会第 36 回大会 (3 月 6 日予定 明星大学にて)

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C)「企業博物館の多様なステークホルダーにおける博物館体験の長期記憶に関する研究」(研究代表者：湯浅 万紀子, 2019 ～ 2024 年度)
- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C)「中国の在留邦人の文化適応支援に関する心理学的研究」(研究代表者：毛 新華, 2021 ～ 2024 年度)
- ・科学研究費補助金 基盤研究 (C)「子どもの発達の時代的変遷に影響を与える環境・養育要因の解明と子育て施策への提言」(研究代表者：郷間 英世, 令和 2023 ～ 2026 年度)

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本認知心理学会 理事
- ・関西心理学会 顧問

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「人間の記憶機能への多面的アプローチ」(関西認知発達研究会 4 月 20 日 京都教育大学にて)
- ・日本心理学会第 88 回大会公募シンポジウム「司法矯正分野における認知へのアプローチの実際——認知の基礎と臨床をつなぐ——」(指定討論者 9 月 8 日 熊本城ホールにて)
- ・「未来へつなごう！万博展」講演会「万博の思い出を探る——なぜ記憶に残るのか——」(9 月 1 日 兵庫県立兵庫津ミュージアムにて)

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

- ・学部自己点検評価委員
- ・研究科自己点検評価委員
- ・7 条委員会委員
- ・学生委員（前期）
- ・大学院奨学金変換免除候補者学内選考委員会（前期）

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員会（前期）
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・紀要委員（「神戸学院大学心理学研究」編集委員）
- ・「心理学マニュアル」編集委員
- ・学術講演会担当
- ・子育てサロン運営

3. その他

なし

竹田 剛（たけだ つよし）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・現代社会と心理学
- ・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
- ・心理学専門ゼミナールⅠ（心理学専門演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅡ（心理学専門演習Ⅱ）
- ・社会の中の心理学Ⅲ
- ・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）

【大学院】

- ・心理実践実習Ⅲ
- ・心理実践実習Ⅳ
- ・心理実践実習 C
- ・心理実践実習 D
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ
- ・心理学演習Ⅲ
- ・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動

- ・ウエルカムスタッフ統括

3. 学外での教育活動

- ・社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科 研究員
- ・社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科 登録カウンセラー
- ・名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科 非常勤講師（「臨床心理学特論」「臨床心理学演習」）
- ・臨床心理学系大学院修了生のスーパーバイザー

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

- ・竹田 剛 (2024).「私は絶対に太っている」——神経性やせ症 臨床心理学, 24, 719-722.
- ・岡田 太陽・竹田 剛 (2024). 日常的解離にあたる空想と攻撃性の関連 神戸学院大学心理学研究, 7, 91-99.

3. 学会・研究会発表

- ・竹田 剛・藤本 麻起子 (2024). 低体重者への心理的支援（文献調査から）：現状と挑戦 第 27 回日本摂食障害学会学術集会（9 月 7 日 明治学院大学にて）
- ・關川 ひより・竹田 剛 (2024). 通級指導教員の援助行動を行う上での認知・行動プロセス 日本心理臨床学会第 43 回大会（8 月 23 日 パシフィコ横浜にて）

4. その他

- ・竹田 剛 (2024). 摂食障害予防教育教材『キューアード』.
- ・竹田 剛 (2024).『キューアード』解説小冊子.

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 若手研究「摂食障害予防教育に関するゲーミング教材の開発と評価」（研究代表者：竹田 剛，2020 ～ 2024 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本認知療法・認知行動療法学会 『認知療法研究』非常勤編集委員
- ・日本摂食障害学会 評議員
- ・日本摂食障害協会 フェロー
- ・日本心理学会第 88・89 回大会 実行委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・Instagram ライブ「人からされて うれしかったこと いやだったこと」（日本摂食障害協会主催 5月18日 オンライン）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『認知療法研究』論文査読
- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読
- ・世界摂食障害アクションデイ 2024 運営スタッフ

【大学運営】

1. 学内委員

- ・学部自己点検評価委員
- ・同和問題部会委員
- ・ハラスメント防止委員
- ・不正防止計画推進委員
- ・IPE 運営委員
- ・学生委員
- ・学生の未来センター運営委員（前期）
- ・国際交流支援委員
- ・利益相反マネジメント委員
- ・情報支援センター運営委員（前期）
- ・キャリア教育センター委員
- ・生涯学習委員（前期）
- ・大学院奨学金返済免除候補者学内選考委員

2. 学部内委員

- ・教育・研究委員会委員
- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・卒論委員（前期）
- ・紀要委員（後期）
- ・学部・研究科実習運営委員

3. その他

- ・心理学検定係
- ・就職（一般）対策係

山本 恭子（やまもと きょうこ）

【教育活動】

1. 担当科目

【学部】

- ・感情・人格心理学Ⅱ（感情）（感情心理学（感情・人格心理学））

- ・心理学入門実習 D（心理学入門実習Ⅵ）
- ・心理学専門実習Ⅰ
- ・社会の中の心理学Ⅰ
- ・社会の中の心理学Ⅲ
- ・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅠ（心理学専門演習Ⅰ）
- ・心理学専門ゼミナールⅡ（心理学専門演習Ⅱ）

【大学院】

- ・心理学研究法Ⅰ
- ・心理学演習Ⅰ
- ・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

なし

3. 学会・研究会発表

- ・山本 恭子・木村 昌紀 (2024). 今ここで他者の感情をいかに制御するのか——感情による制御方略と非言語行動の差異—— 日本感情心理学会第32回大会（6月1日 大阪体育大学にて）
- ・黒川 優美子・山本 恭子・秋山 学 (2024). 否定的認識の程度が不正行為の表出に及ぼす影響——利己的誤りからの検討—— 日本心理学会第88回大会（9月8日 熊本城ホールにて）

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

- ・科学研究費補助金 基盤研究（C）「対人感情制御における感情表出の機能的役割の解明」（研究代表者：山本 恭子，2021～2024年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

- ・日本感情心理学会『Emotion Studies』編集委員長
- ・『心理学研究』論文査読
- ・関西心理学会 委員
- ・明石市ホテル等建築審査会 委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

- ・「微笑みのひみつ——表情の心理学——」講師（神戸市立須磨翔風高等学校大学見学会 10 月 2 日 有瀬キャンパスにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

- ・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員

- ・入試問題副委員長

2. 学部内委員

- ・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
- ・研究計画書作成支援部会委員

3. その他

なし

「神戸学院大学心理学研究」投稿規程

2018年4月1日
制定

改正 2018年12月5日
改正 2019年6月5日
改正 2023年9月6日
改正 2024年3月6日

ついて、研究状況、主要成果、問題点等を解説し、研究の意義と今後の課題を論じる。査読有。

- ④海外研究・国内研究報告
- ⑤心理学研究科の修士・博士論文の要約
- ⑥心理学部優秀卒業論文
- ⑦教員の活動実績（研究実績、教育実績、社会貢献、競争的研究資金獲得実績、大学運営）
- ⑧今年の主な行事
- ⑨その他、紀要の編集上必要と認められるもので、心理学部教授会の承認を得たもの

第1条（目的）

神戸学院大学心理学部における教育・研究成果の発表を目的として、「神戸学院大学心理学研究」（以下「心理学研究」という）を発行する。

第2条（編集等の機関・原稿の採択）

1. 心理学研究の企画、原稿の募集及び編集は、心理学研究編集委員会（以下「委員会」）が行い、掲載可否の権限および編集責任をもつ。
2. 委員会は、心理学部教授会の議を経て構成され、委員長は互選とする。

第3条（執筆者の資格）

1. 本誌に論文を投稿できる者は以下の通りとする。
 - (1) 心理学部専任教員
 - (2) 心理学部実習助手
 - (3) 心理臨床カウンセリングセンター職員（インターンワークラー・心理カウンセラー）
 - (4) 心理学研究科の学生
 - (5) 心理学部教授会の承認を得た者
2. 共著執筆論文の投稿については、筆頭執筆者が(1)～(5)のいずれかである場合に限る。(1)～(5)以外の者も、第2著者以下であれば、共著者となれる。(5)については、専任教員を共著者に含める。

第4条（原稿の要件）

心理学研究に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

- (1) 他誌に未掲載であり、かつ本誌以外に投稿をしていない論文であること。
- (2) 完成原稿であること。
- (3) 原稿の種類は次のいずれかに該当するものであること。
 - ①原著論文：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。
 - ②研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての研究報告、速報性を重視した研究報告、萌芽的発想に立つ報告。査読無。
 - ③展望論文：心理学の最近の重要テーマに

第5条（審査）

原著論文は、専門家による3人（神戸学院大学心理学部専任教員より1人以上、学外より1人以上）のレフェリーを設け、その査読の結果をもとに、委員会において採否を決定する。

第6条（倫理的配慮）

論文の内容は、研究対象者や被験体の保護を含め、倫理的配慮が必要である。原稿は、神戸学院大学研究倫理綱領および公益社団法人日本心理学会倫理規程に則ること。

第7条（原稿の形式）

原稿は、別に定める「神戸学院大学心理学研究投稿細則」によるものとする。

第8条（発行）

「神戸学院大学心理学研究」は、年2回の発行とし、各年度の原稿募集・投稿期限・発行日は委員会が決定し、公表する。

第9条（校正）

校正は、2校までとする。その際、大幅な修正は原則として認めない。

第10条（公開方法）

「神戸学院大学心理学研究」の目次および掲載論文等は、原則として心理学部のホームページ及び神戸学院大学機関リポジトリで公開する。

第11条（著作権）

掲載された論文の著作権は神戸学院大学心理学部に帰属する。

第12条（改廃）

この規程は、心理学部教授会の議を経て改正することができる。

【附則】

本規程は2018年4月1日から施行する。

【附則】

本規程は 2018 年 12 月 5 日から施行する。

【附則】

本規程は 2019 年 6 月 5 日から施行する。

【附則】

本規程は 2023 年 9 月 6 日から施行する。

【附則】

本規程は 2024 年 3 月 6 日から施行する。

「神戸学院大学心理学研究」投稿細則

2018 年 4 月 1 日

制定

改正 2020 年 2 月 21 日

改正 2021 年 10 月 27 日

改正 2022 年 12 月 7 日

改正 2023 年 6 月 14 日

改正 2023 年 9 月 6 日

改正 2024 年 3 月 6 日

第 1 条

投稿を希望するものは以下の諸要項にそって、MS Word で作成した原稿を電子メールで「神戸学院大学心理学研究」編集委員会（以下、「委員会」という）に送付すること。

第 2 条 論文の種類と原稿枚数

1. 原著論文：原則として、問題提起と実験、調査、事例などに基づく研究成果、理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。掲載時、A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。
2. 研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加、吟味、新事実の発見、興味ある観察、少数の事例についての研究報告、速報性を重視した研究報告、萌芽的発想に立つ報告。査読無。掲載時、A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。
3. 展望論文：心理学の最近の重要テーマについて、研究状況、主要成果、問題点等を解説し、研究の意義と今後の課題を論じる。査読有。掲載時、A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。

原稿枚数は、表題、著者名、所属機関名、要約とキーワード、本文、引用文献、脚注、図表、付録などすべてを含め、論文種類ごとの規定ページ内におさめる必要がある。

第 3 条 論文の形式

1. 提出原稿は A4 用紙を縦に用い、各ページは、上下、左右に 3 cm 以上の余白を取り、40 文字×30 行（1200 字）とし、10.5 ポイント以上のサイズの文字を用いる。
2. 英文は、一般的フォントおよび 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用し、行間はダブルスペースとする。1 ページに入る行数はフォント、サイズにより異なるが、20～23 行を目安とする。
3. 原稿には通しページを付ける。
4. 要約は日本語、英語どちらでも構わない。和文は 400 字程度、英文は 100～200 語とする。
5. 原稿作成上の規定や表記法、文献の引用などについては、日本心理学会の「執筆・投稿の手びき（2022 年版）」を参照のこと。

第 4 条 提出様式

投稿にあたっては、以下のものを委員会に電子メールで送付する。以下の 1 から 6 については、「神戸学院大学心理学研究」ホームページにある原稿テンプレートに基づき作成することが望ましい。

1. 表紙（投稿区分、表題、著者名、連絡先、3 ないし 5 つのキーワード）
和文原稿の場合は、論文題目の欧文訳と著者名のローマ字表記を併記すること。
2. 本文
3. 引用文献
4. 要約
5. 表・図
6. 図のキャプション
7. 倫理チェックリスト：「神戸学院大学心理学研究」ホームページよりダウンロードし、記入の上、提出すること。
8. 承諾書：教員が指導学生の卒業論文などのデータをもとに論文を作成し、その学生が共著者に含まれない場合は、学生からの承諾書を提出する。

第 5 条 査読の手続き

1. 査読者の選定
委員会は査読者 3 名を選定する。
2. 査読者による査読
受稿論文は査読者 3 名に、著者情報を伏せて依頼され、査読される。査読者名は著者には公表されない。
3. 査読者による判定
査読者による評価に基づき、判定が行われる。
 - i) このままで掲載してよい
 - ii) 掲載してよいが、意見を助言する
 - iii) 意見に基づき訂正すれば、掲載する
 - iv) 掲載しない
4. 論文の改稿
受稿論文は、査読者のコメントを付けて、期限つきで改稿を求められる。
5. 改稿論文の確認
著者によって修正・加筆され再提出された改稿論文は、委員会が確認する。論文によっては、再度査読され、修正が求められる場合もあり得る。
6. 掲載、不掲載の決定
掲載、不掲載は、すべての査読者からの評価が得られた後、委員会が掲載、不掲載を判定する。

第 6 条

この投稿細則は、心理学部教授会の議を経て改正することができる。

附則

この投稿細則は、2018 年 4 月 1 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2020 年 2 月 21 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2021 年 10 月 27 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2022 年 12 月 7 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2023 年 6 月 14 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2023 年 9 月 6 日から施行する。

附則

この投稿細則は、2024 年 3 月 6 日から施行する。

神戸学院大学心理学研究 第7巻 第2号
Kobe Gakuin University Journal of Psychology,
Volume 7, Number 2

発行日	2025年3月21日
編集委員	竹田 剛 清水 寛之
編集事務	心理学部長室・心理学部実習助手
発行者	神戸学院大学心理学部
所在地	〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518 TEL：078-974-1551 URL：https://kobegakuin-psy.jp/
制 作	交友印刷株式会社 〒650-0047 神戸市中央区港島南町 5 丁目 4-5

